山梨県韮崎市

Takisaka SITE

滝坂遺跡

水神二丁目青坂地内

茅野北杜韮崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

韮崎市教育委員会
山梨県中北建設事務所
財団法人山梨文化財研究所

山梨県韮崎市

Takisaka SITE

滝　坂　遺　跡

水神二丁目青坂地内

茅野北杜韮崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

韮崎市教育委員会
山梨県中北建設事務所
財団法人山梨文化財研究所

例　言

1　本書は、山梨県韮崎市水神二丁目青坂地内に所在する、滝坂遺跡の発掘調査報告書である。調査は、茅野北杜韮崎線道路改良工事に先立ち実施された。

2　発掘調査および報告書作成は、山梨県中北建設事務所から委託を受けた、財団法人山梨文化財研究所が行った。

3　発掘調査は、平成19年4月16日～平成20年1月31日に実施した。

4　本書の執筆・編集の分担は以下の通りである。

執筆・編集　　入江俊行（㈶山梨文化財研究所）
第3章第3節（2）　長尾宗史（駒澤大学大学院博士後期課程）
第3章第4節　　保坂康夫（山梨県立考古博物館）
第4章第1節　　河西　学（㈶山梨文化財研究所）
第4章第2節　　パリノ・サーヴェイ㈱

5　発掘調査および報告書作成作業等において、以下の業務を各機関に委託した。

基準点測量・空中写真撮影・遺構図面作成　㈱テクノプランニング
金属製品保存処理　㈶山梨文化財研究所
放射性炭素年代測定・樹種同定・種実同定　パリノ・サーヴェイ㈱

6　出土遺物について、次の各氏からご指導を頂いた。（敬称略）

石器の石材について　㈶山梨文化財研究所　河西学
陶磁器について　　東京大学埋蔵文化財調査室　堀内秀樹

7　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい。（敬称略・順不同）

韮崎市教育委員会、山下孝司、閏間俊明、萩原三雄、鈴木稔、畑大介、宮澤公雄、櫛原功一、平野修、中山千恵、室伏徹、西野吉論、杉本悠樹、副島蔵人

8　引用・参考文献、註はそれぞれ節末等に示した。

9　本書に関わる出土品および図面・写真等の諸記録類は、韮崎市教育委員会が保管している。

凡　例

1　遺構全体図に示したX・Y数値は、平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36°　00′　00″　東経138°　00′　00″）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図の北を示す方位は、座標北である。

2　グリッドは調査区北西隅の(X=－31220,Y=－5480)地点を原点として、10mのメッシュに設定した。南北方向を1～23、東西方向をA～Hとした。

3　遺構の縮尺は統一していないが、各図において縮尺を明示している。
遺物の縮尺は、土器、石器、陶磁器、金属製品いずれも1/3を基本とした。それ以外の縮尺のものについても図において縮尺を明示している。

4　土層説明における土色表示は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』（2006年版）を使用した。

5　第1図は国土地理院発行の25000分の1地形図「韮崎」を使用した。

6　写真図版の縮尺は統一されていない。

7　遺物写真図版に示した番号は「第○図の○番」のように、対応する図版番号を示す。（例35-1→第35図の1）

目　次

例言
凡例
第１章　経　過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　第３節　整理作業等の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の方法と成果 …… 4
　第１節　調査の方法 …… 4
　第２節　層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 7
　　(1) 溝跡 …… 7
　　(2) 土坑 …… 12
　　(3) 柵列跡・掘立柱建物跡 …… 14
　　(4) ピット、遺構外出土遺物・表面採集遺物 …… 15
　第４節　男女倉型有樋尖頭器 …… 17
第４章　自然科学分析 …… 19
　第１節　滝坂遺跡のテフラ …… 19
　第２節　滝坂遺跡の自然科学分析 …… 25
第５章　総　括 …… 29
遺構図
遺物図
遺構遺物一覧表
写真図版
報告書抄録
奥付

図版目次

第１図　滝坂遺跡位置図 …… 3
第２図　滝坂遺跡遺構配置図 …… 5・6
第３図　滝坂遺跡出土の男女倉型有樋尖頭器 …… 18
第４図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（A 地点）…… 21
第５図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（B 地点）…… 22
第６図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（C 地点）…… 23
第７図　１号溝・12号土坑平断面図 …… 31
第８図　２号溝平断面図 …… 32
第９図　３号溝平断面図 …… 33
第10図　４号溝平断面図 …… 34
第11図　５号溝平断面図 …… 35
第12図　６・７号溝平断面図 …… 36
第13図　８・13号溝平断面図 …… 37
第14図　９・10号溝平断面図 …… 38
第15図　11号溝平断面図 …… 39
第16図　12号溝平断面図 …… 40
第17図　14号溝（谷）平面図 …… 41
第18図　14号溝（谷）断面図 …… 42
第19図　15・17号溝平断面図 …… 43
第20図　16号溝平断面図 …… 44
第21図　１～６号土坑平断面図 …… 45
第22図　７～11・13・14・15号土坑平断面図 …… 46
第23図　１号柵列、１・２号掘立柱建物平面図 …… 47
第24図　３・４・５号掘立柱建物平面図 …… 48
第25図　１・２・３号掘立柱建物エレベーション図 …… 49
第26図　４・５号掘立柱建物エレベーション図 …… 50
第27図　６号掘立柱建物平面図・エレベーション図 …… 51
第28図　ピット位置図一覧 …… 52
第29図　ピット位置図（１）…… 53
第30図　ピット位置図（２）…… 54
第31図　ピット位置図（３）…… 55
第32図　ピット位置図（４）…… 56
第33図　ピット位置図（５）…… 57
第34図　遺物（２～８号溝）…… 60
第35図　遺物（９～11・14号溝(谷)１）…… 61
第36図　遺物（14号溝(谷)２）…… 62
第37図　遺物（14号溝(谷)３）…… 63
第38図　遺物（14号溝(谷)４、15・16号溝）…… 64
第39図　遺物（２・７・９号土坑、137・142・165・167・271・273号ピット、遺構外）…… 65
第40図　遺物（217号ピット、表土）…… 66
第41図　遺物（金属製品）…… 67
第42図　遺物（石器(１)）…… 67
第43図　遺物（石器(２)）…… 68
第44図　遺物（石器(３)）…… 69
第45図　遺物（石器(４)、石造物、石・土製品）…… 70

表目次

第１表　火山ガラス屈折率測定値 …… 19
第２表　火山ガラス・重鉱物などの計測粒数 …… 20
第３表　放射性炭素年代測定結果 …… 28
第４表　暦年代較正結果 …… 28
第５表　樹種同定結果 …… 28
第６表　ピット一覧 …… 58
第７表　遺物観察表（土器・陶磁器類）…… 71
第８表　遺物観察表（石器）…… 76
第９表　遺物観察表（石造物、石・土製品）…… 76
第10表　遺物観察表（金属製品）…… 76

写真図版目次

図版１　滝坂遺跡調査区全景
図版２　調査前状況　調査区と周辺　調査風景　調査風景
　９(左)・10号溝(右)　14号溝(谷)
　14号溝遺物出土状況　14溝深掘部分
図版３　２号土坑出土炭化物　７号土坑遺物出土状況
　８号土坑小礫検出状況　10号土坑断面
　10号土坑下層炭化物出土状況　４号土坑　15号土坑
　１号掘立柱建物
図版４　２号掘立柱建物　３号掘立柱建物　４号掘立柱建物
　165号ピット遺物出土状況
　273号ピット遺物出土状況
　217号ピット遺物出土状況　217号ピット礎板石
　発掘調査参加者
図版５　２号溝　４号溝　５号溝　８号溝　９号溝　10号溝
　11号溝
図版６　14号溝(谷)
図版７　14号溝(谷)
図版８　15号溝　16号溝　２号土坑　７号土坑　９号土坑
　137号ピット　142号ピット　165号ピット
　167号ピット　217号ピット　271号ピット
　273号ピット　遺構外　表土　金属製品　石造物、
　石・土製品
図版９　石器
図版10　1.モミ属(200号ピット;柱材？)
　2.ブナ属(200号ピット;柱材？)
　3.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2号土坑;No.1172)

第1章　経　過

第1節　調査の経過

今回調査対象となった滝坂遺跡は、韮崎市水神二丁目青坂地内に位置する。遺跡は韮崎市の中央部を南北に細長く走る七里岩台地上に立地している。同じ台地上で近接する遺跡としては、著名な坂井遺跡（縄文・古墳・平安）や坂井南遺跡（縄文、古墳、平安）、天神前遺跡（縄文）、新府城跡（中世）などがあり、これらを俯瞰すると、北から新府城跡、天神前遺跡、坂井遺跡、坂井南遺跡とならぶ。滝坂遺跡はさらにその南側の緩斜面上に位置する。この斜面は南西に向かって緩い傾斜となり、途中釜無川左岸に向かって落ちる断崖がある。

調査当該地は従来畑地として利用されてきた。平成18年に県道整備事業として、茅野北杜韮崎線道路改良工事が行われるに先立ち、韮崎市教育委員会によって試掘調査が実施された。

その結果、土坑または溝と判定できる遺構が数基確認され、遺物は地表面に土器・陶磁器片などが散布していた。試掘トレンチ内の遺物は些少であったが、打製石斧などの石器が検出された。このような成果から、韮崎市教育委員会では工事着工前に同地内のうち、約9200㎡を調査対象とした埋蔵文化財の緊急発掘調査が必要であると判断した。

事業主体者の中北建設事務所、韮崎市教育委員会で協議を行った結果、財団法人山梨文化財研究所と三者協定を締結し、調査にあたることとなった。

調査体制

○業務委託者　中北建設事務所

○業務受託者及び調査実施者　財団法人　山梨文化財研究所（理事長　冲永荘一）

○調査担当者　櫛原功一（財団法人　山梨文化財研究所　考古第２研究室長）
　　中山千恵（財団法人　山梨文化財研究所　研究員）
　　入江俊行（財団法人　山梨文化財研究所　調査員）

○調査員　長尾宗史（駒澤大学大学院博士後期課程）

○発掘調査参加者
秋山髙之助、伊井實、飯野金雄、飯室恵子、大芝大雄、大森隼、小沢正臣、河西悦子、河西久洋、河西元彦、木尾美樹、河野敏彦、坂本行臣、鮫田勝夫、茂内達、清水英二郎、清水征二、清水千三、清水泰子、清水恵、諏訪善生、醍醐三郎、髙嶋稔、武井智美、武井美知子、田中健二、田中美代子、筒井聡、手塚松雄、東條幹雄、中込政吉、野崎和男、長谷川規愛、早川栄蔵、早川万千代、原島進、平賀早苗、藤原五月、藤巻英子、藤巻敏弥、保坂菊雄、保坂忠、宮川昌蔵、望月勝子、守屋敏子、山本邦春、由井悦雄、由井秀子、渡辺勝明

○整理作業参加者
岩崎満佐子、小澤惠津子、角屋さえ子、梶原薫、工藤忠誠、小林典子、小林祐子、斉藤ひろみ、須田泰美、竜沢みち子、田中真紀美、手塚理恵、手塚由美、西海真紀、原野ゆかり、林紀子、広瀬悦子、藤井多恵子、柳本千恵子、矢房静江、横田杏子

第2節　発掘作業の経過

平成19年
4月10日　事前協議。
4月16日　調査区内に残存している樹木の抜根・運搬を重機にて行う。
4月18日　重機にて表土掘削を開始。遺構検出作業。
5月22日　14溝（埋没谷）の掘削開始。
6月20日　一部残っていた表土を重機にて掘削。

7月6日　第1回目の空撮を実施。
7月13日　14溝（埋没谷）の調査終了。
7月14日　㈱小沢工業所による排水溝工事に伴って道路の使用が不可能になったため、
　　工事終了まで発掘調査を休止。
8月27日　発掘調査再開。
9月18日　2溝調査終了。
9月19日　第2回目の空撮を実施。Ⅲ区調査開始。
10月3日　遺構の無い部分に地質調査用のテストピットを2ヶ所設定して掘削する。
10月10日　土壌サンプル摘出作業。9溝・10溝の調査。
11月8日　第3回目の空撮を実施。Ⅳ区調査開始。建物址の調査。4溝・5溝の調査。
12月　　6溝・7溝・18溝の調査。
平成20年
1月18日　第4回目の空撮を実施。
1月31日　発掘調査終了。

第3節　整理作業等の経過

発掘調査終了後、報告書作成のための整理作業を山梨文化財研究所内（笛吹市石和町四日市場1566）で実施した。

出土遺物は洗浄した後、「遺跡名」「遺構名」「取上番号」等の情報をポスターカラーで注記した。14号溝の取上げ番号500という情報をもった遺物ならば、「タキサカ14ミゾ500」という表記になる。ただし、微小遺物に関しては、「タキサカ」の表記を「タキ」とするなどの省略がある。そして、接合関係を検討した後、抽出した遺物の実測・トレースを行い、Adobe InDesignCS（version3.0J）を使用して、版下を作成した。遺物の写真撮影は、PENTAX Corporation製のデジタル一眼レフカメラK10Dを使用した。

遺構図面の整理については、トータルステーションで測量したデータを（株）CUBIC製の「遺構くん」を用いて図面整理を行った。これらの作業と並行して、写真整理、自然化学分析、保存処理、原稿執筆を行った。

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

滝坂遺跡の所在する韮崎市は、山梨県の北西の一角を占め、北に北杜市、東に甲斐市、南に南アルプス市とそれぞれ隣接している。市内の東西にはそれぞれ釜無川、塩川が南流しており、それら両河川に挟まれた南北に長い舌状の韮崎台地は、古くからその形状から「七里岩」とも呼ばれてきた。川の浸食により形成された断崖は、平地に立って横から見ると、屏風のようにも見える。また、鳥瞰すると八ヶ岳南麓の先端に位置することがわかり、八ヶ岳岩屑流によって形成されたといわれている。

この台地上は起伏に富んだ地形を呈し、主に畑地や果樹園として利用されている。近年では、工場や住宅街なども建てられて、開発の対象にもなってきている。

今回、調査の対象となった滝坂遺跡は、畑地として利用されてきた地点であり、北東から南西へかけて緩やかに降っていく斜面地となっており、かねて土器片などの遺物が散布することが認められていた。地形上、夏から秋にかけての大雨時には、雨水が濁流となって西側の低い部分へ流れ込み、多くの土砂が下方へ流されることもあり、本遺跡に散布する遺物の出自を考える上で、留めておくべき視点となる。

本遺跡はこのような地点に立地し、標高は最も高い調査区の北東隅で422.9m、最も低い南西隅で414.1mを測る。

第2節　歴史的環境

滝坂遺跡の所在する韮崎台地上には、既往の調査結果から多くの遺跡が確認されている。市域の中では古くから著名な遺跡として、坂井遺跡がある。坂井遺跡は、大正年間から地元の志村滝蔵氏によって遺物が収集され、昭和17年～31年にかけて数次にわたる発掘調査が実施された。出土遺物は縄文時代中期後半の曽利式土器が主体を占めていたが、狢沢式期の埋甕炉を持つ住居も1軒発見されている。後・晩期の遺物はほとんど見られず、中期中葉～後葉を中心とす

1：滝坂遺跡　2：坂井南遺跡　3：坂井遺跡　4：新府城跡　5：丸山墓址　6：能見城跡　7：宮ノ前遺跡
8：後田遺跡　9：伊藤窪遺跡　10: 伊藤窪第２遺跡　11: 伊藤窪第３遺跡　12: 石水遺跡　13: 松雲寺墓跡
14: 水上氏屋敷跡　15: 駒井氏屋敷跡　16: 北下條墓址　17: 殿田屋敷跡

第１図　滝坂遺跡位置図

る遺跡である。戦前～戦後にかけて調査された遺跡ということもあって、山梨県内では先駆的な発掘調査事例として位置付けられる。遺跡は現在も畑地であり、志村家の敷地内に設けられた坂井考古館には出土遺物や発掘調査の記録などが保管され、郷土の歴史を学べる場所として現在に至るまで利用されている。

坂井遺跡のすぐ南側には、県内でも有数の古墳時代の集落跡である坂井南遺跡が位置している。これまでに7次にわたって発掘調査が行われ、古墳時代前期の竪穴住居103軒、方形周溝墓12基のほか、縄文中期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡7軒、中世の遺構としては、集積土坑2基、竪穴状遺構3棟などが調査されている。特に7次調査において、12号溝として報告された断面V字形の薬研堀は、中世の館跡の一部であった可能性が提示されている。新府城との関連を示す資料は今のところ無く、新府城成立時より若干時代の遡る在地領主の館跡と想定されており、当該地内における中世遺跡のあり方を考える上で、重要な発見であるといえる。

武田氏最後の居城となった新府城は、坂井遺跡から北方へ約1kmの地点にあり、小円頂丘上に位置する。武田勝頼は長篠の戦いに敗れた後、それまでの本拠地であった躑躅ヶ崎館（甲府市）から、新府城（韮崎市）へと領国経営の中心の移転を図った。天正9年2月に築城工事が始まり、同年12月には移転を行ったとされるが、翌天正10年3月には、織田信長の侵攻と相まって、自ら新府城に火を放って落城した。その後数日のうちに勝頼一行は田野（甲州市大和町）において自害し、武田氏は滅亡した。その後も、信長が本能寺の変で落命し、徳川家康と北条氏直が甲斐をめぐって争った際にも、家康が新府城に本陣をおいて、若神子に陣取る氏直と対峙するといった経緯がある。しかし、このような実際に城が機能していた頃の絵図等は残存しておらず、往時がどのような景観であったのかは窺いすることはできないが、江戸時代になると軍学の隆盛もあって、絵図などに城の構造が記され、現在の新府城跡の本丸・二の丸・三の丸・大手・搦手等の名称や位置関係は、江戸期になって意味付けられた認識をなぞるものであったとされる。新府城跡は1973年に国史跡に指定され、1998年から史跡環境事業に伴う発掘調査が行われている。これまでの調査では、遺構の検出が少ないことや、勝頼が自ら火を放ったとされる割に、検出される焼土層や炭化材も少ないことから、域内に建てられた建築物がそれほど多くないことが想定されている。

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

調査区内に残存する樹木の切り株等を重機によって抜根･運搬した後､表土を掘削した。表土も南側から北側に向かって順次重機で剥ぎ、調査区外の残土仮置き場（工事予定地内）に運搬した。

また、当該地では工事に先立ち、大雨時の排水を考慮し、コルゲートU字フリューム管を2本（東西に1本づつ南北方向に）敷設する設計となっていた。それらのうち、東側に敷設する予定であった管が調査区内に位置していたため、この管の敷設予定部分､すなわち調査区の東側から調査を優先して行うこととなった。しかし､調査区の北端から谷（調査時は溝と認識、14号溝）が検出されるに至り、フリューム管敷設予定部分の調査の遅延が予期されることから、敷設位置の設計変更がなされた。すなわち、東側の管の敷設を中止して西側に並行して2本敷設することとなり、南側から敷設工事が開始された。

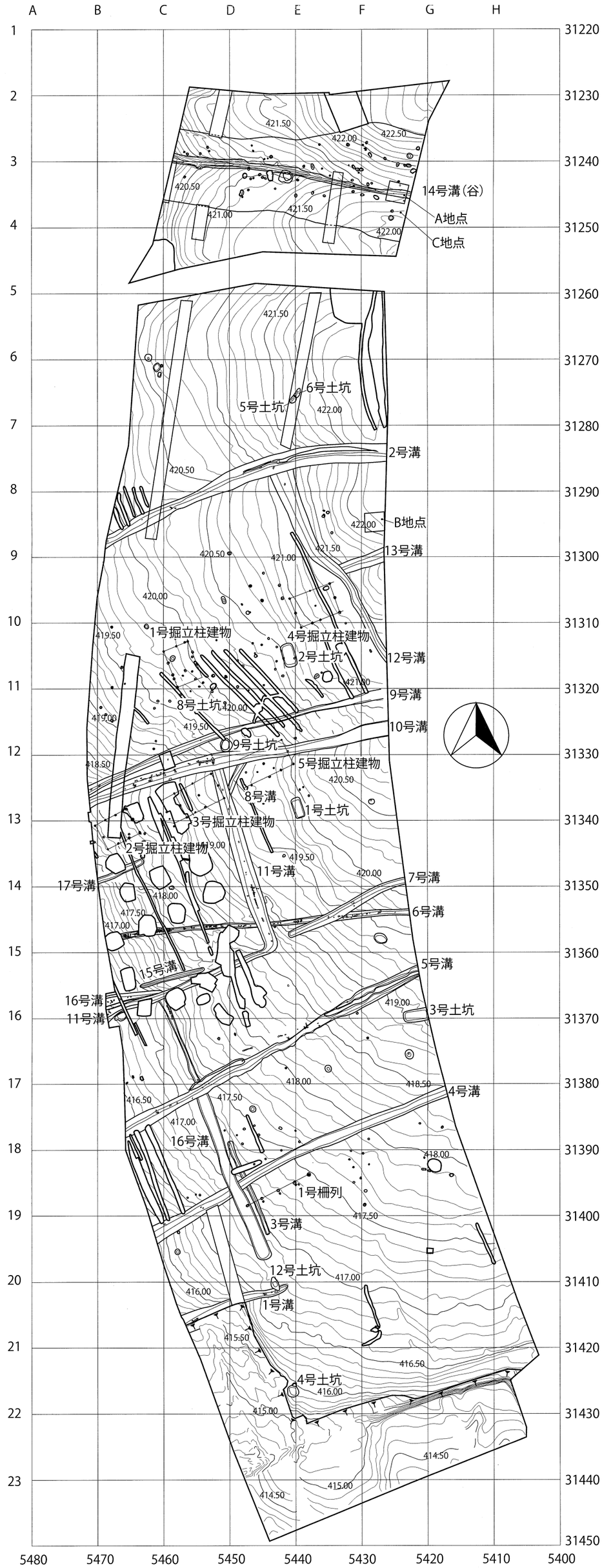
この設計変更により、調査区の北端部分の一部をフリューム管が通過することとなったため、調査の手順を変更し、北側から南側に向けて順次調査していく方針に切り替えざるを得なかった。

グリッドは北西隅を基点として、10mメッシュの杭打ちを行い、南北方向を北からＡ１、Ａ２、Ａ３…、東西方向を西からＡ１、Ｂ１、Ｃ１…と呼称した。また、必要に応じて、各グリッド内を4分割し、北西を1、北東を2、南西を3、南東を4というように、グリッドに枝番号を付した。

遺構調査はすべて人力によって行い、遺構の名称は確認されたものから順に付していった。複数の遺構の重複がみられた場合は、遺構表面の覆土を観察し、構築年代の新しいものから順次行った。表面の観察が困難なものに関してはサブトレンチやベルトを設定して、断面観察により新旧関係を判断した。

出土した遺物は、原位置が判明する直径約3cm以上の大きさを測るものを対象に、トータルステーションによって、各出土地点ごとにナンバリングして取り上げた。その総数は1,428点である。

遺構の測量については、トータルステーションと空撮による写真測量を併用し、1/10･1/20の縮尺を基本としている。測量に用いた機器およびシステムは以下のとおりである。



第２図　滝坂遺跡遺構配置図

○トータルステーション　TOPCON GTS-313
○データコレクタ (PC)　NEC ShieldPRO
○取り上げ・図化ソフト　株式会社 CUBIC 遺構くん cubicC タイプ Ver.3.01

第2節　層　序

現況は畑地で、北東から南西にかけて緩く傾斜し、調査区北東隅と南西隅との比高差は 8.8m ほどを測る。表面の耕作土を第1層とし、0.3 ～ 0.5m ほど掘り下げた地点で遺構確認面であるローム層に達する。なお、調査区の南端から南西端にかけての部分は、ちょうどL字状に切土され、遺構確認面から 1.0m ほど下まで削平を受けており、切土をされる以前の遺構は消失した格好となっていた。

一方、調査区北端に位置する谷の部分では、耕作土である表土の下に黒色土が堆積しており、その下にローム層がみられた。この黒色土中からは縄文時代の土器片が多くみつかっており、ほとんど縄文中期～晩期に属する。こうしたことから、谷が縄文晩期の頃にはほぼ埋没していたことが分かる。なお、若干ながら近世以降の陶磁器片、鉄製品なども検出されたが、混入品であろう。また、黒色土下のローム面からも土坑やピットが確認されている。

土層の色調標記は『新版標準土色帖』28 版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　小山正忠・竹原秀雄編・著 2006.2）に準拠している。

調査区全般
第1層　灰黄褐色土（10YR4/2、しまりややあり、粘性ややあり、小礫含む、表土）
第2層　にぶい黄褐色土（10YR5/4、しまり強、粘性やや強、遺構検出面）

谷部分
第1層　灰黄褐色土（10YR4/2、しまりややあり、粘性ややあり、小礫含む、表土）
第2層　黒褐色土（10YR3/1、しまりあり、粘性あり、小礫含む、土器片・石器片含む）
第3層　にぶい黄褐色土（10YR5/4、しまり強、粘性やや強、遺構検出面）
第4層　浅黄色土（2.5Y7/4、しまり強、粘性強、粘土層）
第5層　明黄褐色土（10YR5/6、しまり強、粘性強、直径 10 ～ 20cm の礫を多量に含む）

第3節　遺構と遺物

(1) 溝跡

1号溝〔第7図〕

C~D20 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-69°-E を測り、概ね東西方向に延びる。西側は調査区外に延び、撹乱により一部削平される。東側は 12 号土坑により一部破壊される。調査区内で確認された規模は、長さ 16.5m、幅 1.4m、深さ 0.14m ほどを測る。覆土は黒褐色土の単層で、部分的に拳大から人頭大の礫が含まれる。溝底面に接地するものもあるが、底面を離れているものも含まれるので、溝の機能時から埋没過程の中で、投げ込まれたものと考えられる。

遺物は、出土していない。溝の構築年代は不明。

2号溝〔第8図〕

B8、C7・8、D7、E7、F7 グリッドに位置する。平面形は北に向かって弧を描く格好で、断面形は皿状を呈する部分と有段状の部分とがある。直線的な部分での主軸方位は N-72°-E を測り、概ね東西方向に延びる。両端は調査区外に延び、12 号溝を切って構築されているようであるが、時期差はほとんどないものと推定される。一部、畝に切られる。調査区内で確認された規模は、長さ45.4m、幅1.4m～2.8m、深さ0.37m ほどを測る。覆土はベルトを設定した地点により若干の性格の違いがみられるようであるが、ローム粒、焼土粒、炭化粒などを含んだ暗褐色土が主体となる。わずかに拳大から人頭大の礫が含まれるが、いずれも底面には接しておらず、埋没過程で中途投げ込まれたものと考えられる。

遺物は、磁器、陶器、土器、黒曜石などの小破片がわずかに出土している〔第 34・44 図〕。

第 34 図 1 は弥生土器の甕の口縁部で、弥生後期。2・3 は須恵質の甕の破片。4 は陶器の鉢か燗徳利の口縁部。5 は

尾呂茶碗で、17c 後半頃。6 は陶器の碗で、17c 前半頃。7 は土師質皿の底部。8 は陶器の徳利で、17c。9 は陶器碗の高台部分で、17c 前半。第 44 図 1 は磨石。輝石安山岩。

溝の構築年代は不明であるが、17c 後半以前か。

3 号溝〔第 9 図〕

D17 ～ 19 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-23° -W を測り、概ね南北方向に延びる。一部、畝と 4 号溝に切られる。1 号柵列との新旧関係は明確ではない。規模は、長さ 15.2m、幅 0.6m、深さ 0.07m を測り、極めて浅い。覆土は、拳大の礫を若干含む黒褐色土の単層である。

遺物は、小片で図示しなかった。

溝の構築年代は不明。4 号溝に切られるため、少なくとも 19c 前半以前。

4 号溝〔第 10 図〕

B19、C18・19、D18、E ～ G17 グリッドに位置する。平面形は直線的であるが、わずかに北に向かって弧を描く。断面形は皿状を呈する。直線的な部分での主軸方位は N-63° -E を測り、概ね東西方向に延びる。両端は調査区外に延び、3 号溝を切って構築され、16 号溝には切られる。調査区内で確認された規模は、長さ 42.9m、幅 1.2 ～ 2.5m、深さ 0.22m ほどを測る。覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土の 2 層で構成されているが、大半は上層の暗褐色土で占められており、単層となる箇所もある。

遺物は、磁器、陶器、土器、石器、石製品などが出土しており、小破片が多い〔第 34・41・42・44 図〕。

第 34 図 1 は木葉痕のある土器の底部。2 は陶器の片口で、18c 後半。3 は陶器の碗で、16c 後半。4 は陶器の碗で、16c 後半～ 17c 前半。5 は陶器の壷で中世段階のもの。6 は陶器の碗で 17c 前半。7 は磁器の皿で、景徳鎮の産。16c 後半。8 は土師質の鍋。9 は磁器の碗で 18c 後葉～ 19c 前半。10 は陶器の徳利で、18c 中葉。第 41 図 1 は銅製の煙管。吸口部分。18c 後半か。第 42 図 2 は磨石。角閃石輝石安山岩。3 は打製石斧。ホルンフェルス。第 45 図 1 は五輪塔の空風輪。角閃石デイサイト。

溝の構築年代は不明であるが、19c 前半以前か。

5 号溝〔第 11 図〕

B17、C16・17、D16、E15・16、F15 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-61° -E を測り、概ね東西方向に延びる。両端は調査区外に延び、16 号溝を切って構築される。一部、畝に切られる。調査区内で確認された規模は、長さ 50.6m、幅 0.9 ～ 2.5m、深さ 0.34m ほどを測る。覆土はほぼ黒褐色土の単層で、部分的に直径 10 ～ 30mm 大の円礫が含まれる。

遺物は、磁器、土器、石器などが出土しており、小破片が多い〔第 34・42 図〕。

第 34 図 1 は注口土器の取手。2 は条痕文が施された土器片。3 ～ 5 は土師器の坏の破片。6 は土師質の鍋の底部。7 は須恵器の甕で、内側はナデ、外側はタタキ目が残る。8 は陶器の天目碗で、17c。9 は陶器の碗で 17c 前半。10 は陶器の鉢で、18c 前半。11 は磁器の碗で 17c 前半。12 は土師質の鍋。第 42 図 4 は短冊形の打製石斧。砂質頁岩。

溝の構築年代は不明であるが、18c 前半以前か。

6 号溝〔第 12 図〕

B ～ F14 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は逆台形状を呈する。主軸方位は N-85° -E を測り、東西方向に延びる。7 号溝および 11 号溝に切られる。また、畝や撹乱によって部分的に破壊をうける。西側は撹乱を受けて明確ではないが、おそらくは両端ともに調査区外に延びるものと推定される。調査区内で確認された規模は、長さ 43.7m、幅 0.6~0.9m、深さ 0.26m ほどを測る。覆土には、拳大から人頭大の礫が非常に多く含まれていた。これらはいずれも底面からかなり浮いた位置にあり、遺構確認時には地表に露出している状態であった。他の溝からも礫はみられるが、ほとんどは礫が散在しているという印象であり、本遺構の場合は、意図的に同等の大きさの礫を配置したと考えられ、区画を意図したものと推定される。

遺物は、土器、陶器、黒曜石などの小破片がわずかに出土しているが、図示しなかった。溝の構築時期は不明。

7 号溝〔第 12 図〕

D・E14、F13・14グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-65° -Eを測り、概ね東西方向に延びる。6号を溝を切って構築され、東端は調査区外に延びる。掘り込みは浅く、西端の壁面の立ち上がりが明瞭でないため、本来はさらに西側に延びていた可能性もある。調査区内で確認された規模は、長さ19.5m、幅1.6m、深さ0.25mほどを測る。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は、土器、陶器、黒曜石などの小破片がわずかに出土しているが、図示しなかった。溝の構築時期は不明。

8号溝〔第13図上〕

D12グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-27° -Eを測り、概ね南北方向に延びる。両端は、北側を10号溝に、南側を11号溝に切られているが、いずれの端部も10・11号溝内に収まる程度の規模と考えられる。規模は、長さ4.4m、幅0.9m、深さ0.1mほどを測り、本遺跡の中では非常に小規模なものである。覆土は、にぶい黄褐色土の単層で、ローム粒、焼土粒がわずかに含まれている。

遺物は、2点のみの出土とわずかではあった〔第34図〕。

1・2は土師質の鍋。

溝の構築時期は不明。近世か。

9号溝〔第14図〕

A~B12、C～F11グリッドに位置する。平面形は直線的であるが、わずかに北に向かって弧を描く。断面形は皿状を呈する。直線的な部分での主軸方位は、N-71° -Eを測り、概ね東西方向に延びる。西端は調査区外に延び、東端は調査区内に収まるものの、壁面への立ち上がりが明瞭でないため、さらに延びていた可能性もある。部分的に畝や撹乱による破壊をうける。調査区内で確認された規模は、長さ45.2m、幅0.7～1.2m、深さ0.18mほどを測る。覆土は地点によって堆積状況が異なるが、主体となるのは黒褐色土で、ローム粒や焼土粒・炭化粒などを含む部分もある。

遺物は、磁器、陶器、土器、黒曜石などの小破片がわずかに出土している〔第35図〕。

1は爪形文の施された土器片。2は横走る沈線文の施された土器片、磨耗が著しい。3は陶器の行平鍋で、19c後半の在地系のもの。4は磁器の皿で、近代以降。5は磁器の香炉で、18c。6は灯明皿か。19c。在地系。

溝の構築時期は不明。近代以前か。

10号溝〔第14図〕

A～D12、D～F11グリッドに位置する。平面形は直線的であるが、わずかに蛇行する。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-76° -Eを測り、概ね東西方向に延びる。両端は調査区外に延び、8号溝、11号溝を切って構築される。一部、撹乱に切られる。調査区内で確認された規模は、長さ46.7m、幅1.5～2.2m、深さ0.31mほどを測る。覆土は地点によって、単層・複層の差異がみられるが、暗褐色土や黒褐色土が主体となっている。部分的に拳大～人頭大の礫が含まれる。なお、本溝内のC12-2グリッド付近では土管が確認されている。溝の主軸に沿った状態で発見されたため、当初、本溝の付帯施設として考えた。しかし、土管が底面からかなり浮いていること、溝の他の部分では土管のカケラひとつ確認できないことから、埋没過程時に投げ込まれたものと推定した。

遺物は、磁器、陶器、土器、黒曜石、金属製品などの小破片が出土している。今回確認された遺構の中では、比較的遺物の量は多い〔第35・41図〕。

第35図1・4・9・10は土師質の鍋で、時期は不明。9は壁面の孔の一部。2は縄文晩期の浅鉢の破片と考えられ、横に並行する沈線文を施す。3は弥生後期の折返し口縁壷の口縁部で、口縁端部にLR縄文が施される。5・7は18c前半の擂鉢でおそらく同一個体。6は16c中葉の擂鉢で、217ピット出土のものとおそらく同一個体となる。8は天目碗で、16c後半。11は17c前半の盤で、高台は削り出し整形。第41図2は銅製の煙管。雁首部分。火皿部分を欠損。18c後半か。7は鉄製の鍬か。

溝の構築時期は不明。近世か。

11号溝〔第15図〕

B・C15、D12～15、C12・13グリッドに位置する。平面形はD14・15にかけてほぼ直角に屈曲し、L字状を呈する。断面形は皿状を呈する。主軸方位は溝が東西方向に走る部分については、N-67° -E、南北方向に走る部分では、N-17° -Wをそれぞれ測る。西端は調査区外に延び、北端は10号溝に切られる。6号溝、16号を溝を切って構築され、部分的

に撹乱をうける。調査区内で確認された規模は、長さ 54.8m、幅 1.0 ～ 2.6m、深さ 0.22m ほどを測る。覆土は地点によって堆積状況が異なるが、黒褐色土を主体とし、全体的に直径 10mm 以下の細かい砂利が認められた。また、溝が東西に走る部分については、7 号溝の延長とも考えられるが、本報告では別遺構として取り扱う。

遺物は、磁器、陶器、土器、瓦、金属製品などの小破片がわずかに出土している〔第 35・41・45 図〕。

第 35 図 1 は 17c 初頭の志野皿で、高台部分を削り出して整形している。第 41 図 8 は鉄製の鎌か。第 45 図 2 は砥石。

溝の構築時期は不明。近世か。

12 号溝〔第 16 図〕

D7・8、E8・9、F9・10 グリッドに位置する。平面形は直線的であるが、E9 グリッドのあたりで蛇行している。断面形は皿状を呈する。直線的な部分での主軸方位は、N-28° -W を測り、概ね南北方向に延びる。北端は 2 号溝に切られ、南端は調査区外に延びる。13 号溝を切って構築される。調査区内で確認された規模は、長さ 32.6m、幅 1.1 ～ 3.3m、深さ 0.2m ほどを測る。覆土は地点によって若干の違いがあるが、単層で炭化粒や礫を含む箇所もある。

遺物は、磁器、陶器、土器の小破片がわずかに出土している〔第 43 図〕。

13 は磨石。輝石安山岩。

溝の構築時期は不明。13 号溝との新旧関係から、17c 後半以前と考えられる。

13 号溝〔第 13 図下〕

E9、F8・9 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-69° -E を測り、概ね東西方向に延びる。西端は 12 号溝に切られ、東端は調査区外に延びる。調査区内で確認された規模は、長さ 6.7m、幅 1.8m、深さ 0.19m を測る。覆土は暗褐色土の単層で、ローム粒を含んでいる。

遺物は、わずかに土器片が数点出土しているが、図示しなかった。

溝の構築時期は不明。2 号溝及び 12 号溝との新旧関係から、17c 後半以前と考えられる。

14 号溝（谷）〔第 17・18 図〕

C ～ F2・3 グリッドに位置する。

当初、ひとつの大規模な溝跡と認識して調査にあたったが、掘りあがっていく過程で、溝遺構ではなく谷状地形であったことが判明した。

本遺構の調査は、14 号溝内に 3 本のベルトを設定し、西側から掘削を行い、順次東側に向かって掘削を進めるという方法をとり、適宜、土層断面を記録した。掘削は無遺物層であるローム上面まで行った。

発見された谷は、確認された範囲で、東西方向に長さ 36.4m、南北方向に幅 16.8m ほどで、確認面からの深さは 0.54m ほどになる。断面形は皿状を呈する。谷はおおよそ東西方向に延び、谷に堆積した黒褐色土中には、縄文土器片、石器が含まれており、縄文時代の遺物包含層と認識された。わずかに陶磁器や鉄製品も出土しているが、後世の混入品であろう。

遺物は、縄文中期、後期、晩期の土器片が主体となっており、石器も少量みられた。縄文晩期以降、谷の大部分が埋没していったと考えられる。わずかに陶磁器などもみられるが混入品と思われる。土器は個体差も若干あるが、ほとんどが摩滅した状態で検出された〔第 35 ～ 38 図、41・43・44 図〕。

1 は刺突文のある縄文後期の浅鉢。2・3 は口唇部に刻みのある五領ヶ台式の深鉢。4 は沈線文のある深鉢で、縄文後期か。5 は縄文晩期の浅鉢。6 は縄文中期。井戸尻式か。7･8 は五領ヶ台式。9 は縄文後期の浅鉢、内側を連続刺突文。10 は縄文中期か。11 は粘土紐を貼り付けて隆帯が施されている。曽利式か。12 は縄文後期の浅鉢か。13 はＲＬ縄文が施される。縄文後期。14･15 は堀之内式。16 は五領ヶ台式。17 は縄文中期か。粘土紐を貼り付けて楕円形の区画をもつ。18 は口唇部に刻みのあるもので、五領ヶ台式。19・21 は粗い沈線文。縄文後期か。20 は平口縁で、縄文中期のものと思われる。曽利式か。22・24 は五領ヶ台式。23 は縄文晩期の浅鉢か。25 は連続刺突文をもつ縄文後期の浅鉢。26 は粘土紐を貼り付けた隆線をもつ五領ヶ台式。27 は縄文中期か。28 は幅広の沈線文に、口唇部及び突帯に指頭押圧が施された土器片で、胎土は細かく、焼成も堅緻である。弥生前期の壷か。29 は五領ヶ台式。30 は縄文中期か。31 は縄文中期。五領ヶ台式か。32 は縄文後期か。33 は縄文後期。加曽利Ｂ式？。34・35 は五領ヶ台式。36 は堀之内式。37 は注口土器の一部か。縄文後期。38 は鉢の一部か。堀之内式？。39 は縄文後期の浅鉢。40 は口縁部付近に RL 縄文を施す。縄文後期か。41 は五領ヶ台式。沈線に沿って交互に刺突文が施される。42・43 は縄文後期。加曽利Ｂ？。44・45 は縄

文後期。46 は縄文中期。井戸尻式？。47 は縄文中期か。48・49・51 は縄文晩期の浅鉢。50 は五領ヶ台式。52 は粗い沈線文。縄文後期か。53 ～ 56 は五領ヶ台式。57 は縄文後期か。58 は五領ヶ台式。59 は縄文後期の浅鉢。60 は縄文晩期。条痕文。61 は縄文後期の浅鉢か。62 は五領ヶ台式。63 は縄文後期か。64 は縄文中期。隆帯に刻みをもつ。井戸尻式か。65 は粗い沈線文。縄文後期か。66 は LR 縄文と沈線を施す。堀之内式。67 は縄文晩期。条痕文。68・69 は五領ヶ台式。70 は縄文中期。五領ヶ台式か。71・72 は縄文晩期。条痕文。73 は五領ヶ台式。74 は磨耗が著しい。条痕文らしい痕跡がみられる。縄文晩期か。75 は RL 縄文が施される。縄文後期？。76 は L 縄文が施される。縄文後期？。77 は粗い沈線文。縄文後期か。78 は縄文中期。五領ヶ台式か。79 は五領ヶ台式。80・81 は縄文中期。五領ヶ台式か。82 は縄文後期？。83 は五領ヶ台式。84 は縄文中期。五領ヶ台式か。85 は連続する刺突文が施された、縄文後期の浅鉢。86 は刻み目隆線をもつ、堀之内式。87 は縄文中期。五領ヶ台式か。88 は縄文後期。称名寺式？。89 は五領ヶ台式。90 は縄文中期。五領ヶ台式か。91 は縄文中期。井戸尻式か。92 は爪形文が施される。縄文中期。93 は縄文晩期。条痕文。94 は縄文中期か。95・96 は縄文晩期か。条痕文。97 は縄文後期。98・99・100 は縄文晩期。条痕文。101 は堀之内式。102 は五領ヶ台式。粘土紐を貼り付けた隆線と、並行する沈線文をもつ。103 は縄文中期。爪形文をもつ。104 は縄文中期か。沈線文が並行。105 は曽利式。竹管による重弧文。106 は縄文中期か。沈線文。107 は縄文中期。粘土紐を貼り付けた隆線をもつ。井戸尻式？。108 は五領ヶ台式。RL 縄文と粘土紐貼付隆線。109 は五領ヶ台式。粘土紐貼付隆線。110 は縄文晩期。条痕文。111 は縄文後期か。沈線文 112 は五領ヶ台式か。沈線文が並行。113 は五領ヶ台式。RL 縄文と沈線文。114 は縄文後期。粗い沈線文。115 は縄文後期の浅鉢。沈線文、連続刺突文。116 は縄文後期。粗い沈線文。117 は五領ヶ台式？。沈線文が並行。刺突文。118 は縄文中期か。沈線文。119 は五領ヶ台式。沈線文、粘土紐貼付隆線。120 は五領ヶ台式か。沈線文が並行。121 は縄文後期の浅鉢。連続刺突文。122 は五領ヶ台式か。沈線文。123・124 は縄文中期？。沈線文。125 は縄文中期か。連続刺突文、沈線文。126 は縄文晩期。条痕文。127 は縄文中期。井戸尻式か。刻み目隆線、沈線文。128 は縄文晩期。条痕文。磨耗が著しい。129 は縄文後期か。底面に網代痕を残す。130 は須恵器の甕。外面にタタキ、内面はナデ。131 は磁器の皿で、近代。132 は天目碗で、17c 前半。133 は肥前系嬉野の皿。17c 後半。134 は土師質の鍋。135・136 は土師質土器の皿。

第 41 図 3 は鉄釘。角釘か。5 は不明鉄製品。釘か。第 43 図 14・15 は撥形の打製石斧。14 は緑色凝灰岩。15 は頁岩。16 は打製石斧。ホルンフェルス。17 は短冊形の打製石斧。ホルンフェルス。18 は分銅形状の打製石斧。頁岩（ホルンフェルス化？）。19 は短冊形の打製石斧。頁岩。20 は打製石斧。ホルンフェルス。21 は石匙。ホルンフェルス。22 は短冊形の打製石斧。頁岩（ホルンフェルス化？）。23 は横刃形石器で、砂岩。第 44 図 28・29 は凹石。輝石安山岩。31 ～ 38 は、石鏃。いずれも黒曜石。31 ～ 34、36、37 は凹基無茎鏃、35 は飛行機鏃、38 は平基無茎鏃。

15 号溝〔第 19 図上〕

B・C15 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は浅鉢状を呈する。主軸方位は N-74° -E を測り、概ね東西方向に延びる。規模は、長さ 10.0m、幅 0.7m、深さ 0.11m ほどを測る。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は、土器片がわずかに出土している〔第 38 図〕。

1 は弥生後期の壷で、折返し口縁部分。2 は縄文晩期の浅鉢？。沈線文。

溝の構築年代は不明。

16 号溝〔第 20 図〕

B15、C15 ～ 18、D18・19 グリッドに位置する。平面形は B15 から C15 にかけてほぼ直角に屈曲して L 字状を呈する。断面形は皿状を呈する。主軸方位は、溝が東西方向に走る部分については N-82° -E、南北方向に走る部分では N-22° -W を測る。西端は調査区外に延びる。4 号溝を切って構築され、5・11 号溝に切られる。1 号柵列との新旧関係は不明である。部分的に撹乱をうける。調査区内で確認された規模は、長さ 51.2m、幅 0.5 ～ 1.9m、深さ 0.17m を測る。覆土は黒褐色土を主体とし、地点によっては 2 層に分かれる。

遺物は、陶器、土器などの小破片がわずかに出土している〔第 38 図〕。

1 は縄文後期か。粘土紐貼付隆線のように思われるが、磨耗がひどく判然としない。2 は擂鉢で、16c。3 は天目碗で、17c 初頭。4 は仏飯器で、17c 後半。

溝の構築時期は不明。17c 後半以前か。

17 号溝〔第 19 図下〕

B13 グリッドに位置する。平面形は直線的で、断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-66° -E を測り、概ね東西方向に延びる。西端は調査区外に延び、部分的に撹乱をうける。調査区内で確認された規模は、長さ 7.5m、幅 0.9m、深さ 0.08m を測り、非常に浅い。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は、土器の小破片がわずかに出土しているが、図示しなかった。

溝の構築時期は不明。

（2）土坑

土坑

隅丸長方形土坑が 3 基(1 ～ 3 号土坑)、円形及び楕円形土坑が 12 基(4 ～ 15 号土坑)の計 15 基が確認された。総じて、遺物が少ない、若しくは殆どみられず、また切り合い関係も一部を除きみられないことから、時期判定及び性格判定が非常に困難である。

1 号土坑〔第 21 図〕

D10-2,4 グリッドに位置する。平面形は南北に主軸を持つ隅丸長方形を呈し、長軸は 3m、短軸は 1.4m を測る。縦断面は皿状を呈するが、深さは確認面より 0.08m 程度を測るのみであった。覆土は焼土粒、炭化粒を多量に含む黒色土である。土坑の全面において炭化物が集中する箇所が複数みられた。このような状況を鑑みて、燃え滓を遺棄した竪穴と考えられるが、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。構築年代は不明であるが、2・3 号土坑と平面形、深さ、覆土が類似することから、同様な性格の遺構と考えられ、構築時期にも開きがないとすれば、2 号土坑の炭化材分析の結果からおよそ 11c ～ 12c 頃と考えられる。

2 号土坑〔第 21 図〕

D12-4、E12-3 グリッドに位置する。平面形は南北に主軸を持つ南北面の弧状がやや強い隅丸長方形を呈し、長軸は 3.6m、短軸は 1.9m を測る。縦断面、横断面ともに皿状を呈するが、最も厚い部分で確認面より 14cm を測り、西側へ向かって堆積が薄くなっていく。土坑の南東角より炭化物の集中が確認された。覆土は焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土層と黒色土層の 2 層が主体をなしているが、上述の炭化物塊の集中は黒色土層より確認されている。遺物は土器片が 3 点出土している。2 号土坑は 1 号土坑の南、約 15m の直線上に位置し、その主軸方向がほぼ一致することや土坑内の炭化物の出土状況などを鑑みて、比較的時期が近く且つ同様な性格を持った遺構であると考えられる。この土坑においても 1 号土坑同様に炭化物の集中がみられたことから、当初 1 号土坑と併せて、炭窯の想定を試みた。しかしながら、燃焼部などの直接火を受けた痕跡が見られないこと、土坑の構造が比較的単純であるということから、その可能性は考えにくいであろう。また、炭化物のうち、比較的良好に残存していた炭化材については、放射性炭素年代測定や暦年較正の結果から 11c ～ 12c 頃（calAD1,028-calAD1,151）という年代が示されており、遺構の構築年代もその頃かと推定される。

遺物は、土器片、黒曜石の小破片がわずかに出土した〔第 39 図〕。

1 は浅鉢で、縄文後期？。角押文。

3 号土坑〔第 21 図〕

F15-4、F16-2 グリッドに位置する。平面形は東西に主軸を持つ隅丸長方形を呈するが、その東端部は調査区外のため不明である。長軸残長は 3.6m、短軸は 1.9m を測る。断面形は皿状を呈し、深さは 0.31m を測る。覆土は炭化粒を多量に含む黒褐色土の単層である。土坑の形状、規模からして、1 号・2 号土坑と同様な性格を持つ遺構と考えられる。しかしながら、覆土に炭化粒が多く含まれるものの、1 号・2 号土坑でみられた炭化物の集中がみられないこと、また主軸方向がほぼ垂直にずれることなど、異なる点もみられる。

遺物は出土しなかった。構築年代は不明であるが、1 号・2 号土坑と同様な性格の遺構と認識されることから、それほど年代に開きを持たないと考えられる。2 号土坑同様、11c ～ 12c 頃の構築か。

4 号土坑〔第 21 図〕

D21-4、E21-3 グリッドに位置する。平面形は北側に若干の張り出し部分を持つが、長軸、短軸ともに 1.7m の円形を呈する。断面形は浅鉢状を呈し、深さは 0.32m である。覆土は黒褐色土を主体に 3 層に分層できる。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

5号土坑〔第21図〕

D6-2,4グリッドに位置する。平面形は北東－南西に長軸を持つ楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.8mを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さは確認面より0.37mを測る。覆土は黒褐色土、暗褐色土を主体とし、4層に分層できる。土坑北側で6号土坑の一部を切って構築される。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

6号土坑〔第21図〕

E6-1,4グリッドの境に位置する。平面形は北東－南西に長軸を持つ楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸0.7mを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さは確認面より0.36mを測る。覆土は黒褐色土の単層で、炭化物を少量含んでいる。土坑南側の一部を5号土坑に切られている。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

7号土坑〔第22図〕

D3-2グリッドに位置する。平面形は南東部にやや張り出す部分があるものの、ほぼ円形で、直径は1.9mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは確認面より1.05mを測る。本土坑は、地山となるローム層上面で確認され、14号溝（谷）が埋没する過程で掘り込まれたものと考えられる。粘土採掘坑か。

遺物は土器片、黒曜石の小破片がわずかにみられた〔第39図〕。

1は藤内式か。沈線文、刻み目隆線。2は縄文晩期。条痕文。3は縄文後期？。沈線文、刺突文。構築年代は縄文晩期と考えられる。

8号土坑〔第22図〕

C10-4グリッド南端に位置する。平面形は北東－南西に長軸を持つ楕円形で、長軸1.1m、短軸0.8mを測る。断面形は皿状を呈し、深さは確認面より0.13mを測る。覆土は黒褐色土の単層で、土坑内には直径15～40mm程の円礫を多量に含んでいた。縄文時代の遺構と考えられ、6号掘立柱建物とは、相互の位置関係や共に縄文土器などが出土することから関連が考えられそうであるが、詳細は不明である。

遺物は、磨石を1点含む石器及び剥片が計8点、また時期の不明な縄文土器の小破片が出土している〔第42･43図〕。

第42図5～11は剥片で、未製品。いずれも砂岩。第43図12は磨石。輝石安山岩。

9号土坑〔第22図〕

C11-3、D11-4グリッドの境に位置する。平面形はほぼ円形で、長軸が2m、短軸1.8mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは確認面より0.4mを測る。覆土はロームブロックを含む黒褐色土の単層である。土坑北側の一部は畝状の溝に切られている。

遺物は土器片、黒曜石の小破片がわずかに出土している〔第39図〕。

1・2は縄文晩期。条痕文。構築年代は縄文晩期と考えられる。

10号土坑〔第22図〕

F16-4グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸が1.4m、短軸1.2mを測る。断面形は逆台形を深さは確認面より1.2mを測る。覆土は黒褐色土を主体として、6層に分層できる。土坑の中層から下層にかけて炭化材が出土している。調査地では比較的深い部類の土坑であり、周辺に集落などの想定される遺構がみられないことから、墓坑ないし落し穴などの性格が考えられる。炭化材については、放射性炭素年代測定や暦年較正の結果から、calBC790-calBC593という年代が示されており、縄文晩期頃の遺構と考えられる。

遺物は土器片が1点出土しているが、図示しなかった。

11号土坑〔第22図〕

D17-1グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、直径0.9mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは確認面より0.85m

を測る。覆土は黒・暗褐色土を主体として、6層に分層できる。調査地では比較的深い部類の土坑であり、形態から10・13号土坑と同様な性格の遺構と考えられる。

遺物は出土していない。構築年代は不明であるが、10・13号土坑と類似することから、縄文晩期か。

12号土坑〔第7図〕

D19-4、D20-2グリッドの境に位置する。平面形は北西－南東方向に長軸を持つ楕円形で、長軸は2.2m、短軸は1.1mを測る。断面形は逆台形を呈するが、上端が略楕円形、下端が方形に近いいびつな断面形となる。深さは確認面より0.51mを測る。覆土は黒褐色土を主体として3層に分層できる。1号溝を切って構築される。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

13号土坑〔第22図〕

E16-3,4グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸が1.0m、短軸が0.9mを測る。断面形はU字状を呈し、深さは確認面より0.75mを測る。覆土は上下2層で、上層は黒褐色土で、炭化粒を少量含み、下層は上層よりもやや暗い黒褐色土となる。土坑の中層中央より、炭化材が出土している。調査地では比較的深い部類の土坑であり、形態から10、11号土坑と同様な性格の遺構と考えられる。炭化材については、放射性炭素年代測定や暦年較正の結果から、calBC817-calBC792という年代が示されており、10号土坑同様、縄文晩期頃の遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

14号土坑〔第22図〕

F14-4グリッドに位置する。平面形は東西に長軸を持つ楕円形で、長軸は1.9m、短軸は1.5mを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さは確認面より0.25mを測る。覆土は黒褐色土を主体として、3層に分層できる。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

15号土坑〔第22図〕

B15-4、16-1グリッドの境に位置する。平面形は略楕円形を呈し、長軸は1.8m、短軸は1.2mを測る。断面形は浅鉢状を呈し、深さは確認面より0.3mを測る。覆土は焼土粒、炭化粒を微量に含む黒褐色土を主体とする、3層に分層できる。土坑東側の一部を畝状の溝に切られる。

遺物は出土していない。

（3）柵列跡・掘立柱建物跡

1号柵列〔第23図〕

D・E18グリッドに位置する。5基のピットが直線的に等間隔で並んでいたため、柵列と判断した。そのうち3基には支柱穴とみられるピットが付属する。重複する3・16号溝との新旧関係は不明。東西方向に延びる。規模は全長10.38m、柱穴間隔は2.4～2.7mほどで、中央に位置する220、222、224号ピットの各間隔が若干広くとられており、それぞれ221、223、225号ピットが支柱穴として対応する。柵列の柱穴の径は、0.37～0.56mを測り、支柱穴の径は0.23～0.28mとひとまわり小さく、深さも柵列の柱穴は、0.21～0.67m、支柱穴は0.08～0.32mと、支柱穴の方が小規模であることがわかる。

遺物は出土していない。構築年代は不明。

1号掘立柱建物（143、144、148、152、153、154、157、271号ピット）〔第23・25図〕

C10グリッドに位置する。3間2間の南北棟建物で、規模は桁行3間約5.9m、梁行2間約3.9mを測り、桁行・梁行とも約1.9mのほぼ等間隔である。柱穴の径は0.24～0.40m、深さは0.20m～0.61mほどを測る。なお、南側に隣接する142、147、192、241号ピットも、位置関係等から、1号掘立柱建物に関連する付属施設等の柱列として考えられる。

遺物は、142、271号ピットから出土している〔第39図〕。

（142号ピット）1は土師質土器の皿で、底部に糸切痕。（271号ピット）1は景徳鎮の青花皿で、16c後半。

構築年代は遺物の年代から、中世末以降と考えられる。

2号掘立柱建物（163、169、170、171、172、174、247、248、249号ピット）〔第23・25図〕

A13、B12･13グリッドに位置する。3間2間の東西棟建物で、規模は桁行3間約5.4m、1間あたり約1.8mの等間隔、梁行2間約4.0m、1間あたり約1.9mの等間隔を測る。柱穴の径は0.21～0.45m、深さは0.22～0.50mほどを測る。なお、近接する34・162号ピットはちょうど1間幅であり、西側に別な建物があった可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

構築年代は、3号掘立柱建物との位置関係や、建物の軸方向がほぼ同一であることから、同時期のものであると考えられる。中世末～近世初頭か。

3号掘立柱建物（168、179、180、181、196、198、200、205、207、208号ピット）〔第24・25図〕

C12グリッドに位置する。2間2間の東西棟建物と考えられ、規模は桁行2間約6.4m、1間あたり約3.2mの等間隔、梁行2間約4.0m、1間あたり約2.0mの等間隔を測る。西側に1間分延びて3間2間の建物となる可能性も考えられるが、撹乱の影響もあり判然としないため、ここでは2間2間の建物としておく。柱穴の径は0.21～0.29m、深さは0.11～0.48mほどを測る。なお、200号ピットからは柱材の一部と思われる炭化材が出土しており、放射性炭素年代測定や暦年較正の結果から、calAD1,521-calAD1,642という年代が示され、中世末～近世初頭期の遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

4号掘立柱建物（161、190、195、197、201、202、203、204、206、209号ピット）〔第24・26図〕

E9グリッドに位置する。2間2間の東西棟建物で、規模は桁行2間約6.4m、1間あたり約3.2mの等間隔、梁行2間約4.6m、1間あたり約2.3mの等間隔を測る。東側に1間分延びて3間2間の建物となる可能性もあるが、12号溝の存在もあって判然としない。ここでは2間2間の建物としておく。柱穴の径は0.16～0.38m、深さは0.26～0.80mほどを測る。

遺物は、出土していない。構築年代は判然としないが、2・3号掘立柱建物と軸方向などが揃うことから、同時期のものと考えたい。中世末～近世初頭か。

5号掘立柱建物（32、33、164、216、217、218、240、267号ピット）〔第24・26図〕

D11・12グリッドに位置する。3間2間の東西棟建物。桁行3間約7.2mで、西から約3.0m、約2.0m、約2.0mの柱穴間隔となり、梁行2間約4.1m、1間あたり約2.0mの等間隔を測る。柱穴の径は0.25～0.32m、深さは0.18～0.35mほどを測る。建物の中央に位置する217号ピットからは、礎板石の上辺から柱材の周りに添えたような状態で、擂鉢の破片が約2分の1個体出土している〔第40図〕。

（217号ピット）1は擂鉢で、16c中葉。同一個体と考えられるものが10号溝からも出土している（第35図6）。

構築年代は、西から2号、3号、5号と並ぶように構築された建物と推定されるため、これらと同時期のものと推定される。中世末～近世初頭か。

6号掘立柱建物（165、167、191、273号ピット）〔第27図〕

C10・11、D10・11グリッドに位置する。柱穴4本で構成される1間×1間の建物である。規模は2.4m×3.1mほどを測る。柱穴の径は0.35～0.47m、深さは0.48～0.59mほどを測る。

遺物は、165、167、273ピットから出土している〔第39・44図〕。

第39図（165号ピット）1は縄文晩期の鉢か。沈線文。2～5は縄文晩期。条痕文。（167号ピット）1は縄文晩期。条痕文。（273号ピット）1は縄文後期の鉢か。沈線文。第44図（273号ピット）30は凹石。閃緑岩。

構築年代は縄文晩期と考えられる。

(4) ピット、遺構外出土遺物・表面採集遺物

ピット〔第28～33図、第6表〕

建物・柵列以外のピットについては、ピット位置図及び表にまとめた。

遺物を図示したピットでは、137ピットがある。137ピットはB10-3グリッドに位置し、平面形は円形で、径0.35m、深さ0.11mを測る。第39図（137号ピット）1は縄文晩期。条痕文。

遺構外出土遺物〔第39・41・44・45図〕

第39図1は縄文中期、五領ヶ台式か。沈線文、刺突文。2は縄文中期、五領ヶ台式？。口唇部に刻みがあり、内面にも沈線文。3～5は土師質の鍋。6は行平鍋で、19c後半、在地系。7は縄文晩期。条痕文。8は縄文中期。五領ヶ台式か。沈線文。9は縄文晩期。条痕文。第41図4・6は鉄製の角釘か。第44図24は石匙で、砂岩。同図26・27はともに試掘時に出土したもので、26はやや分銅形状を呈する打製石斧で、砂岩。27は打製石斧で、ホルンフェルス。第45図39は男女倉型有樋尖頭器。黒曜石。第4節にて、詳述。同図3は泥面子。型押し整形。雀をモチーフとしたもの。

表面採集遺物〔第40図〕

調査区及び調査区周辺から表面採集した遺物をいくつか図示した。

1は土師質の鍋。2は擂鉢、18c前半。3は灯明皿で、18c後葉～19c前半。4は磁器の碗で、18c後半。高台内に圏線と「大明年製」の崩し字か。5は磁器の皿で、19c前半～中頃。6は陶器の香炉で、18c後半。7は磁器の大皿で明治～大正期。銅版転写。8は陶器の鉢で、18c中葉～後葉。見込み部に輪禿の痕跡がある。9は陶器の鉢で、18c。10は尾呂茶碗で、17c後半。11は陶器の鉢で、18c後半～19c初頭。見込み部に輪禿。再興織部。

第４節　男女倉型有樋尖頭器

保　坂　康　夫（山梨県立考古博物館）

１）剥離過程の記載

韮崎市滝坂遺跡出土。単品での出土であり、生活の痕跡をとどめない単独出土遺跡である。長さ7.6㎝、幅3.6㎝、厚さ1.2㎝である。先端をカジリで欠損するものの、２㎜程度であり、ほぼ完形である。ガジリは裏面右側縁中央にも若干みられる（第45図39、白抜きの剥離面）。黒色不透明の黒曜石で、径２㎜ほどの挟雑物を２粒ほど含むが、いわゆる冷山系ないしは蓼科系ほどに挟雑物はみられず、良質な黒曜石である。以下第３図により剥離過程を記述する。

素材は、扁平礫と思われる。表裏面に自然面を残し、自然面はいずれも、ズリ面といわれる古い自然剥離面である。古い剥離面があり、最終的に器体の調整を行った剥離よりも古い形態段階の存在を示す剥離面が残存する。正面の中央部に５枚が観察できる。器体の右上からの剥離（Ｘ－１）、左上から（Ｘ－２）、左から（Ｘ－３）の３枚と、先端部方向からの２枚（Ｂ－１、Ｂ－２（後者はステップエンド））である。これらの剥離群を整形第１段階の剥離群と呼んでおく。自然面が器体中央に残存しており、素材の厚さは、整形第１段階でも、現状の器体の形状を決定した最終的な剥離群である、整形第２段階の剥離群においても、大きく変化はなく、器体の大きさのみ変化しているものと思われる。そうすると、整形第１段階の剥離群の内、先端部側からのＢ－１とＢ－２は、器体周辺の調整剥離としては奇異な剥離である。男女倉型の特徴である樋状剥離とも考えられるが、断面ｂで示したとおり、断面長軸（レンズ状断面の両端を結んだ線分）に平行しており、整形第２段階の長軸に傾斜した樋状剥離面や、男女倉型彫器とも言われる長軸に直行するような剥離面とは、性格を異にしていると思われる。しかし、槍先形尖頭器の周辺調整剥離面としても奇異であり、強いて解釈するならば、樋状剥離に失敗し、衝撃剥離のように縦溝状に剥離が入ってしまったものなのかもしれない。

裏面にも、古い剥離面があり、整形第１段階の剥離群とすることができる。Ｙ－１～３とするが、いずれも素材自然面に平行しており（断面ｃ）、整形第１段階の器体断面は、Ｄ字状であった可能性が高い。

整形第２段階では、正面では、まず大きな剥離が両縁部になされ、ついで微調整のための小剥離がなされている。裏面では左側縁からの剥離が主体で、中規模から小規模の剥離群である。右側縁には中央付近のみ若干の平坦剥離がみられるのみで、自然面が大きくのこされている。したがって、正面から見て左側縁は片面加工、右側縁が両面加工の半両面加工の槍先形尖頭器である。

整形第２段階の樋状剥離（Ａ－１、Ａ－２、いずれもステップエンド）は、先端側からみごとな剥離面を形成しているが、右側縁からの剥離面に切られており、樋状剥離以後に先端部の整形が続けられていることが分かる。これについては、①樋状剥離の後に右側縁を加工して先端を仕上げたもので、樋状剥離が仕上げの段階の剥離ではないことを示すか、②仕上げの段階の剥離であるが、樋状剥離以後の使用により先端部が欠損して、右側縁を加工し、先端を再び尖らせたといった、２通り解釈が考えられる。また、Ａ－２の存在は、複数枚の樋状剥離がなされた可能性を示している。

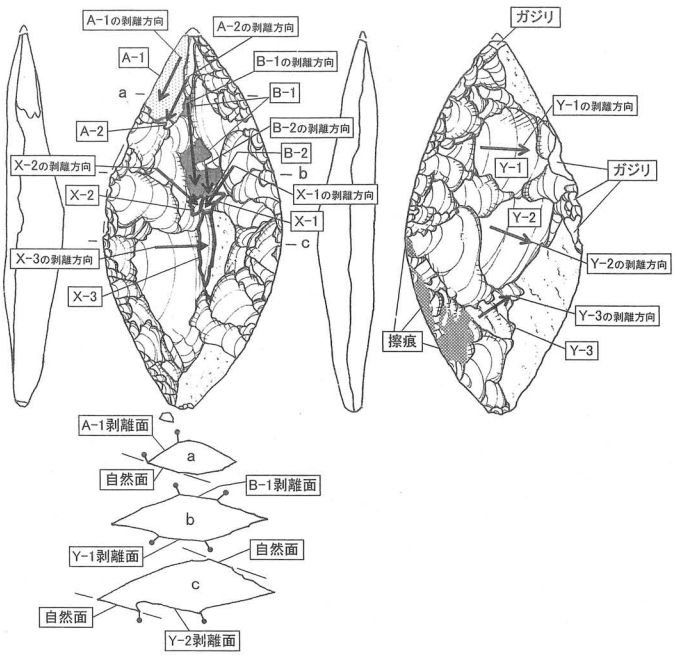
基部をみると、端部に自然面が残存しており、基部を完全に尖らせようとは意図されていないことがわかる。

なお、裏面左側縁下半分に擦痕によるスリガラス状の面が発達している。線状痕は、ルーペによる観察では、刃部に直行する。また、片面にしか観察できない。この擦痕のある面の剥離面群は、正面側の剥離面群を切っていて、正面側よりも新しい剥離群であることから、正面側に擦痕がないのは、剥離により除去されてしまったものではないことが明らかである。つまり、当初から片面にしかついていなかったと考えられる。周囲の剥離面も擦痕を切っているものは見当たらない。しかし、着柄によるものか、スクレーピング、ないしはホイットリングのような使用によるものかは、予断をゆるさない。

２）男女倉型有樋尖頭器をめぐる研究史と編年的位置

森嶋稔氏により注目され、掻器、ナイフ形石器、彫器の３器種を両面調整されたブランクから作り出す技法を「男女倉技法」と呼んだ。滝沢遺跡のような縁部が鋭角となるような樋状剥離で、樋状剥離の後に若干の加工がなされた石器は、「男女倉型ナイフ形石器」と分類された。そのほか、両面体の刃縁部を剥ぎ取るように、縁部が直角的な樋状剥離がみられるものを「男女倉型彫器」、樋状剥離はみられないが、両面体の両縁部に細部加工がなされた「男女倉型掻器」が提示された（森嶋稔ほか　1975『男女倉』和田村教育委員会）。

これに対し、堤隆氏は、「男女倉型掻器」は存在が不確かであるとした上で、刃縁部の角度が80°未満のより鋭角な樋状剥離をもつものを「男女倉技法」Ａにより製作された「有樋尖頭器」、80°以上の直角に近い角度の刃縁部をもつものを「男女倉技法」Ｂにより製作された「尖頭形彫刻刀形石器」と、再定義した（堤隆1988・1989「樋状剥離を有



第３図　滝坂遺跡出土の男女倉型有樋尖頭器

する石器の再認識（上・下）」『信濃』40－４・５）。

このなかで、堤氏は、両側縁がゆるやかな弧状を呈するシンメトリーな平面形で、レンズ状の断面をもつものを「男女倉型有樋尖頭器」、ゆるやかな弧状を呈する片側縁に対し、樋状剥離側の側縁がくの字状に角をもつ平面形で、その調整加工が主として素材剥片の背面側に集中するため断面が扁平なＤ字形となるものを「東内野型有樋尖頭器」と分類した。その分布について、「男女倉型有樋尖頭器」が青森県大平山元遺跡から、富山県立美遺跡、静岡県広合（ひろおや）遺跡までの、東北地域から中部・東海地域までの広い範囲に分布するのに対し、「東内野型有樋尖頭器」は下総台地の印旛沼周辺に限定されることを示した。

編年的には、「男女倉型有樋尖頭器」が相模野台地Ｌ２～ＢＢ１下部の諏訪間編年段階Ⅵに出現するが、中部高地ではこれにやや先行することが予想され、ナイフ形石器文化のなかで発達し、槍先形尖頭器主体の段階には消滅してしまうことが指摘された。一方、「東内野型有樋尖頭器」は相模野台地ＢＢ０から出土し、槍先形尖頭器主体の段階に発達し、「男女倉型有樋尖頭器」に後出するとした（堤隆 1989「有樋尖頭器をめぐる評価」『長野県考古学会誌』59・60（シンポジウム特集号　中部高地の尖頭器文化））。

須藤隆司氏は、槍先形尖頭器の出現については、安斉正人氏の説（安斉正人 2004「東北日本における『国府系石器群』の展開―槍先形尖頭器石器群出現の前提―」『考古学』Ⅱ）を引用し、大平山元Ⅱ遺跡を北海道渡島半島と同じ頁岩地帯で両面調整技術構造を受容した現象と評価する。細石刃技術を拒否し、ナイフ形石器の狩猟具の理想形態の尖基柳葉形尖頭器のための両面調整技術を受容し、その試作品として樋状剥離を用いた有樋尖頭器が出現したとする。その情報は野尻湖集団に伝達され、さらに中部高地の集団にリンクした。情報の基本に大型品・柳葉形の製作という規範があったため、男女倉黒曜石原産地遺跡群に限定されたとする。男女倉型の両面調整技術構造を受容した後に砂川型が出現するが、試作段階の男女倉型では両面調整技術構造の効率性・経済性が十分に発現できないため、それを可能とする石材環境に適応した石刃技法を整備した結果とする。石材環境適応技術（ナイフ形石器文化伝統）の違いから、激しい地域差を持った地域社会（石器文化）が形成され、尖基柳葉形尖頭器という同一形態の狩猟具の要請の元に、同一の技術構造で製作された砂川型、杉久保型、男女倉型の三形態が出現したとする（須藤隆司 2005「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女倉有樋尖頭器―基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察―」『考古学』Ⅲ）。

以上のように、相模野台地における層位的出土例から、L2～BB1 下部の諏訪間編年段階Ⅵと編年的な位置はほぼ確定したが、その特異な形態や製作技法の出現過程について、いまだに論議を呼んでいる。

第４章　自然科学分析

第１節　滝坂遺跡のテフラ

河　西　　学（㈶山梨文化財研究所）

はじめに

滝坂遺跡は、韮崎台地上の傾斜地に立地する遺跡である。韮崎台地は、八ケ岳の山体崩壊に伴い流出した韮崎岩屑流堆積物から構成され、流れ山による凹凸が台地上に分布する。本遺跡東方には小規模な高まりがあり、遺跡はその高まりの西斜面に位置する。遺跡周辺では、岩屑流堆積物上部の礫層が腐れ礫化しており、それを暗褐色粘土層が覆い、その上位に御岳第一軽石層（On-Pm1）が堆積し、その上位を風成の褐色ローム層が覆っている。ここでは、遺跡形成に関わる広域テフラの検出を目的として以下のテフラ分析を行ったので報告する。

分析試料

遺跡北側の谷部には黒褐色土層が厚く堆積し、土器片が包含される。遺跡中央部から南部では標準的なローム層が広く分布している。そこで谷部のＡＣ地点と中央部のＢ地点で分析試料を採取した。

分析方法

試料は、湿ったまま約 20g を秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60,#250）を用いて >1/4 ㎜および 1/4 ～ 1/16 ㎜の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析試料の乾燥重量は、別に同一試料約５～ 10g を秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で 105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4 ～ 1/16 ㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・重鉱物・その他（軽鉱物や風化物）の粒子の合計が 1000 粒になるようにライントランセクト法で計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するＦ型火山ガラスはＦ’型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡による浸液法（新井 ,1972）による。

分析結果

火山ガラスの屈折率測定値を第１表に示す。偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第２表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1/4 ～ 1/16 ㎜の全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第４～６図に示す。なお 1/4 ～ 1/16 ㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの 1/4 ～ 1/16 ㎜粒径の火山ガラスの割合で表示した。(註1) 以下に各地点の特徴について述べる。

［Ａ・Ｃ地点］（第４・６図）

Ａ地点は谷部の中心部に位置し、Ｃ地点はＡ地点よりも約３ｍ南側に位置する。

含水率は、Ａ地点で 13 ～ 25％の値を、Ｃ地点で 13 ～ 21％の値を示し、ともに緩やかに上方に漸減する。Ａ地点の粒径組成では、1/4 ㎜以上の粒子が、No.19 の 12％から上方に漸減し、Nos.5 ～ 13 では 2％の極小部を形成し、上方に増加して No.1 で 14％を示す。Ａ地点の 1/4 ～ 1/16 ㎜は、7 ～ 16％の値を示し、Nos.16 ～ 17 付近と Nos.1 ～ 3 付近に極大部が認められる。Ｃ地点では、1/4 ㎜以上の粒子が、Nos.4 ～ 9 で 2 ～ 3％と低率なのに対し、Nos.1 ～ 3 では 9 ～ 10％と高率になる。またＣ地点 1/4 ～ 1/16 ㎜では、Nos.4 ～ 9 で 7 ～ 9％なのに対し、Nos.1 ～ 3 では 15 ～ 17％と倍増する。Ａ・Ｃ地点 Nos.1 ～ 3 での 1/4 ㎜以上および 1/4 ～ 1/16 ㎜砂粒子の増大は、粗粒子を含む堆積物の堆積を意味するものと思われる。

火山ガラスは、1/4 ～ 1/16 ㎜全火山ガラス含有率において最大でも 0.7％とわずかで、Ａ・Ｃ地点とも 0.2 ～ 0.3％の低率で連続的に含有される。形態別の火山ガラスでは、泡壁型のＡ’型が多い傾向があり、塊状のＢ型、泡壁型平板状のＡ型などが続き、中間型のＣ型と多孔質型のＦ型を伴う。Ａ地点 No.3 では、Ａ’型火山ガラスが部分的な極大を、

第１表　火山ガラス屈折率測定値

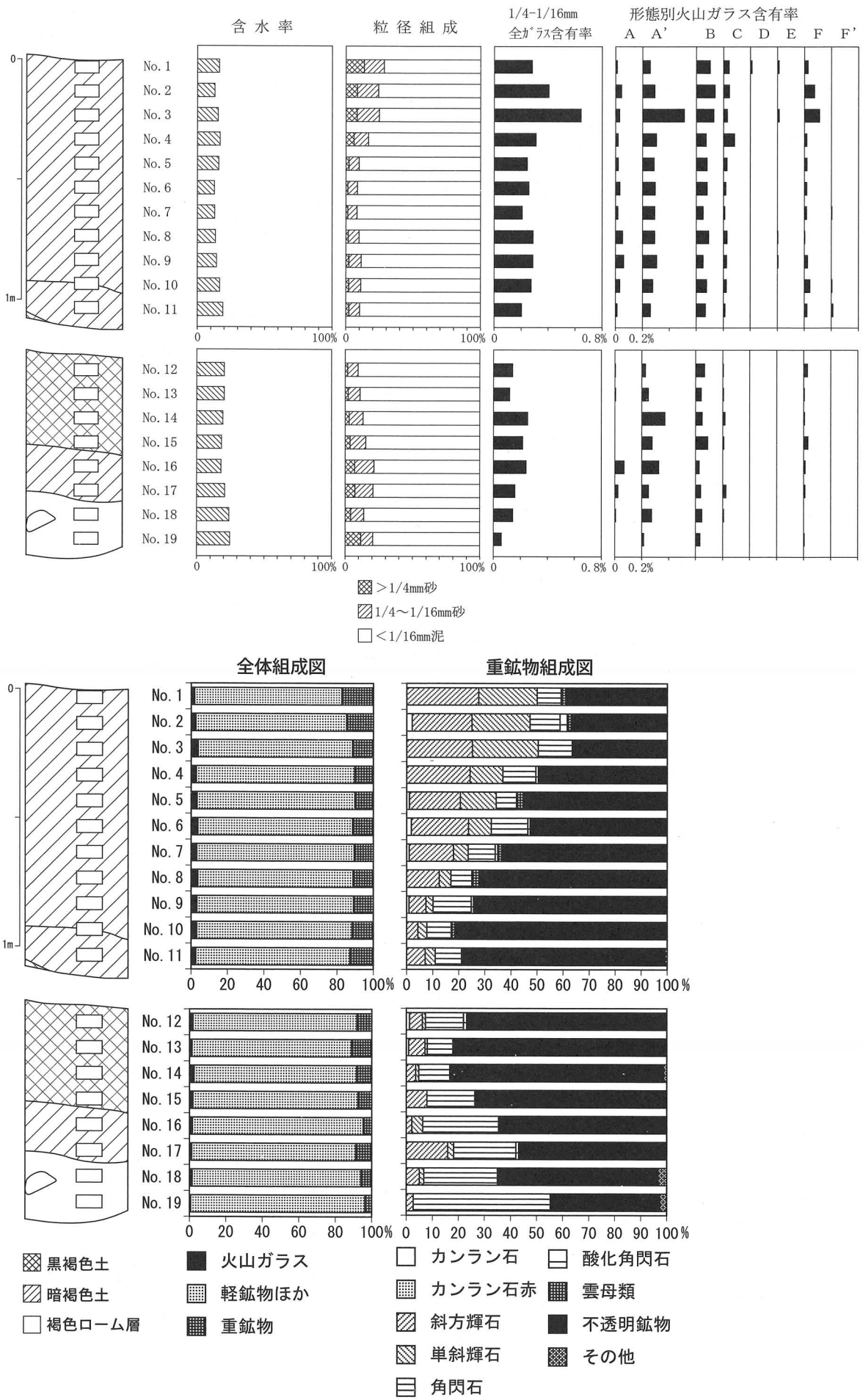
地点	試料	形態ガラス	水和層	色調	火山ガラス屈折率	対比されるテフラ
Ａ地点	No. 3	泡壁型（Ａ・Ａ’型）	無	無色	1. 498-1. 501	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ
Ａ地点	No. 16	泡壁型（Ａ・Ａ’型）	無	無色	1. 498-1. 501	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ

第２表　火山ガラス・重鉱物などの計測粒数（+ は計数以外の検出を示す）

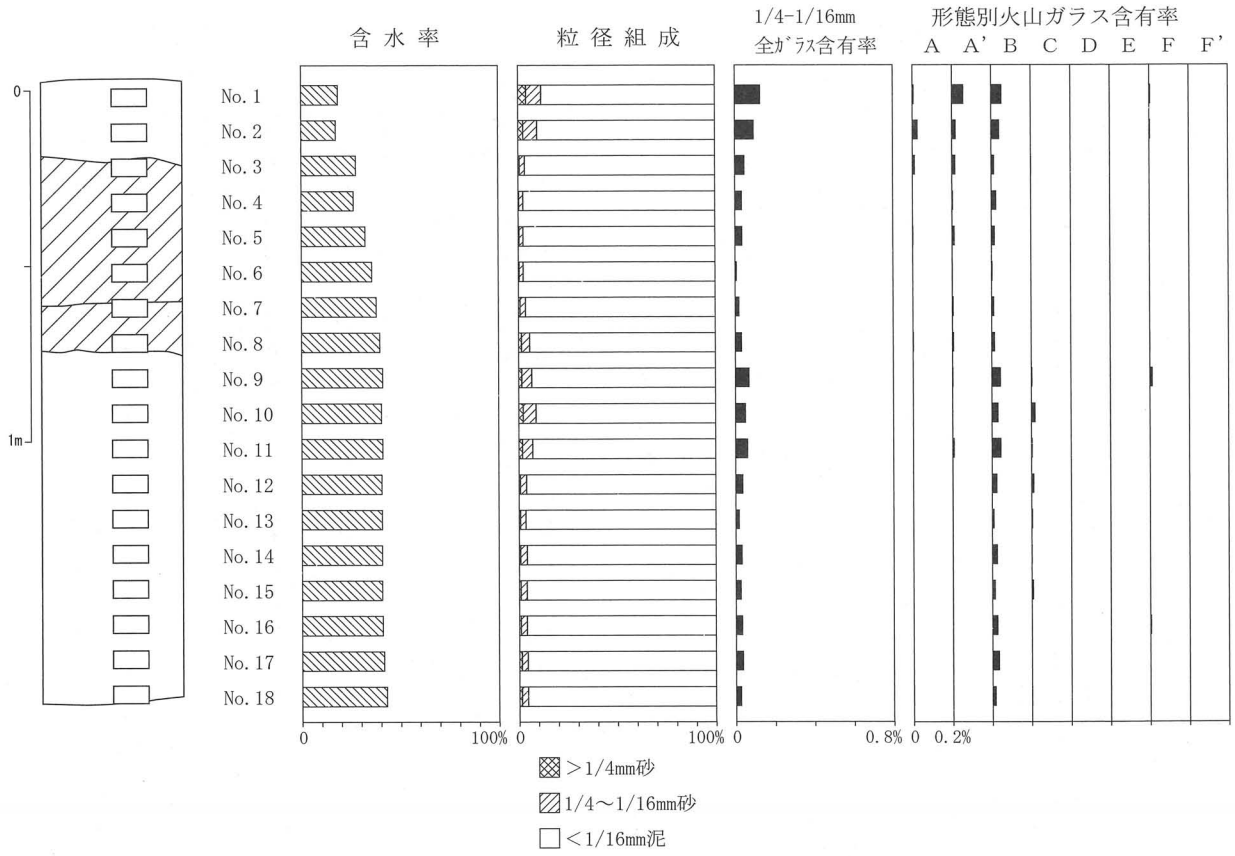
地点		滝坂遺跡Ａ地点																		
試料番号		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19
火山ガラス	A　無色	1	3	2	2	3	5	3	7	7	4	2	1	1			5	2	1	
	A　褐色																			
	A'　無色	4	6	19	10	12	14	14	12	11	9	8	4	6	17	7	9	4	8	2
	A'　褐色									1										
	B　無色	7	9	8	7	11	12	8	12	6	9	8	9	5	5	8	2	3	5	4
	B　褐色											1								
	C　無色	3	3	2	8	3	3	2	4	3	3	2	1	1	2	1		2	1	
	C　褐色					1														
	D　無色	1																		
	E　無色	1		1					1	1										
	F　無色	2	5	7	2	3	3	3	1	3	5	3	4	1	1	3	1	1		1
	F'　無色							1			1	2								
	F'　褐色																			
重鉱物	カンラン石		3			1	2	1		1			1							
	カンラン石赤													1						
	斜方輝石	48	34	29	25	20	25	18	14	7	5	9	4	7	3	6	1	14	3	1
	単斜輝石	39	33	29	13	14	10	6	5	3	4	5	1	1	1		2	2	1	
	角閃石	16	17	15	13	8	16	11	9	16	11	13	12	11	10	14	14	21	17	20
	酸化角閃石		4		1		1	1		1			1					1		
	黒雲母	3	3	1	1	3	1	2	3	1	2									
	白雲母																			
	緑泥石																			
	緑簾石																		1	
	ザクロ石																			
	ジルコン			+		+	+		+	+		1			1				1	1
	不透明鉱物	68	54	41	50	56	59	67	81	80	95	100	63	92	69	56	31	50	37	16
その他		807	826	846	868	865	849	863	851	859	852	846	899	874	891	905	935	900	925	955
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

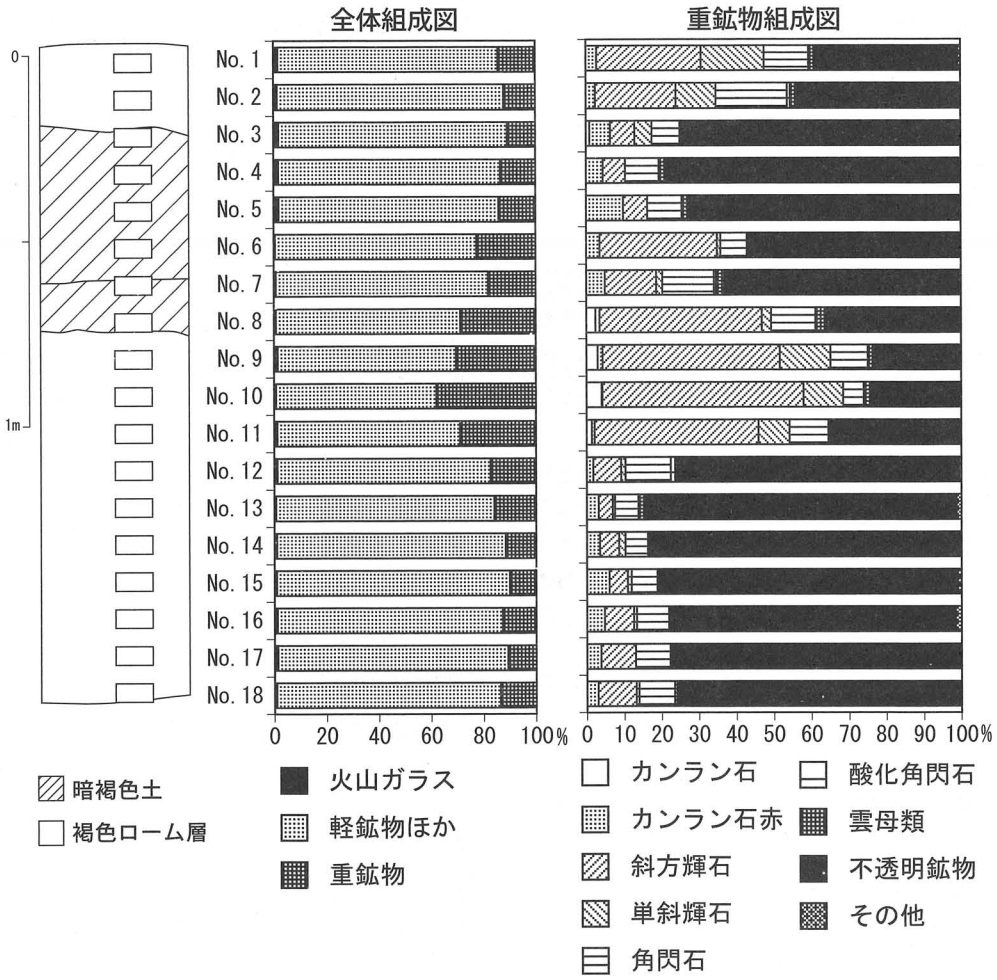
地点		滝坂遺跡Ｂ地点																	
試料番号		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18
火山ガラス	A　無色	1	4	5	1	2			1										1
	A　褐色																		
	A'　無色	8	3	7	3	7	2	3	2	1		2		1					
	A'　褐色																		
	B　無色	7	6	6	13	9	3	5	4	9	5	9	8	4	8	5	9	12	6
	B　褐色																		
	C　無色			1						1	3	1	4	2	1	3			1
	C　褐色																		
	D　無色																		
	E　無色																		
	F　無色	1	1		1	1			1	3					1	1	2	1	1
	F'　無色																		
	F'　褐色																		
重鉱物	カンラン石			1					7	9	15	4							
	カンラン石赤	4	3	6	6	14	8	9	3	4	1	2	3	5	4	6	6	4	4
	斜方輝石	40	26	7	8	9	71	25	125	144	204	127	13	6	6	5	10	10	14
	単斜輝石	24	13	5			2	3	7	41	40	24	2	1	2	1	1		1
	角閃石	17	23	8	12	13	16	25	34	30	21	30	21	10	7	7	11	10	13
	酸化角閃石		1					1				1	2						
	黒雲母	2	2		2	2	1	4	7	4	7	3	1	3					1
	白雲母										1								
	緑泥石						1												
	緑簾石	1												2			1		
	ザクロ石																1		
	ジルコン				+			1					1			1	+		+
	不透明鉱物	55	53	81	106	103	127	114	105	72	91	99	131	133	98	81	98	84	104
その他		840	865	873	848	840	769	810	704	682	612	698	814	833	873	890	861	879	854
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

地点		滝坂遺跡Ｃ地点								
試料番号		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9
火山ガラス	A　無色	1	2	1	3	4	5	7	6	2
	A　褐色									
	A'　無色	12	4	9	16	12	21	17	11	16
	A'　褐色									
	B　無色	8	6	2	8	5	8	12	8	4
	B　褐色				1					
	C　無色	3			5	5	1		4	1
	C　褐色									
	D　無色									
	E　無色			1			1			1
	F　無色	2	3	4	1	5	2	1	1	11
	F'　無色									
	F'　褐色									
重鉱物	カンラン石	1	2				2		1	
	カンラン石赤				2			1		
	斜方輝石	37	30	25	17	6	11	8	7	4
	単斜輝石	30	32	29	5	8	2	5	3	3
	角閃石	17	27	23	18	16	19	16	6	8
	酸化角閃石	5					1			
	黒雲母	2	1	1	2	6			1	
	白雲母									
	緑泥石									
	緑簾石									
	ザクロ石									
	ジルコン									
	不透明鉱物	28	21	44	43	58	48	42	66	72
その他		854	872	861	879	875	879	891	886	878
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

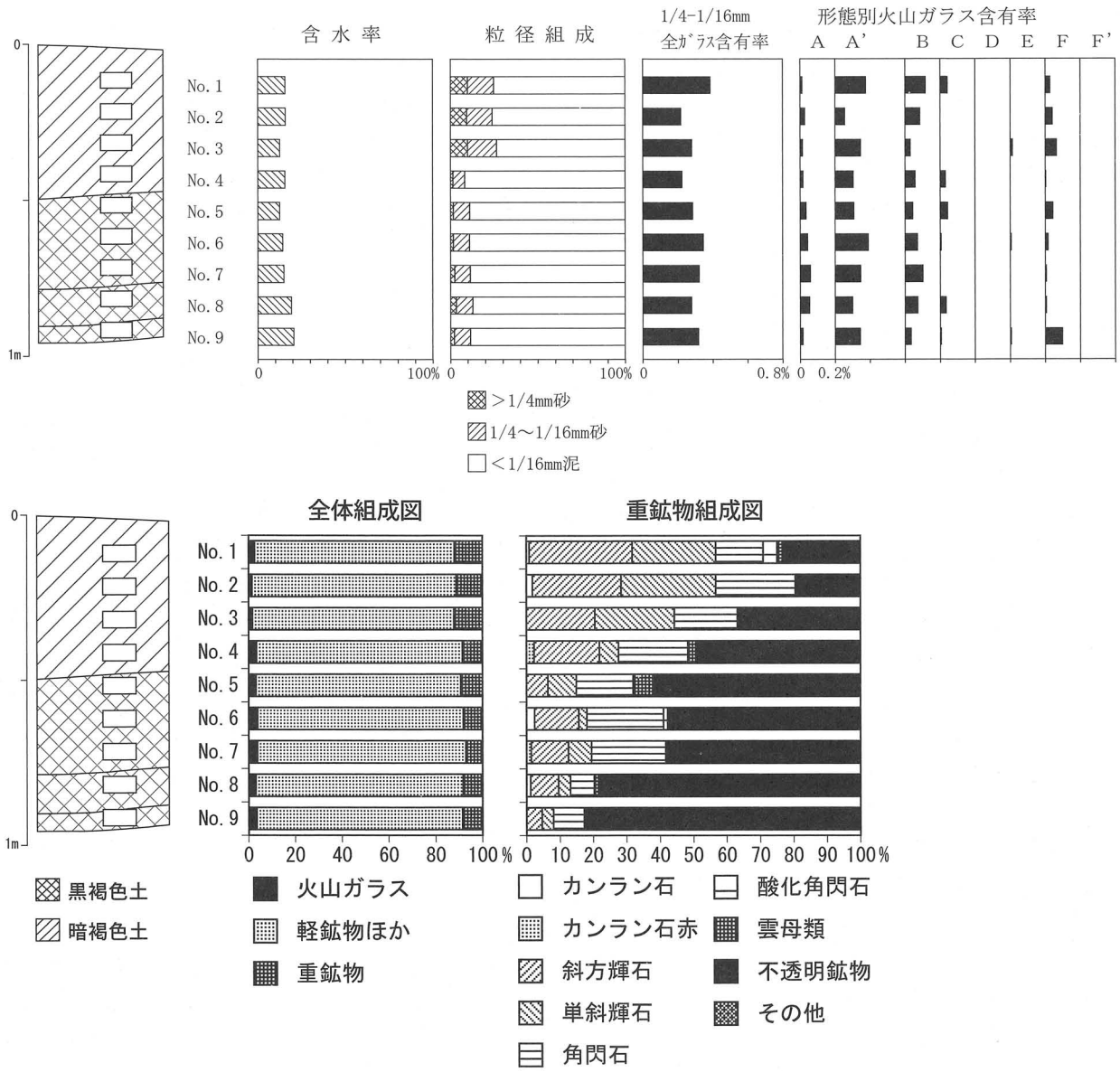


第４図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（Ａ地点）





第５図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（Ｂ地点）



第６図　火山ガラス含有率と重鉱物組成（Ｃ地点）

Ｆ型火山ガラスが小さな極大を示す。Ａ地点 No.3 と No.16 におけるＡ・Ａ' 型火山ガラスの屈折率は、1.498 ～ 1.501 であった。従って、Ａ・Ｃ地点で連続的に検出される泡壁型火山ガラスの多くは、姶良 Tn テフラ（ＡＴ）(註2) に由来する二次堆積粒子であると考えられる。

重鉱物では、Ａ地点 Nos.1 ～ 3、およびＣ地点 Nos.1 ～ 3 など上部において、重鉱物の割合が漸増し、輝石が多く、単斜輝石＞斜方輝石の傾向が特徴である。Ａ地点 Nos.10 ～ 14 および地点 Nos.8 ～ 9 は、不透明鉱物の極大部を形成している。Ａ地点の下半部（No.12 以下）では、火山ガラス含有率がやや低率で、重鉱物組成では角閃石・不透明鉱物が多く上方に向かって角閃石の減少と不透明鉱物の増加傾向が認められる。これに対しＡ地点上半部（Nos.1 ～ 11）とＣ地点では、火山ガラスの若干の増加、重鉱物組成での輝石の増加と不透明鉱物の減少とが認められる点が共通する。Ａ地点上半部（Nos.1 ～ 11）とＣ地点とはほぼ同様の層位と認められる。Ａ地点下部で角閃石が多い現象は、Ｂ地点では認められない。信州ロームを構成するテフラのうち角閃石が特徴的に検出されるのは、On-Pm1 である。On-Pm1 は、角閃石ほのかに、ジルコンや黒雲母などを伴うことで特徴づけられる。Nos.18 ～ 19 は、On-Pm1 に近い層位である可能性もあるが、礫を含むことから On-Pm1 に由来する粒子が二次堆積した地層である可能性の方が高いと考えられる。

［Ｂ地点］（第５図）

Ｂ地点は、遺跡内の最高地点に近い部分で、自然堆積の標準土層が観察されると期待された地点である。

含水率は、Nos.8 ～ 18 で 40 ～ 43％の安定した値を示し上方に漸減する。粒径組成における 1/4 ㎜以上の粒子は、1

～4%と極めて低率であるが、上部で増加傾向が見られる。1/4～1/16㎜粒子は、2～8%の値を示し、No.10付近（Nos.8～11）とNos.1～2に極大部を形成している。

火山ガラスは、含有率が極めて少なく、1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率は最大でも0.1%であり、火山ガラスの濃集部分は認められない。B型火山ガラスは微量ながら連続して検出されたが、他の形態の火山ガラスはほとんど検出されない。ＡＴ層準は削剥されたものと考えられる。

重鉱物組成では、Nos.1～2は、斜方輝石・単斜輝石・角閃石などの増加と、不透明鉱物の減少とで特徴づけられ、Ａ・Ｃ地点上部の傾向と類似する。これらの部分は、下位の暗褐色土層上にのる褐色土層からなり、一次堆積層とは異なる耕作土や攪乱層などと判断される。Nos.8～11は、斜方輝石が特徴的に多く、不透明鉱物が極小となる。カンラン石は、赤色よりも普通の無色のカンラン石が多い傾向がある。Nos.8～11で1/4～1/16㎜の砂分率も多く、自形結晶も目立つことから、テフラの降灰を示している可能性がある。テフラの降灰としては御岳火山や八ヶ岳火山由来のテフラが候補にあげられる。

ＡＴの層位

自然堆積におけるＡＴなどの広域テフラ層準の検出を試みたが、それらが本遺跡の分析値点周辺において自然堆積層として存在する可能性はほとんどない。Ａ地点No.3で0.3%程度のＡ’型火山ガラスの小規模な極大が認められた。これらの火山ガラスは、ＡＴと同様の屈折率であるが二次堆積粒子であると判断された。ＡＴの場合自然堆積層が残存していれば、ＡＴに由来する火山ガラスの検出は容易である。八ケ岳南麓地域では、丘の公園14番ホール遺跡、丘の公園第2・第6遺跡、横針前久保遺跡などでＡＴ層準が検出されている（河西1989,1990a,1990b,2000，河西・保坂1989）。滝坂遺跡周辺においては、ＡＴ層準の地層が、何らかの原因により削剥されている可能性が高い。削剥された堆積物は、韮崎台地上に広く分布しているため、Ａ・Ｃ地点のように後世に形成された地層中に二次堆積粒子として混在するＡＴ火山ガラスを検出することができる。

註１　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Ａｘは、Ａｘ（%）＝（Ｃ／Ｂ）×（Ｅｘ／Ｄ）×100で算出される。ただし、Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）、Ｃ：1/4～1/16㎜粒径砂分の重量（ｇ）、Ｄ：計数した1/4～1/16㎜粒径粒子の総数、Ｅｘ：計数したｘ型火山ガラスの粒数。

註２　ＡＴの噴出年代は、14Ｃ年代では約2.4～2.5万年前が一般的に用いられているが、暦年較正した年代は2.6～2.9万年前程度とされている（町田ほか、2003）。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、254-269。

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学，13，19-30。

河西学（1989）丘の公園地域のテフラと地形。『丘の公園第２遺跡』，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第46集、165-184。

河西学（1990a）丘の公園第５遺跡・第６遺跡のテフラ。山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集『丘の公園第５遺跡』、33-41。

河西学（1990b）立石遺跡での先土器遺物を包含する地層。山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、6、47-58。

河西学（2000）テフラ分析。『横針前久保遺跡・米山遺跡・横針中山遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第176集、59-62。

河西学・保坂康夫（1989）山梨県におけるＡＴと石器群。山梨文化財研究所報、第７号、2-3。

町田洋・新井房夫（2003）『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』。東京大学出版会、336p.

第2節　滝坂遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

滝坂遺跡は、山梨県韮崎市水神に所在し、釜無川左岸の半島状を呈する韮崎泥流からなる台地（七里岩）上に立地する。本遺跡は、縄文時代、古代、中世頃の遺跡とされており、発掘調査結果によれば、掘立柱建物跡や溝跡、土坑、ピット等の遺構が検出されている（山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 ,2007）。

本報告では、滝坂遺跡より検出された遺構の年代観の検討や炭化物の同定を目的として、各遺構より出土した炭化物を対象に自然科学分析調査を実施する。

1. 試料

試料は、土坑3基（2,10,13号土坑）および200号ピットから出土した炭化物4試料である。各試料の観察の結果、2号土坑 1172は、細片化した芯持丸木状の炭化材、10号土坑 炭束は最大2㎝角～微細な炭化材や炭化物、13号土坑 炭1139と200号ピット 柱材？の2試料は最大1㎝角～微細な炭化材や炭化物からなることが確認された。

これらの試料のうち、複数の細～微細な炭化材や炭化物片からなる10,13号土坑と200号ピット試料を対象に種実遺体の抽出および同定を行う。また、4試料を対象に放射性炭素年代測定を行う。放射性炭素年代測定試料は、遺存状況の良好な炭化材や炭化材同定結果から各試料で主体となる分類群を対象としている。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。放射性炭素年代は、$\delta^{13}C$の値を用いて同位体効果の補正を行った値（補正年代）と、補正前の値を併記する。

暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いる。その際、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730 ± 40年）を較正することである。なお、暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表記する。

暦年較正結果は、測定誤差σ・2σ（σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比とは、σ・2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(3) 種実同定

炭化物試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。抽出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種類別に容器に入れて保管する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、2号土坑 1172（クヌギ節）は950 ± 30yrBP、10号土坑 炭東（クヌギ節）は2,530 ± 30yrBP、13号土坑 炭1339（クヌギ節）は2,630 ± 30yrBP、200号ピット 柱材？（ブナ属）は310 ± 30yrBPを示す。また、暦年較正結果（σ）は、2号土坑1172はcalAD1,028-calAD1,151、10号土坑 炭東はcalBC790-calBC593、13号土坑 炭1339はcalBC817-calBC792、200号ピット 柱材？はcalAD1,521-calAD1,642である。

(2) 樹種同定

結果を表3に示す。土坑およびピットから出土した炭化材は、針葉樹1分類群（モミ属）と広葉樹2分類群（ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節）に同定され、200号ピット柱材？の炭化材からは2分類群（モミ属・ブナ属）が認められた。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（Abies） マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ブナ属（Fagus） ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Quercus sect. Cerris） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

(3) 種実同定

200号ピットからはアカザ科の種子の破片が1点抽出された。一方、この他の炭化物試料では、種実は1点も認められなかった。以下に、アカザ科の形態的特徴を記す。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

未炭化の種子の破片が検出された。黒色、径1.2㎜程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

4. 考察

2号土坑 1172（炭化材）の暦年較正結果（σ）はcalAD1,028-calAD1,151と11～12世紀頃を示した。試料とした芯持丸木状を呈する炭化材は、落葉広葉樹のクヌギ節に同定された。日本のクヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、現在の本地域ではクヌギが一般的なのに対し、アベマキは分布していないことから、今回確認されたクヌギ節はクヌギの可能性が高い。クヌギの木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも優良な部類に入る。

山梨県内における当該期のクヌギの確認事例では、百々遺跡（南アルプス市）の平安時代とされる土坑より出土した炭化材に認められた事例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社,2002a）。さらに、用途が明らかな事例では、天狗沢瓦窯遺跡（甲斐市）の須恵器窯や、野牛島・西ノ久保遺跡（南アルプス市）の炭窯等から出土した燃料材や薪炭材とみられる炭化材に認められた事例がある（千野,1990; 未公表）。

10号土坑 炭東（炭化材）と13号土坑 炭1339（炭化材）の暦年較正結果（σ）はcalBC790-calBC593とcalBC817-calBC792と比較的近似する暦年代を示した。また、分析対象とした炭化材も、全てクヌギ節であった。

本遺跡周辺の縄文時代晩期および後期の遺跡より出土した炭化材を対象とした分析調査は、宿尻遺跡（韮崎市）や

社口遺跡（北杜市）、上ノ原遺跡（北杜市）等で事例がある（植田 ,1997; 藤根 ,1999; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2002b）。これらの調査結果では、建築部材を中心にクリを多用する傾向が認められているが、クヌギ節の事例は少ない。

200 号ピット 柱材？（炭化材）は calAD1,521-calAD1,642 と中世末～近世頃の暦年代を示した。本試料の炭化材は落葉広葉樹のブナ属を主体とする一方、針葉樹のモミ属も認められ、複数の分類群から構成されることが確認された。このうち、ブナ属は重硬で強度は比較的高い種類であり、モミ属は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低いとされる種類である。

周辺地域に当該期の調査事例では、モミ属は、蔵福遺跡（笛吹市）や宮沢中村遺跡（南アルプス市）で戦国時代～江戸時代初期の柱材に認められた事例がある（渡辺・藤平 ,1984; 山梨県埋蔵文化財センター ,2000）。一方、ブナ属は、木製品や建築部材等いずれにも確認された事例がなく、木材利用状況は不明である。なお、本遺構からはアカザ科の種子が 1 個検出されたが、未炭化の種実であることから、現生の種子が混入したものと推定される。

引用文献

藤根　久 ,1999, 上ノ原遺跡出土材の樹種同定 .「山梨県北巨摩郡須玉町　上ノ原遺跡　本文・写真図版編」, 上ノ原遺跡発掘調査団 ,201-203.

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2002a, 百々遺跡 1 の炭化材・種実・骨分析報告 .「百々遺跡 1」, 山梨県埋蔵文化財センター ,200-201.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2002b, 自然科学分析 .「山梨県韮崎市　宿尻遺跡　- デイサービスセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」, 韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会 ,7-8.

Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

植田弥生 ,1997, 社口遺跡から出土した炭化材の樹種 .「社口遺跡第 3 次調査報告書」, 山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団 ,194-198.

渡辺利一・藤平登留 ,1984, 蔵福遺跡出土木材の識別結果 .「石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡　山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」, 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 3 集 , 山梨県教育委員会 ,193.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

山梨県埋蔵文化財センター ,2000, 宮沢中村遺跡 . 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集 ,238p.

山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 ,2007, 発掘調査最新情報 .2007 年度上半期遺跡調査発表会要旨 ,13.

第３表　放射性炭素年代測定結果

試料		補正年代	δ13C	測定年代	Code No.
遺構名/資料名(No.)	性状	(yrBP)	(‰)	(yrBP)	
2号土坑　1172	炭化材(クヌギ節)	950± 30	-32.22±0.65	1,070± 30	IAAA-82022
10号土坑　炭東	炭化材(クヌギ節)	2,530± 30	-25.19±0.54	2,540± 30	IAAA-82023
13号土坑　炭1339	炭化材(クヌギ節)	2,630± 30	-30.06±0.81	2,710± 30	IAAA-82024
200号ピット 柱材？	炭化材(ブナ属)	310± 30	-33.70±0.49	450± 30	IAAA-82025

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第４表　暦年代較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
2号土坑 1172 (炭化材)	952± 27	σ	cal AD 1,028 - cal AD 1,049	cal BP 922 - 901	0.294	IAAA-82022
			cal AD 1,084 - cal AD 1,124	cal BP 866 - 826	0.527	
			cal AD 1,137 - cal AD 1,151	cal BP 813 - 799	0.180	
		2σ	cal AD 1,024 - cal AD 1,059	cal BP 926 - 891	0.283	
			cal AD 1,063 - cal AD 1,155	cal BP 887 - 795	0.717	
10号土坑 炭東 (炭化材)	2,534± 30	σ	cal BC 790 - cal BC 750	cal BP 2,740 - 2,700	0.425	IAAA-82023
			cal BC 687 - cal BC 667	cal BP 2,637 - 2,617	0.221	
			cal BC 640 - cal BC 593	cal BP 2,590 - 2,543	0.354	
		2σ	cal BC 796 - cal BC 731	cal BP 2,746 - 2,681	0.366	
			cal BC 692 - cal BC 660	cal BP 2,642 - 2,610	0.186	
			cal BC 651 - cal BC 544	cal BP 2,601 - 2,494	0.448	
13号土坑 炭1339 (炭化材)	2,630± 32	σ	cal BC 817 - cal BC 792	cal BP 2,767 - 2,742	1.000	IAAA-82024
		2σ	cal BC 887 - cal BC 883	cal BP 2,837 - 2,833	0.005	
			cal BC 841 - cal BC 770	cal BP 2,791 - 2,720	0.995	
200号ピット 柱材? (炭化材)	310± 26	σ	cal AD 1,521 - cal AD 1,575	cal BP 429 - 375	0.682	IAAA-82025
			cal AD 1,583 - cal AD 1,590	cal BP 367 - 360	0.080	
			cal AD 1,623 - cal AD 1,642	cal BP 327 - 308	0.238	
		2σ	cal AD 1,491 - cal AD 1,602	cal BP 459 - 348	0.765	
			cal AD 1,613 - cal AD 1,647	cal BP 337 - 303	0.235	

1)RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第５表　樹種同定結果

試料		樹種	備考
遺構名	試料名		
2号土坑	No.1172	コナラ属コナラ亜属クヌギ節*	芯持丸木状(1/3残,半径;約1,4cm、最外年輪含む年輪5～6年分)
10号土坑	炭東	コナラ属コナラ亜属クヌギ節*	約1.5cm角の炭化材片
13号土坑	炭1339	コナラ属コナラ亜属クヌギ節*	約1cm角の炭化材片
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
200号ピット	柱材？	ブナ属*	約5～10mm角炭化材片4点
		モミ属	
		ブナ属	
		ブナ属	
		ブナ属	

*放射性炭素年代測定試料

第5章　総　括

滝坂遺跡は、9,200㎡にも及ぶ大規模な調査範囲であったにも関わらず、検出された遺構・遺物は非常に少ないものである。出土遺物を概観すると、旧石器、縄文、弥生、古墳？、古代？、中世、近世と各時代の遺物を含んでいるにも関わらず、いずれも破片資料である上に、出土量が僅少であることによる。遺構についても、溝、土坑、掘立柱建物等で構成され、性格や年代を明確にできるものが少ない。こうした状況を踏まえつつ、以下に考察を述べたい。

1.14号溝（谷）について

調査区の北端で検出された谷状地形であるが、実感としては「沢」という方が実態に近い。遺構確認当初、中世堀跡等の可能性も考えられたが、断面形態は非常にゆるやかな傾斜であり、ほぼ全面から縄文中期～晩期の土器片がみられたことから、自然地形と考えられた。土器片はいずれもだいぶ磨耗しており、降雨時に谷を流れ落ちる雨水等の影響が考えられよう。調査時においても、大雨に遭うと水の通り道となり、濁流となって下方の畑に大量の水と泥が流れ落ちていた。こうした谷の立地状況から考えると、これら14号溝内の遺物については、より標高の高い北方、ないし東方からの流れ込みである可能性が高い。調査区全体の遺構を眺めても、縄文時代のものと考えられる遺構は、柱穴内から縄文晩期の土器片が出土した6号掘立柱建物、炭化材の放射性炭素年代測定や暦年較正などの結果から縄文晩期の遺構と考えられた10号土坑、13号土坑などがある。しかし、縄文中期初頭（五領ヶ台式期）や縄文後期（堀之内式期）と考えられる遺構は検出されなかった。このような状況も、遺物の多くが流れ込みであろうという考えを補足できる。

わずかながら、時代の降る遺物である陶磁器片なども出土しているが、以上のような状況から流れ込みによる混入遺物として考えざるを得ない。出土遺物の大部分が縄文土器片であることから、谷地形の大部分は縄文晩期以降ほとんど埋没する状況であったと考えられる。

2.溝について

今回の調査で確認された溝は、いずれも築造時期が不明確なものの、出土遺物から近世～近代頃の年代にほぼあてはめられよう。共通点として、浅い溝であること、直線的であること、平行した配置を示すことがあげられる。このことから地境の溝であったと考えられる。ほぼ直角に曲がる11号溝などのようなものもあるが、これは一部が7号溝の延長である可能性もあり、矛盾したものとはいえない。調査地点は近年まで桑畑などが営まれた耕地であり、おそらく近世以降～現代まで耕地としての利用が考えられる。

3.掘立柱建物群について

近世以前の滝坂遺跡については、1～6号掘立柱建物遺構の存在がある。

1～5号掘立柱建物については、出土遺物の年代、配置関係、推定柱材（炭化材）からの年代測定から、中世末～近世初頭頃の建物と考えられ、特に2、3、5号掘立柱建物については、東西に隣接して並ぶ状況が窺われ、同時代性の高い建物群といえる。3号掘立柱建物の柱材と考えられる炭化材の年代測定や、5号掘立柱建物の中央に位置する217号ピット出土の擂鉢の年代（16c中葉）などは、年代決定の定点として位置付けられるものである。1号、4号は、ややそれとは離れた位置にあるが、建物の規模や方位が近しいことから、それほど時代を隔てたものとは考えにくい。また、これらの建物群は、ピットの状況から、建物を建て替えた形跡がみられないという共通点がある。

このような状況からこれらの建物群は、1.同時代に並存した可能性が高いこと、2.全体に計画性をもって建設されたこと、3.建て替える需要が無く短期間で廃絶に向かったこと、が考えられる。

6号掘立柱建物については、柱穴から縄文晩期の土器片が検出されており、年代的に1～5号掘立柱建物とは峻別される。ただし、中世以前の人間の生活に関わる遺構としては唯一のものである。

4.まとめ

以上、滝坂遺跡の特徴ともいえる遺構について概観してきたが、掘立柱建物群を除き、全時代を通じて、ほぼ人間の生活の痕跡を辿ることが困難な状況が窺えた。ただし、散発的な活動の場ではあったとみえ、調査区全体から各時代の遺物が散見された。また、かつては14号溝（谷）のような谷状地形が形成されており、特に縄文時代の遺物を中心に、谷内への遺物の流れ込みが非常に多いことからも、該期にそれが顕著であることが窺えた。それ以降、人間の関与を窺い知ることのできる遺構・遺物はほとんどみられない。これはこの土地が居住の場に適さず、長きに渡って人の入植が

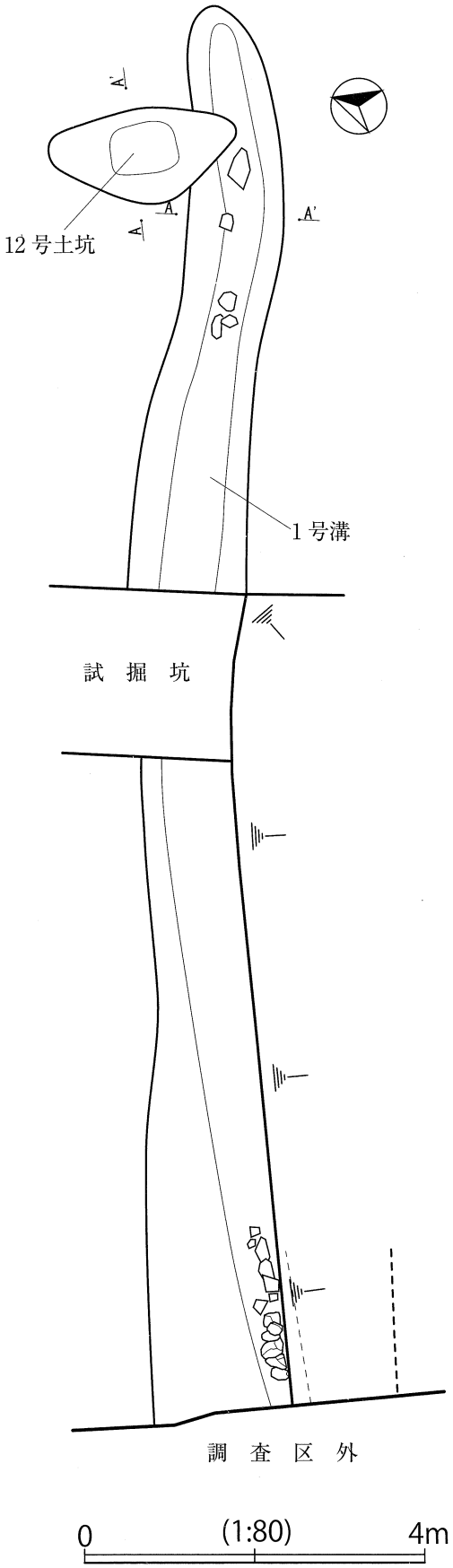
行われなかったことを示す。しかし、中世末～近世初頭頃に至り、突如として、掘立柱建物群が登場する。これらの建物群は、先にあげた通り、同時代性が高く、計画的に建設され、短期間で廃絶するという特徴をもつ。これらの特徴と合わせて、人がそれまで居住の空間として選地しなかった場所に、敢えてこれらの建物群を建設するという強い動機はどこから生まれるのであろうか。また、中世末～近世初頭という時期を考えると、新府城跡との関連を想起せざるを得ない。これらの建物は廃絶された後、遺構として認識できるのは、先にあげた地境の溝群であり、耕地となったであろうことが窺える。と、するとやはりこれらの掘立柱建物群は、この地を居住の空間として開拓し、定住したものではなく、結果として、一時的な住まいであったといえる。これらの建物に居住した人が、新府城とどのような関わりをもったかについては想像するしかないが、年代的にも、状況的にも新府城との関連の中で理解するのが、自然であると思われる。

地理的な視点では、滝坂遺跡は新府城跡から南へ約 2km 隔てた地点にあり、新府城から遠距離にあるように感じられるが、新府城とその外郭と考えられている能見城との距離も約 2km の距離であって、新府城跡を中心として見た場合には、それほど不自然な距離とは思われない。

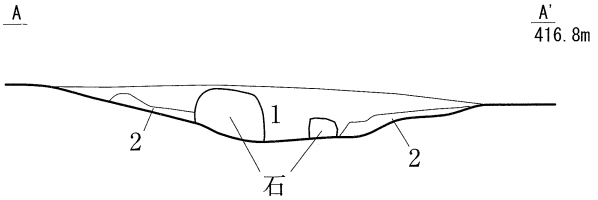
またこれらの建物群は、東西方向に展開する配置状況から、調査区外東西方向に延びる可能性がある。それは俯瞰すると南北に延びる韮崎台地上尾根筋から、枝状に派生した建物群の一部ではないかと推察される。台地上周辺の遺跡においても、能見城の北側に位置する次第窪遺跡では、小型のピット群の集中する地点があり建物群を形成した可能性が窺え、坂井南遺跡においても 2 間 2 間の東西棟掘立柱建物が検出されており、注意が必要である。今後の調査成果によって、今回滝坂遺跡において発見された建物群の性格がより具体的に明らかになることを期待したい。

参考文献

韮崎市教育委員会ほか　1984『坂井南遺跡』
2000『石之坪遺跡（東地区）』
2001『史跡　新府城跡』
2002『宿尻遺跡』
2003『次第窪遺跡』
2004『宿尻第二遺跡』
2007『坂井南遺跡Ⅳ』
甲府市教育委員会ほか　2001『秋山氏館跡』
東北中世考古学会　2001『掘立と竪穴』
今福利恵　1999「山梨県内の五領ヶ台式」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
山梨県　1998『山梨県史』資料編 1　原始・古代 1
山梨県　1999『山梨県史』資料編 2　原始・古代 2
山梨県　2004『山梨県史』資料編 7　中世 4　考古資料
西田町遺跡発掘調査団ほか　1997『西田町遺跡調査報告書』
山梨県教育委員会　1988『金生遺跡（Ⅰ）』
山梨県教育委員会　1989『金生遺跡（Ⅱ）』
山梨県教育委員会　2008『小井川遺跡Ⅲ』
櫛形町教育委員会　1994『鋳物師屋遺跡』
上ノ原遺跡発掘調査団　1999『上ノ原遺跡』
社口遺跡発掘調査団ほか　1997『社口遺跡第 3 次調査報告書』



1号溝

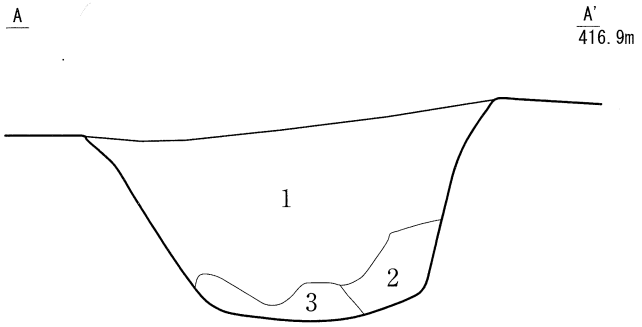


1号溝土層

1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

2. 明褐色土　7.5YR5/6　しまり強く、粘性あり。

12号土坑



12号土坑土層

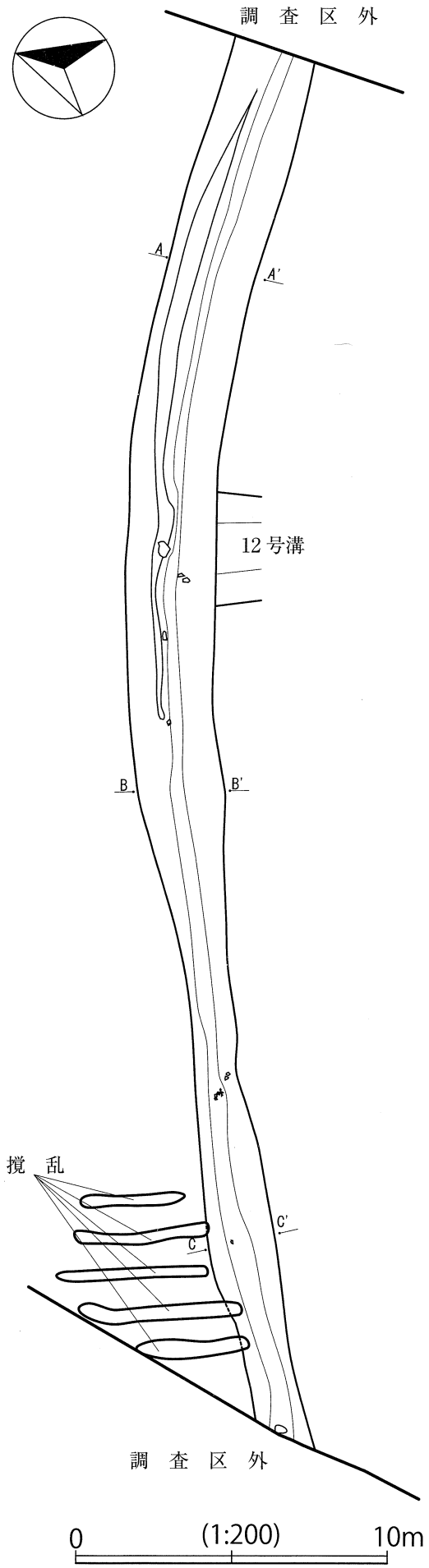
1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。ローム粒少量含む。

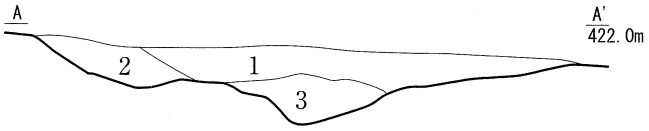
2. 明褐色土　7.5YR5/6　しまり強く、粘性あり。ローム粒を主体とする。

3. 明褐色土　7.5YR5/8　2層より明るい。しまり強く、粘性あり。ローム土を主体とし、 黒色土が斑紋状に混じる。

0　(1:20)　1m

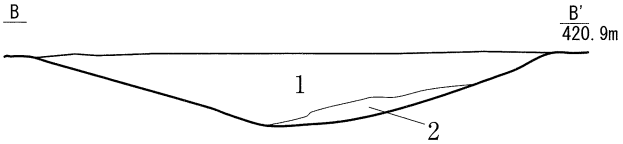
第7図　1号溝・12号土坑平断面図





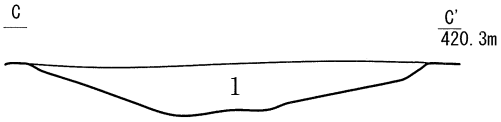
2号溝 A-A' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/3　しまりあり、粘性ややあり。ローム粒少量含む。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまりあり、粘性ややあり。ローム粒多量含む。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまりややあり、粘性あり。ローム粒・炭化粒少量含む。



2号溝 B-B' 土層

1. 褐色土　7.5YR4/4　しまり強く、粘性弱い。炭化粒・焼土粒少量含む、直径 5mm 大の礫をまばらに含む。
2. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまり強く、粘性あり。炭化粒少量含む。

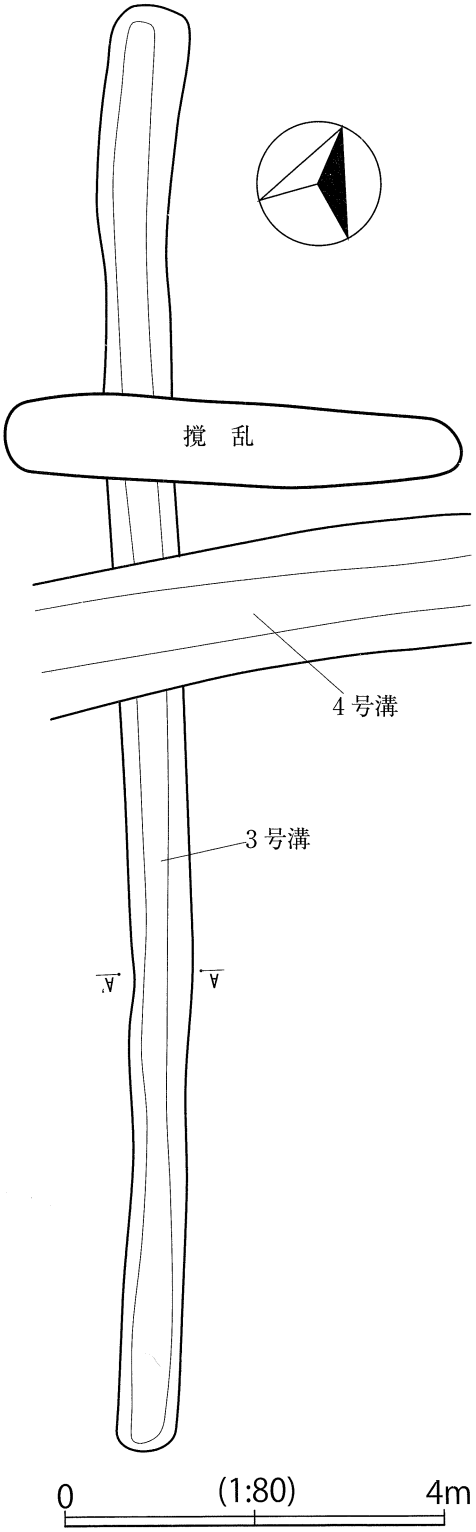


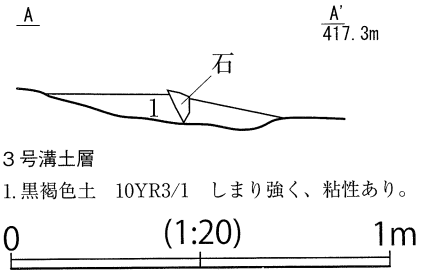
2号溝 C-C' 土層

1. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまりやや強く、粘性あり。炭化粒・焼土粒を少量含む。直径 10mm 大の礫をまばらに含む。

0　(1:40)　2m

第8図　2号溝平断面図

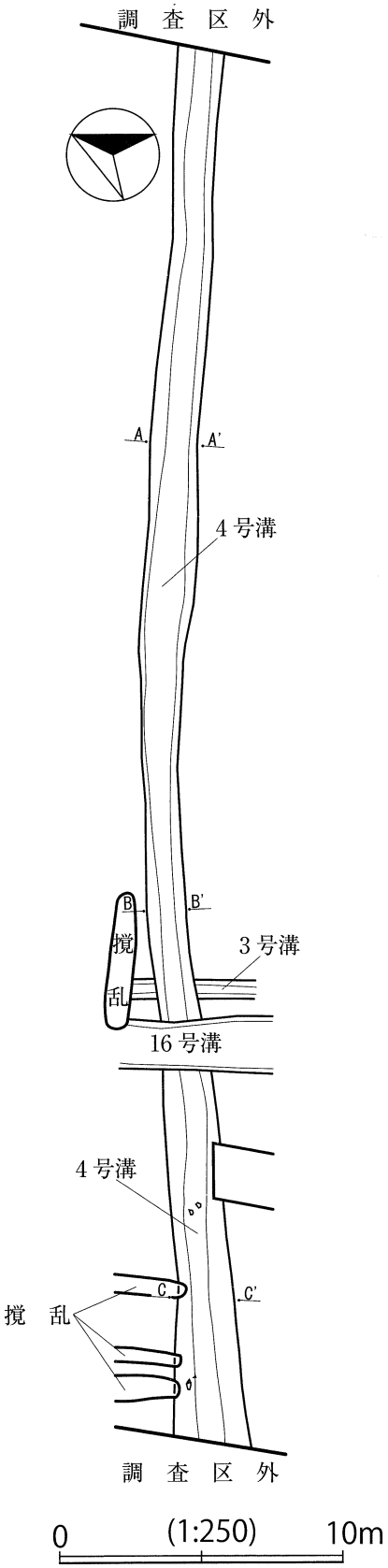


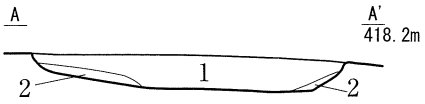


3号溝土層

1.黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。

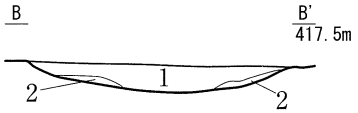
第9図　3号溝平断面図





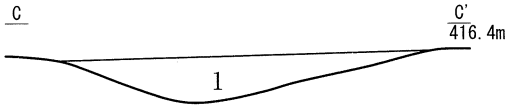
4 号溝 A-A' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性ややあり。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。



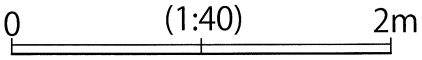
4 号溝 B-B' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性ややあり。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

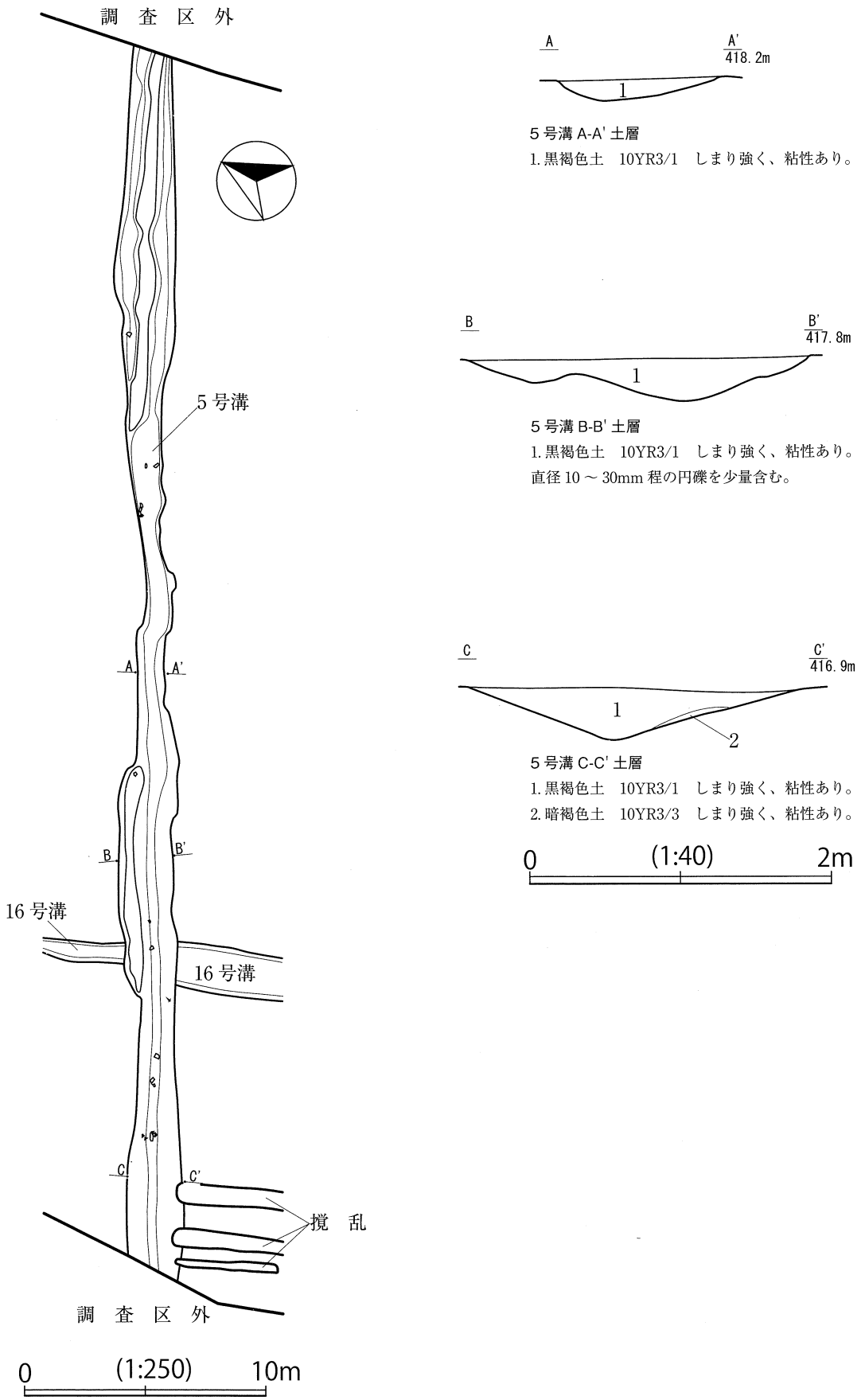


4 号溝 C-C' 土層

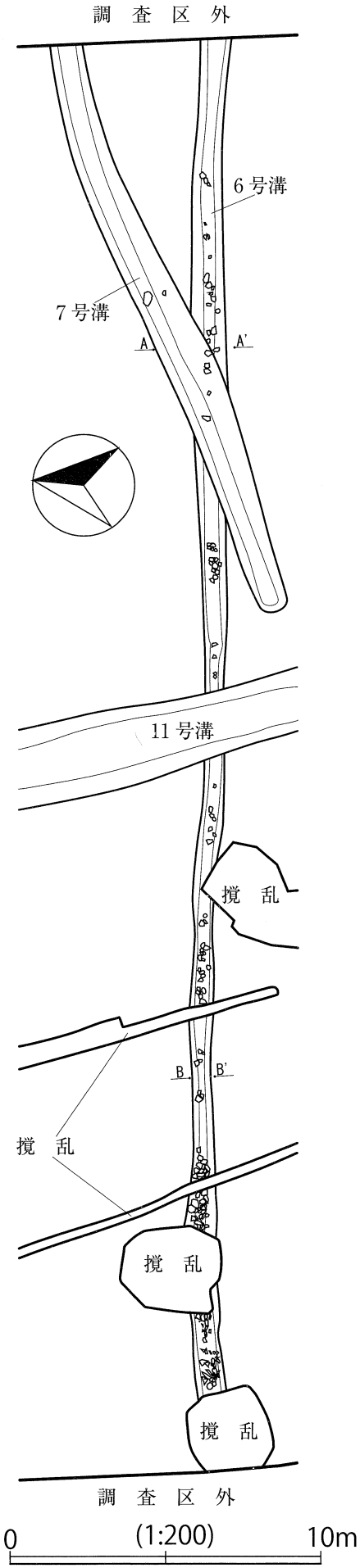
1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。

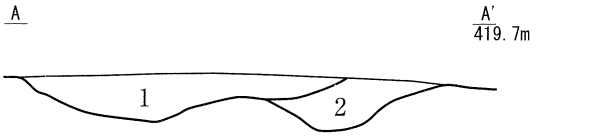


第10図　4 号溝平断面図



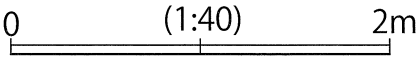
第11図 5号溝平断面図

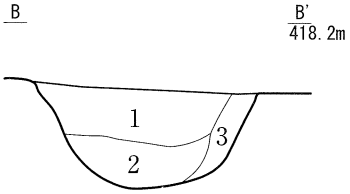




6・7号溝 A-A' 土層

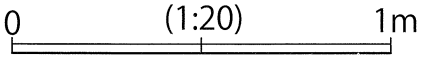
1. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり強く、粘性ややあり。(7号溝覆土)
2. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまりやや強く、粘性あり。ローム粒含む。人頭大の礫を含む。(6号溝覆土)



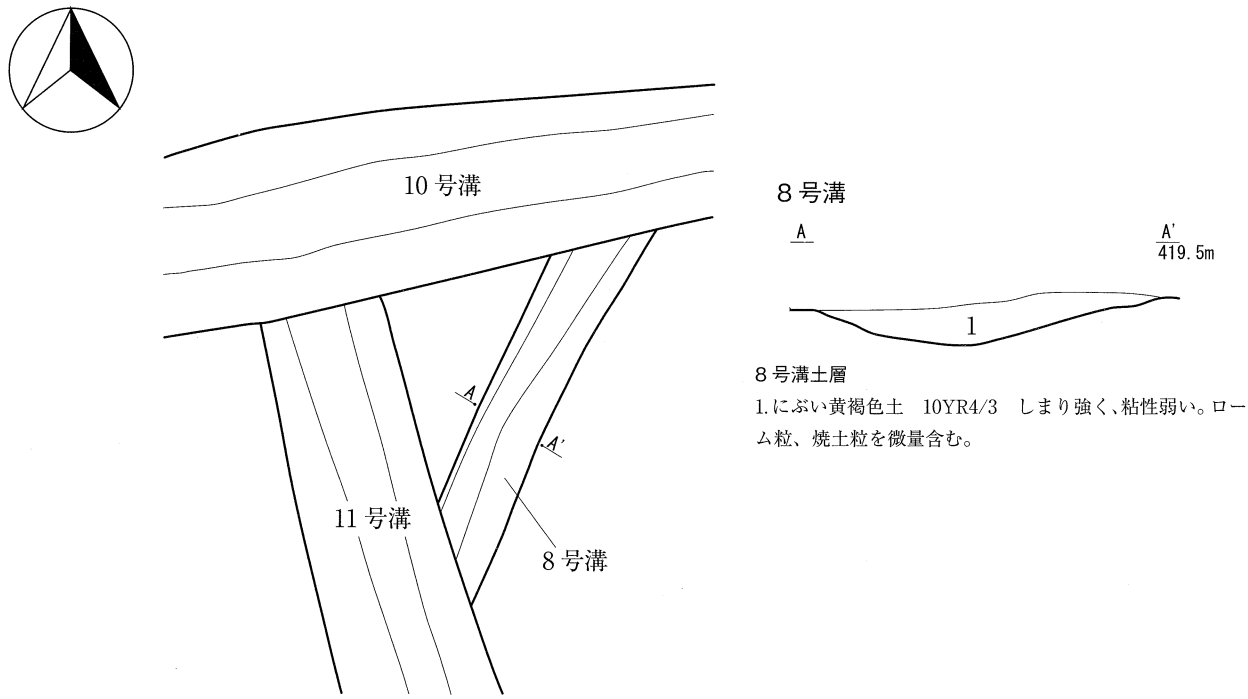


6号溝 B-B' 土層

1. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまりやや強く、粘性あり。ローム粒含む。人頭大の礫を含む。
2. 明褐色土　7.5YR5/6　しまりやや強く、粘性あり。
3. 明褐色土　7.5YR5/8　しまり強く、粘性あり。

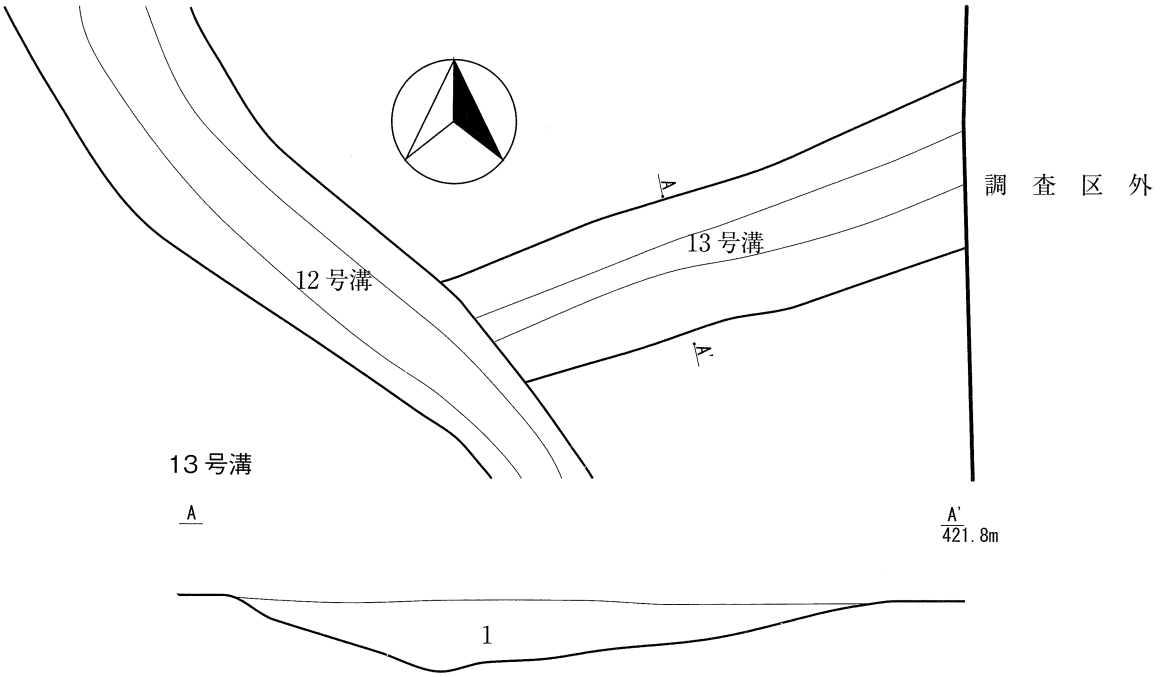


第12図　6・7号溝平断面図



8 号溝土層

1.にぶい黄褐色土　10YR4/3　しまり強く、粘性弱い。ローム粒、焼土粒を微量含む。



13 号溝土層

1.暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性やや弱い。ローム粒を含む。

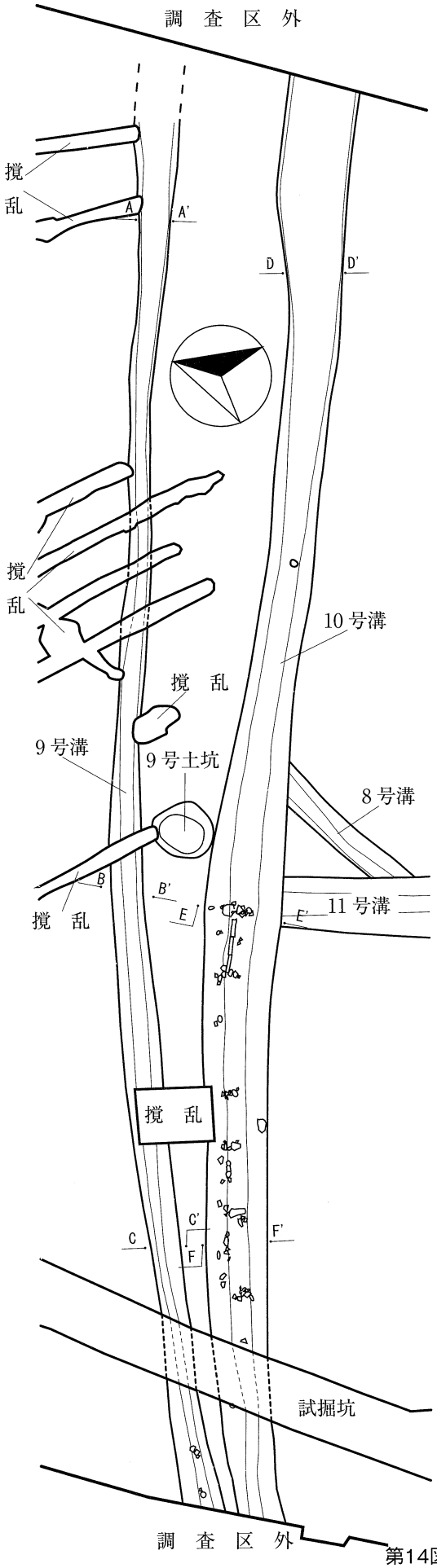
0　(1:20)　1m

セクション図

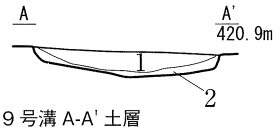
0　(1:100)　5m

平面図

第13図　8・13 号溝平断面図

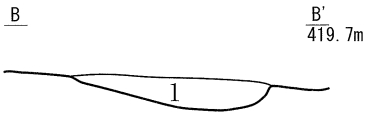


9 号溝



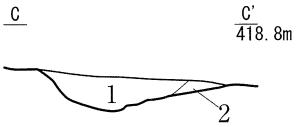
9 号溝 A-A' 土層

1. 黒褐色土　10YR2/3　しまり強く、粘性弱い。
2. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性弱い。



9 号溝 B-B' 土層

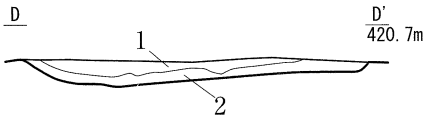
1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性弱い。炭化物を微量含む。



9 号溝 C-C' 土層

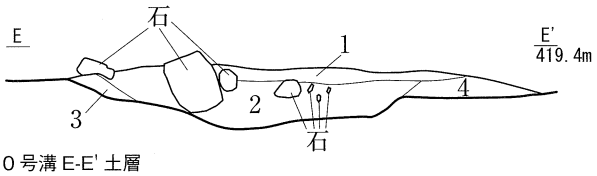
1. 黒褐色土　10YR2/3　しまり強く、粘性やや弱い。ローム粒を多量含む。炭化物粒、焼土粒を微量含む。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。ロームブロックを含む。

10 号溝



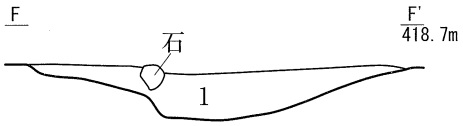
10 号溝 D-D' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/4　しまり強く、粘性弱い。
2. 黒褐色土　10YR2/3　しまり強く、粘性弱い。



10 号溝 E-E' 土層

1. 灰黄褐色土　10YR6/2　しまり強く、粘性弱い。炭化物が層状に入る。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性弱い。拳大～人頭大の礫と土管破片を含む。炭化粒、ローム粒を極微量含む。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性弱い。ローム粒を含む。
4. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性弱い。直径 10mm 大の礫を微量含む。



10 号溝 F-F' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性やや弱い。焼土粒、炭化物粒を微量含む。直径 1 ～ 3mm 程の白色の小礫をまばらに含む。

0　(1:40)　2m

セクション図

0　(1:200)　10m

平面図

第14図　9・10 号溝平断面図

11 号溝 A-A' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性やや弱い。焼土粒・炭化物粒を少量含む。直径 10mm 以下の砂利を少量含む。

2. 褐色土　7.5YR4/6　しまり強く、粘性あり。

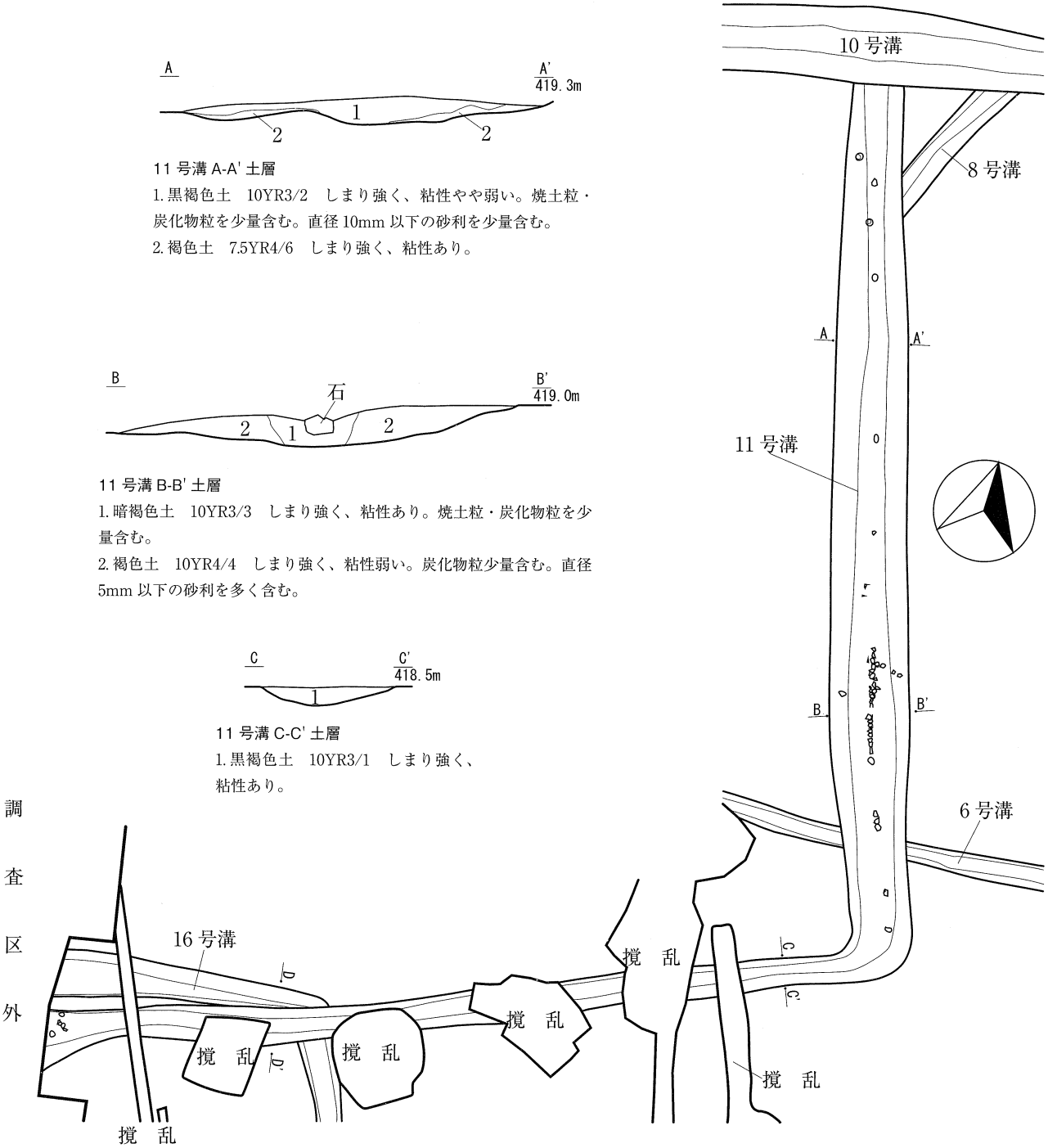
11 号溝 B-B' 土層

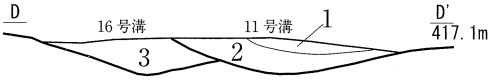
1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。焼土粒・炭化物粒を少量含む。

2. 褐色土　10YR4/4　しまり強く、粘性弱い。炭化物粒少量含む。直径 5mm 以下の砂利を多く含む。

11 号溝 C-C' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。





11 号溝・16 号溝 D-D' 土層

1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。(11 号溝)

2. 黒褐色土　10YR3/2　しまりやや強く、粘性あり。やや砂質。直径 10mm 以下の砂利を含む。(11 号溝)

3. 黒褐色土　10YR3/2　しまりやや強く、粘性あり。2 層よりやや明るい。(16 号溝)

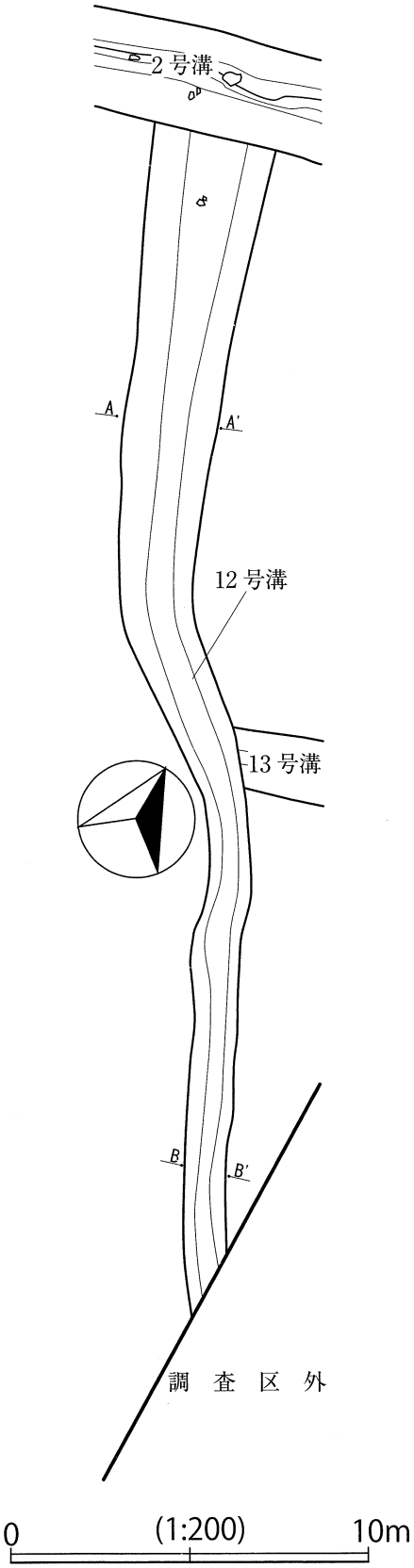
0　(1:40)　2m

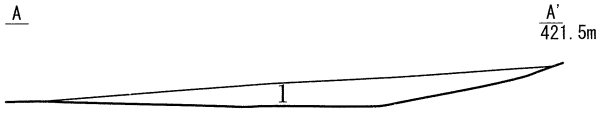
セクション図

0　(1:200)　10m

平面図

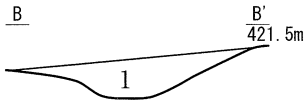
第15図　11 号溝平断面図





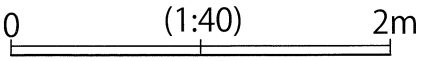
12 号溝 A-A' 土層

1. 灰褐色土　7.5YR4/2　しまりややあり、粘性ややあり。

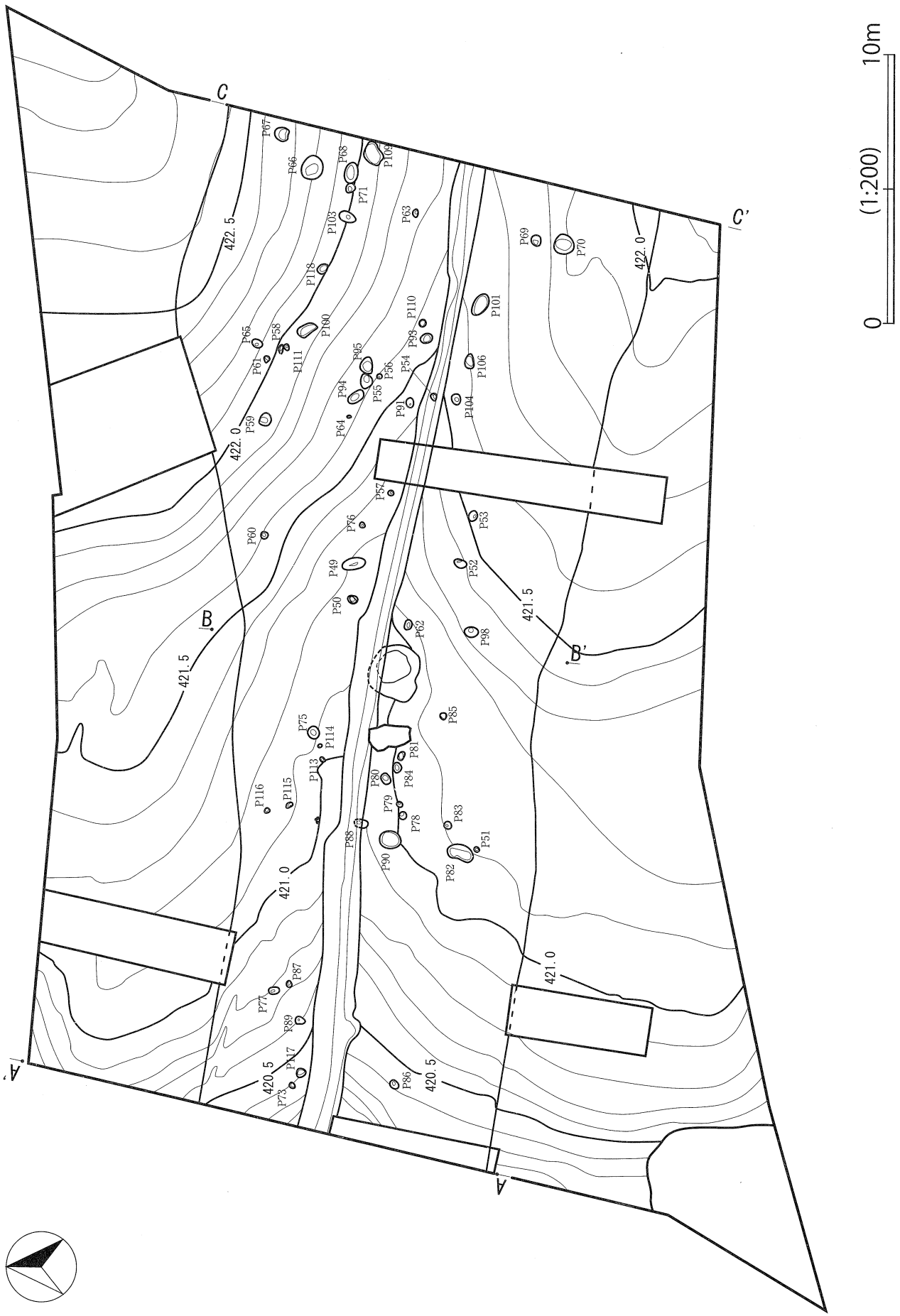


12 号溝 B-B' 土層

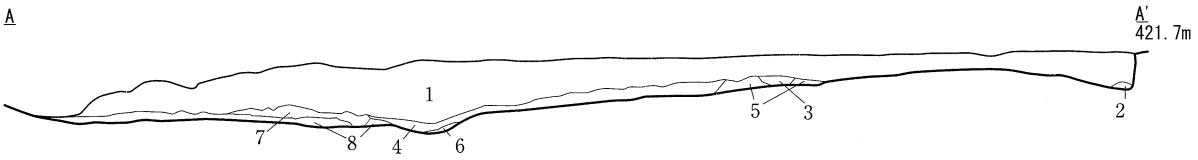
1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性やや弱い。炭化粒、礫を微量含む。



第16図　12 号溝平断面図

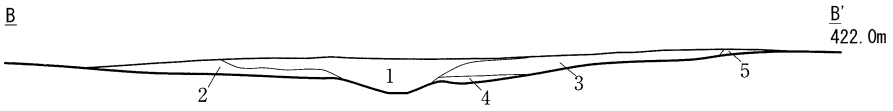


第17図　14号溝（谷）平面図



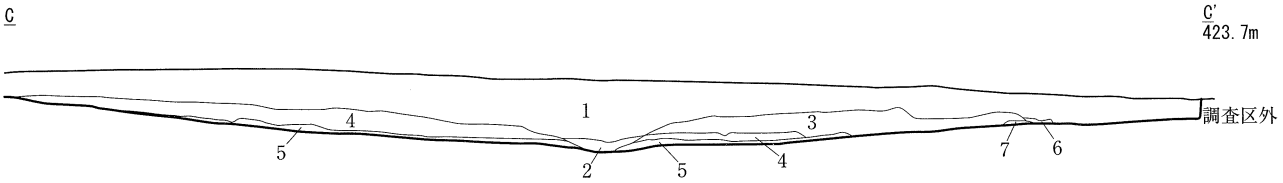
14号溝 A-A' 土層

1. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化粒、焼土粒を少量含む。土器などの小片を少量含む。
2. 灰褐色土　7.5YR4/2　しまり弱く、粘性あり。ローム粒を含む。
3. 黒褐色土　7.5YR2/2　しまりやや強く、粘性あり。
4. 黒褐色土　7.5YR2/1　しまりあり、粘性あり。
5. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり強く、粘性やや弱い。
6. 赤褐色土　5YR4/8　しまり強く、粘性強い。
7. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり強く、粘性あり。
8. 黒褐色土　7.5YR2/2　しまやや強く、粘性あり。



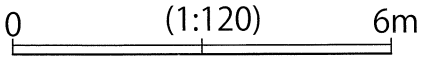
14号溝 B-B' 土層

1. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまり強く、粘性弱い。炭化物を含む。明褐色土(7.5YR5/8)粒子を少量含む。
2. 黒褐色土　7.5YR2/2　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物を少量含む。明褐色土(7.5YR5/8)粒子を少量含む。
3. 黒褐色土　7.5YR2/2　2層に似る。
4. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり強く、粘性あり。炭化物を少量含む。
5. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまり強く、粘性弱い。1層よりやや明るい色調を呈する。



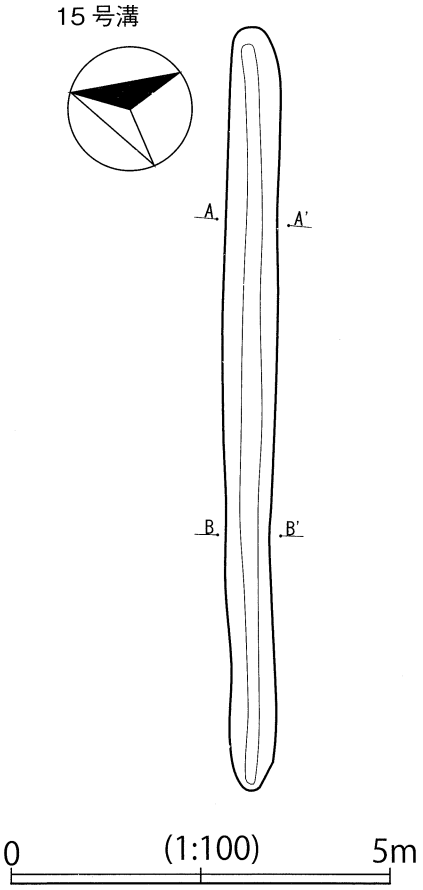
14号溝 C-C' 土層

1. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化粒、ローム粒を少量含む。土器などの小片を少量含む。
2. 極暗褐色土　7.5YR2/3　しまり強く、粘性弱い。炭化粒、ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまりやや強く、粘性あり。焼土粒を少量含む。
4. 黒褐色土　7.5YR2/2　しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化粒、焼土粒を少量含む。
5. 黒褐色土　7.5YR3/2　3層よりも明るく、やや赤みが強い色調を呈する。しまりやや強く、粘性あり。
6. 極暗褐色土　7.5YR2/3　2層より明るい色調を呈する。しまり強く、粘性やや弱い。ローム粒を含む。炭化粒を少量含む。
7. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまり強く、粘性弱い。ローム粒を多量含む。

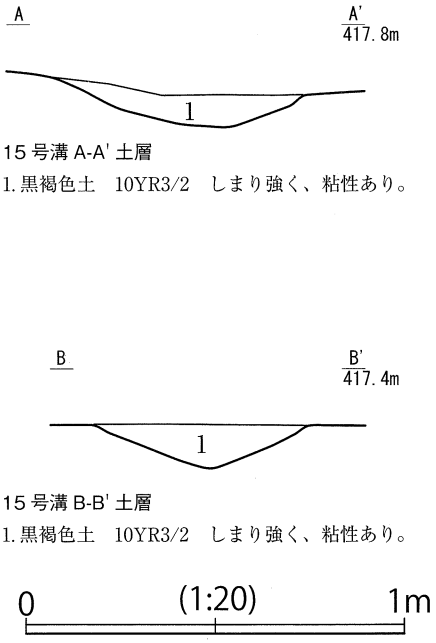


第18図　14号溝（谷）断面図

15 号溝



15 号溝



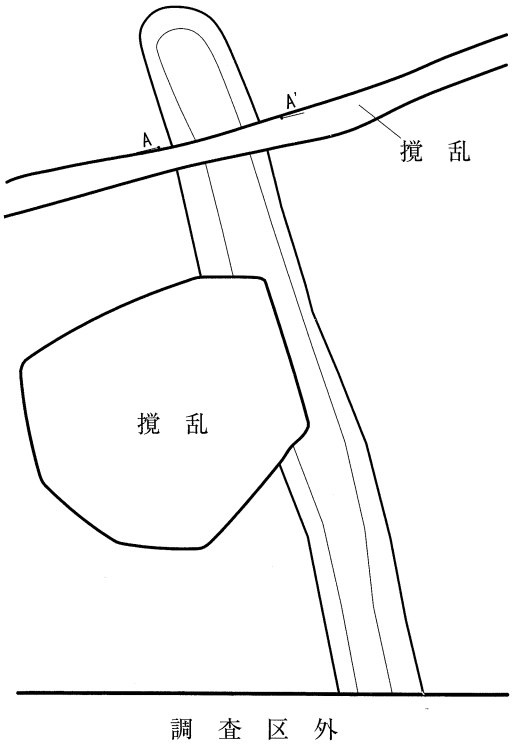
15 号溝 A-A' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

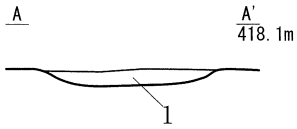
15 号溝 B-B' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

17 号溝

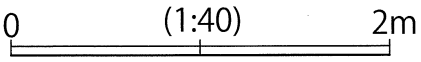


17 号溝

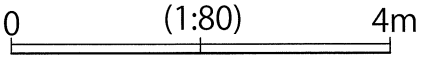


17 号溝土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。

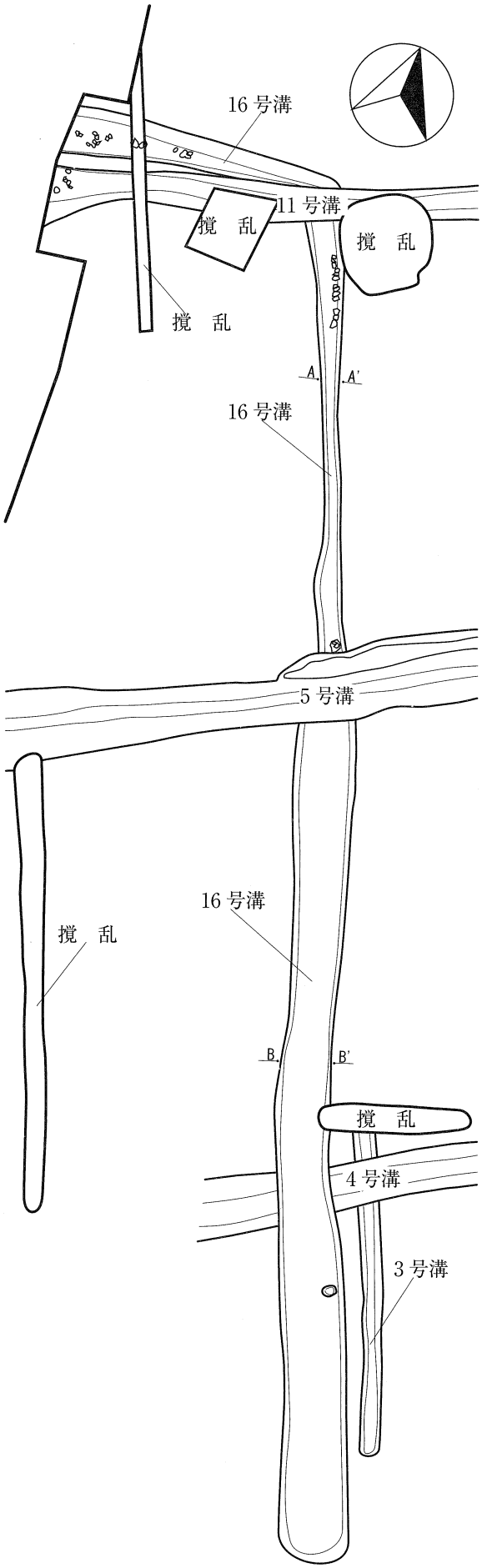


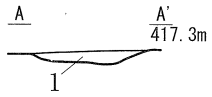
セクション図



平面図

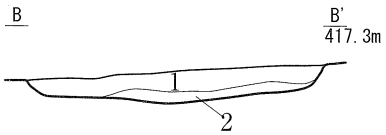
第19図　15･17号溝平断面図





16 号溝 A-A' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。



16 号溝 B-B' 土層

1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性ややあり。

2. にぶい黄褐色土　10YR4/3　しまり強く、粘性あり。

0　(1:40)　2m

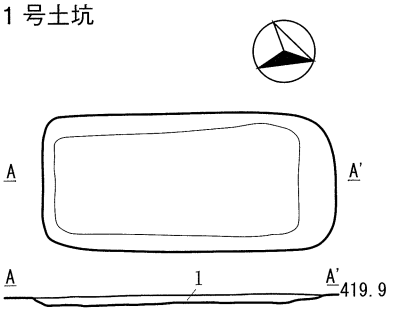
セクション図

0　(1:200)　10m

平面図

第20図　16号溝平断面図

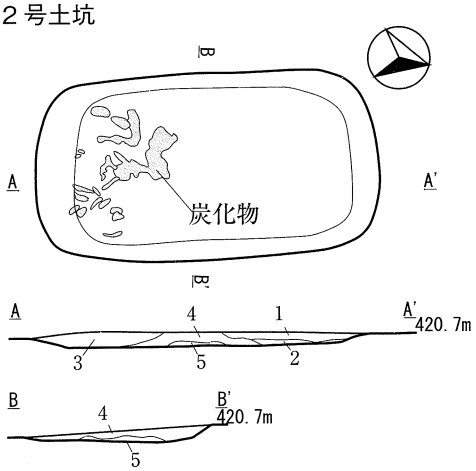
1号土坑



1号土坑土層

1. 黒色土　7.5YR2/1　しまりややあり、粘性弱い。
焼土粒、炭化粒を多量含む。

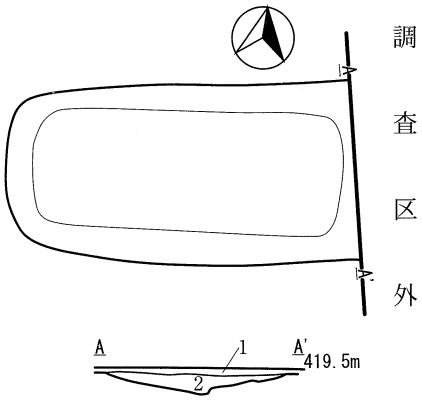
2号土坑



2号土坑 A-A'・B-B' 土層

1. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり強く、粘性ややあり。焼土粒、炭化粒、ローム粒含む。
2. 褐色土　7.5YR4/3　しまりあり、粘性あり。ローム粒含む。
3. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり強く、粘性ややあり。ローム粒、焼土粒、炭化粒を少量含む。
4. 黒色土　7.5YR2/1　しまりやや強く、粘性あり。炭化粒を多量含む。
5. 褐色土　7.5YR4/3　しまりあり、粘性あり。ロームを多量含む。

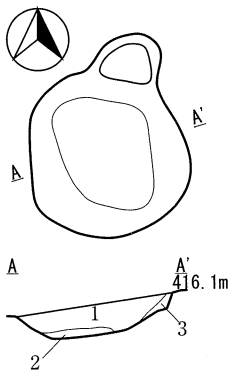
3号土坑



3号土坑土層

1. 灰黄褐色土　10YR4/2　しまりややあり、粘性ややあり。小礫含む。(表土)
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまりあり、粘性あり。炭化粒を多量含む。(3号土坑覆土)

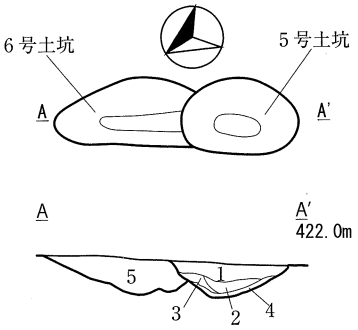
4号土坑



4号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。炭化物を微量含む。
2. 明褐色土　7.5YR5/6　しまり強く、粘性あり。黒色土を少量含む。
3. 明褐色土　7.5YR5/6　しまり強く、粘性あり。

5・6号土坑



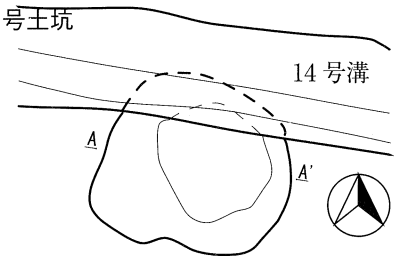
5・6号土坑土層

1. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり強く、粘性弱い。
　褐色（7.5YR4/6）の粒子を含む。炭化物少量含む。(5号土坑)
2. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまり強く、粘性やや弱い。
　褐色（7.5YR4/6）の粒子を少量含む。炭化物を少量含む。(5号土坑)
3. 暗褐色土　7.5YR3/4　しまり強く、粘性やや弱い。
　褐色（7.5YR3/4）の粒子を少量含む。炭化物を少量含む。(5号土坑)
4. 褐色土　7.5YR4/3　しまり強く、粘性強い。粘土質。(5号土坑)
5. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり強く、粘性やや弱い。炭化物を少量含む。(6号土坑)

0　(1:80)　4m

第21図　1～6号土坑平断面図

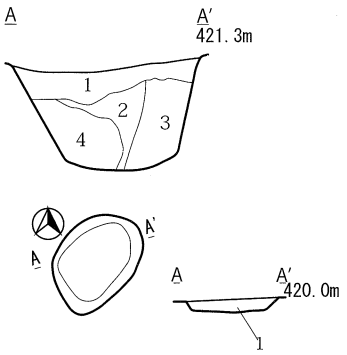
7号土坑



7号土坑土層

1. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまり強く、粘性あり。
　　炭化粒、焼土粒を少量含む。
2. 黒褐色土　7.5YR2/2　しまりあり、粘性やや強い。
　　黒褐色土を主体として、暗褐色土（7.5YR3/3）の粒子を含む。
　　炭化粒を少量含む。
3. 極暗褐色土　7.5YR2/3　しまりやや強く、粘性強い。
　　極暗褐色土を主体として、暗褐色土（7.5YR3/3）の粒子を含む。
　　炭化粒、焼土粒を少量含む。
4. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまりやや弱く、粘性強い。
　　黒褐色土を主体として、褐色土（7.5YR4/4）の粒子を多量含む。炭化粒を少量含む。

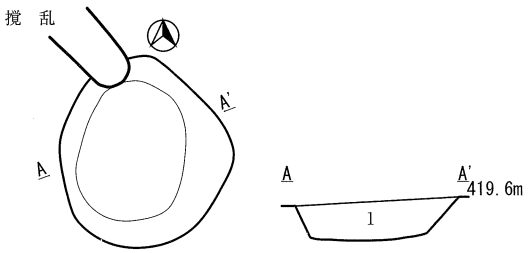
8号土坑



8号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR2/3　しまり強く、粘性あり。直径15～40mm程の円礫を多量含む。

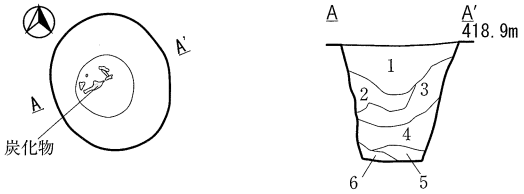
9号土坑



9号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR2/3　しまり強く、粘性あり。ロームブロックを含む。

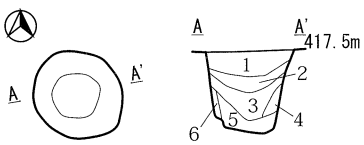
10号土坑



10号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。炭化粒少量含む。
2. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。
4. 暗褐色土　10YR3/3　しまりあり、粘性あり。
5. 黒褐色土　10YR3/1　しまりややあり、粘性あり。炭化粒含む。
6. 黒褐色土　10YR3/2　しまりあり、粘性あり。

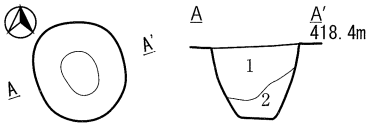
11号土坑



11号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。炭化粒を含む。
2. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまりあり、粘性あり。
4. 暗褐色土　10YR3/3　しまり強く、粘性あり。
5. 暗褐色土　10YR3/3　4層より暗い。しまりあり、粘性あり。
6. 暗褐色土　10YR3/3　4層に似る。しまり強く、粘性あり。

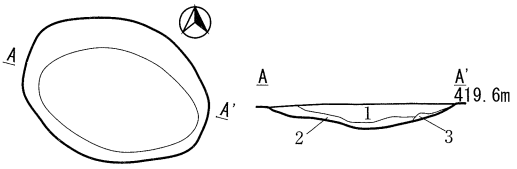
13号土坑



13号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。炭化粒少量含む。
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

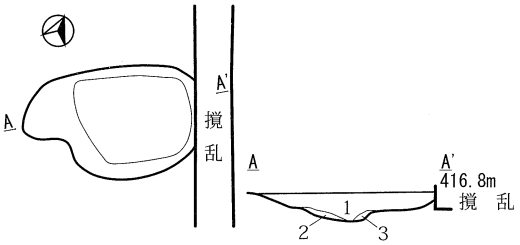
14号土坑



14号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。焼土粒を含む。
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性強い。

15号土坑

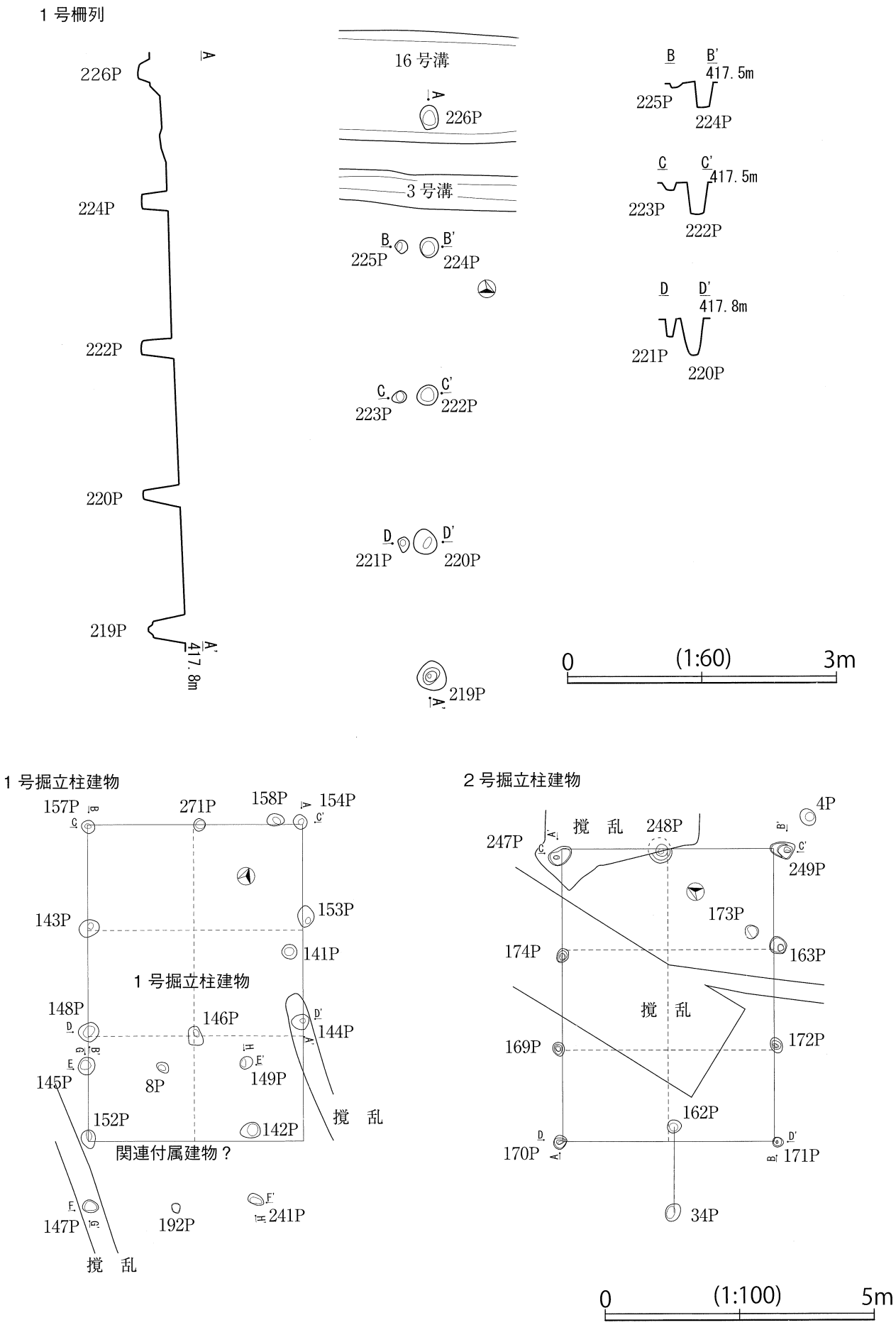


15号土坑土層

1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり強く、粘性あり。
　　焼土粒、炭化粒を微量含む。
2. 明褐色土　7.5YR5/6　しまり強く、粘性強い。
3. にぶい黄褐色土　10YR4/3　しまり強く、粘性強い。

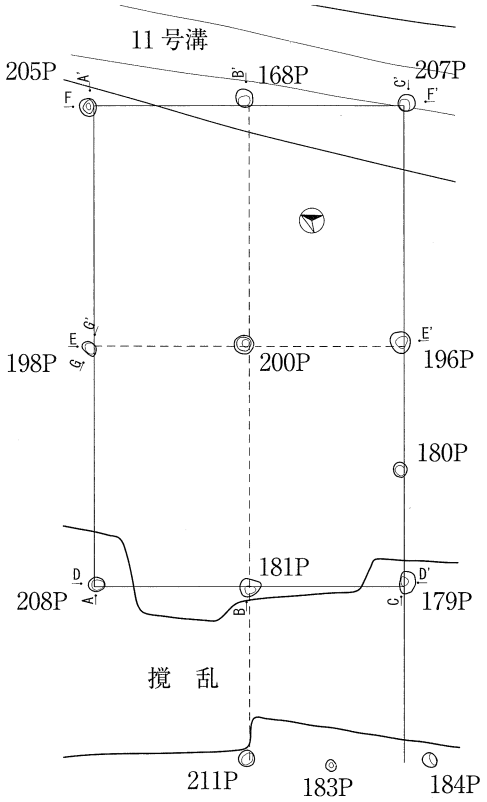
0　(1:80)　4m

第22図　7～11・13・14・15号土坑平断面図

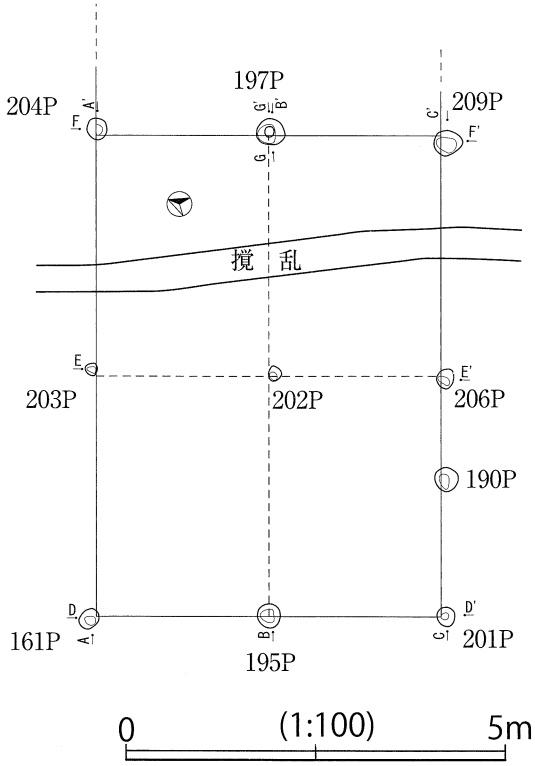


第23図　1号柵列、1・2号掘立柱建物平面図

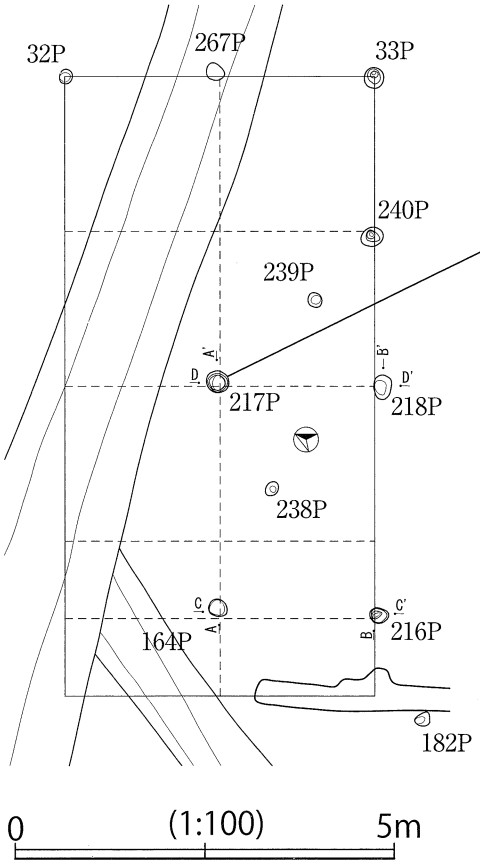
3号掘立柱建物

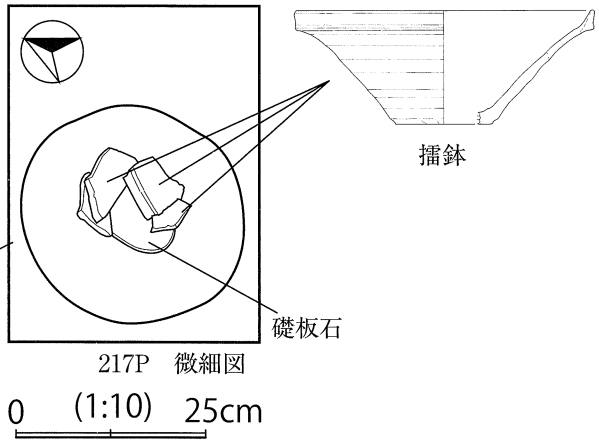


4号掘立柱建物



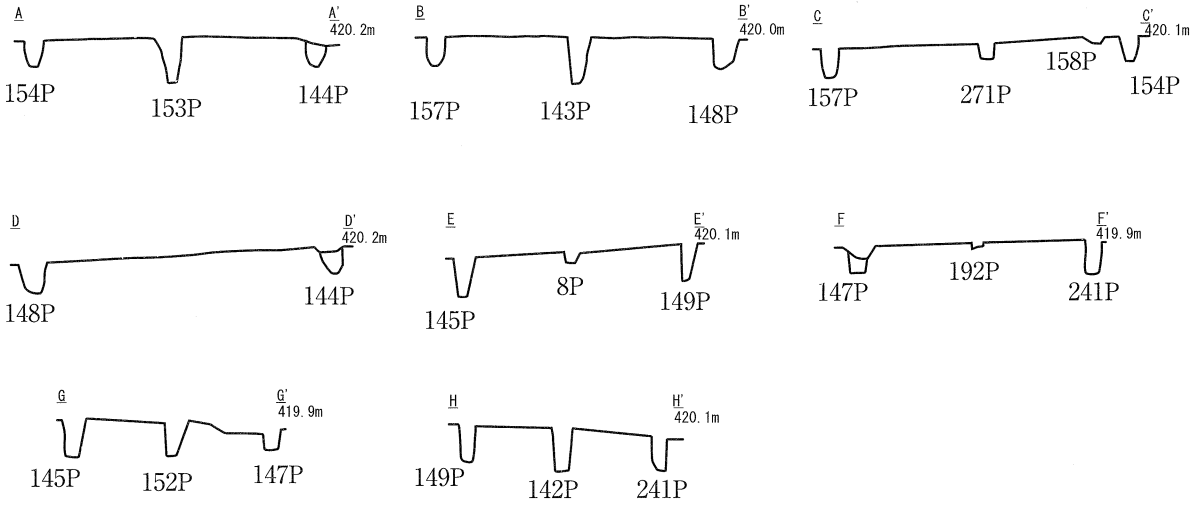
5号掘立柱建物



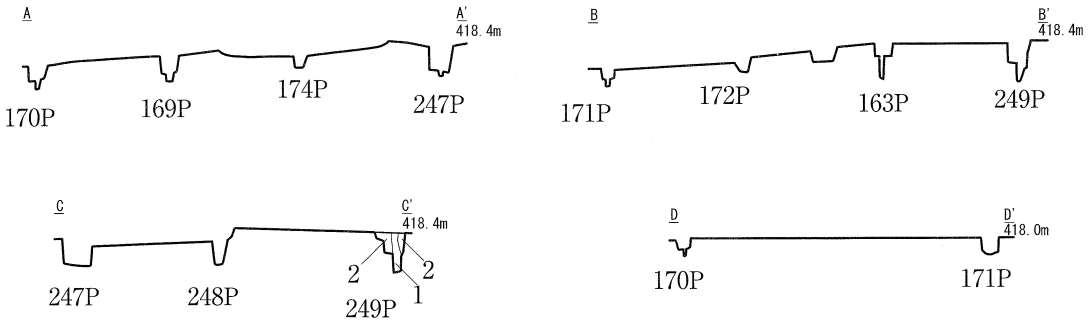


第24図　3・4・5号掘立柱建物平面図

1号掘立柱建物　エレベーション図



2号掘立柱建物　エレベーション図

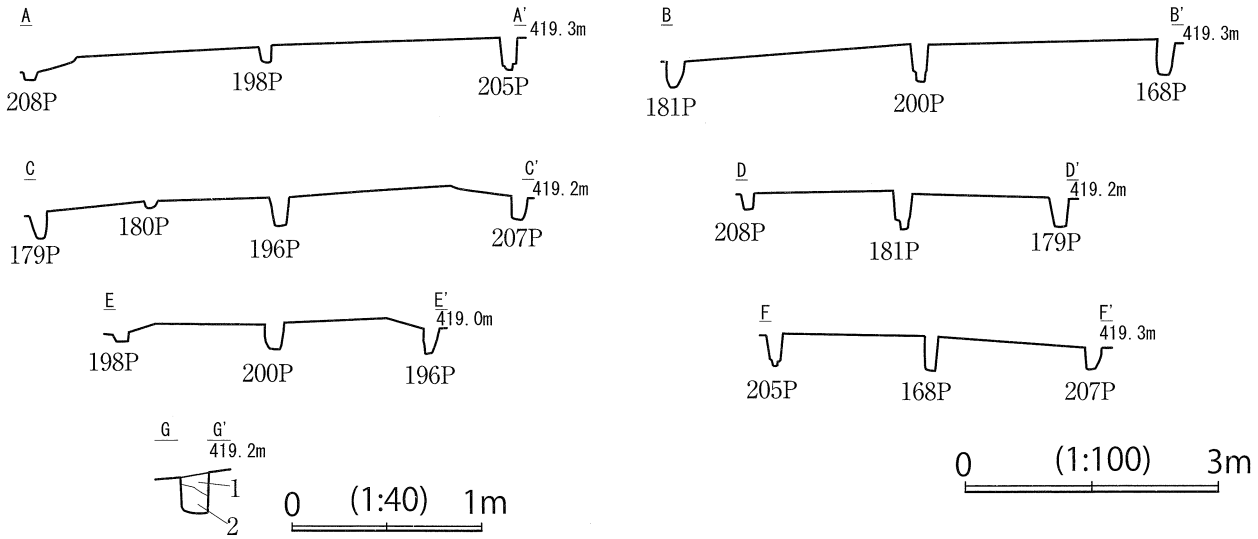


249ピット土層

1.黒褐色土　10YR3/1　しまりあり、粘性あり。焼土粒を含む、炭化粒を微量含む。柱の抜き取り痕か。

2.黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。

3号掘立柱建物　エレベーション図



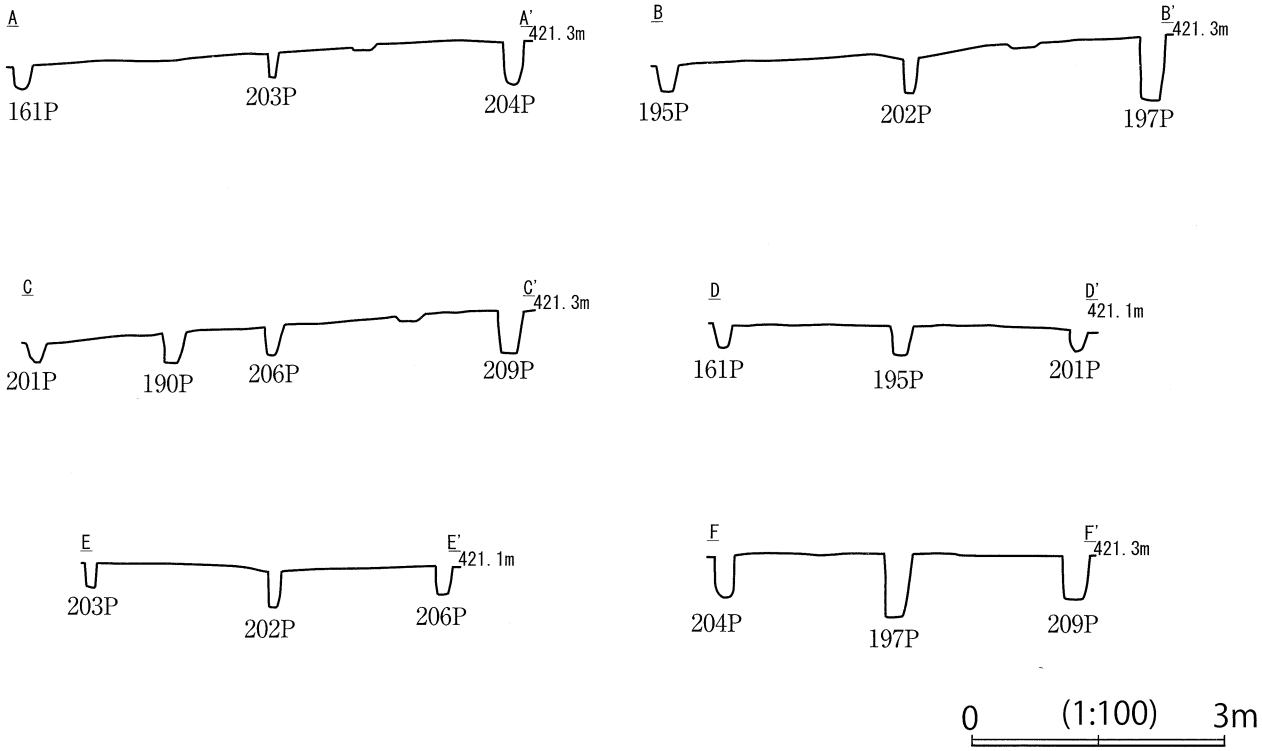
198号ピット土層

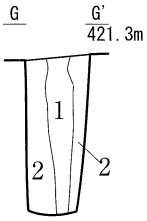
1.にぶい赤褐色土　2.5YR4/3　しまり強く、粘性あり。焼土を主体とする。

2.黒褐色土　10YR3/2　しまりあり、粘性あり。

第25図　1・2・3号掘立柱建物エレベーション図

４号掘立柱建物　エレベーション図





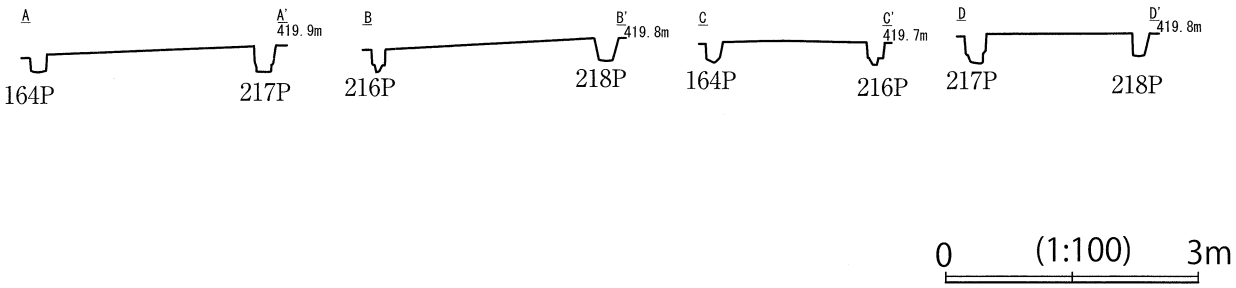
197号ピット土層

1.黒褐色土　10YR3/1　しまりややあり、粘性あり。ローム粒を微量含む。
柱痕跡か。

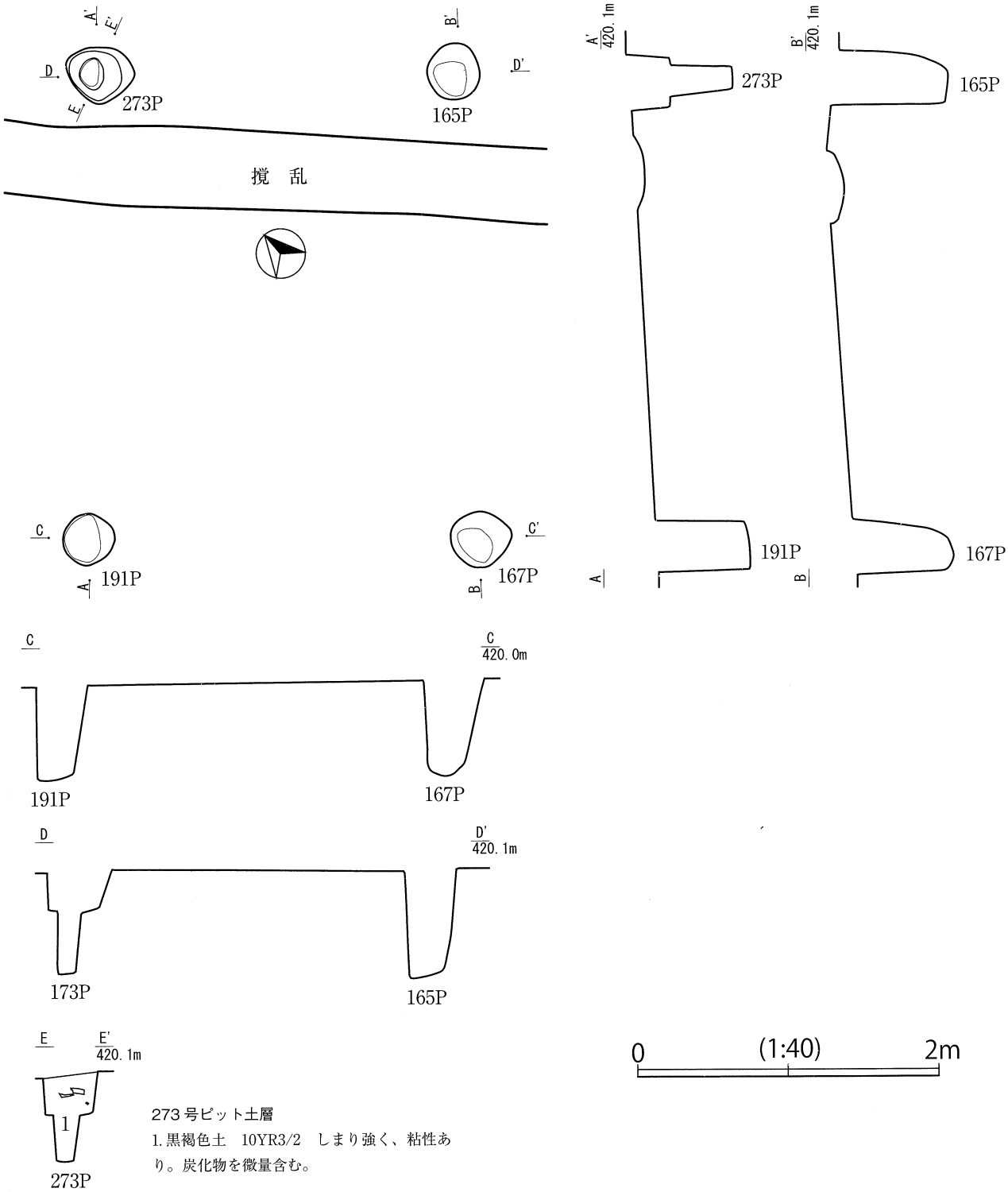
2.にぶい黄褐色土　10YR4/3　しまりあり、粘性あり。ローム粒多量含む。

0　(1:40)　1m

５号掘立柱建物　エレベーション図

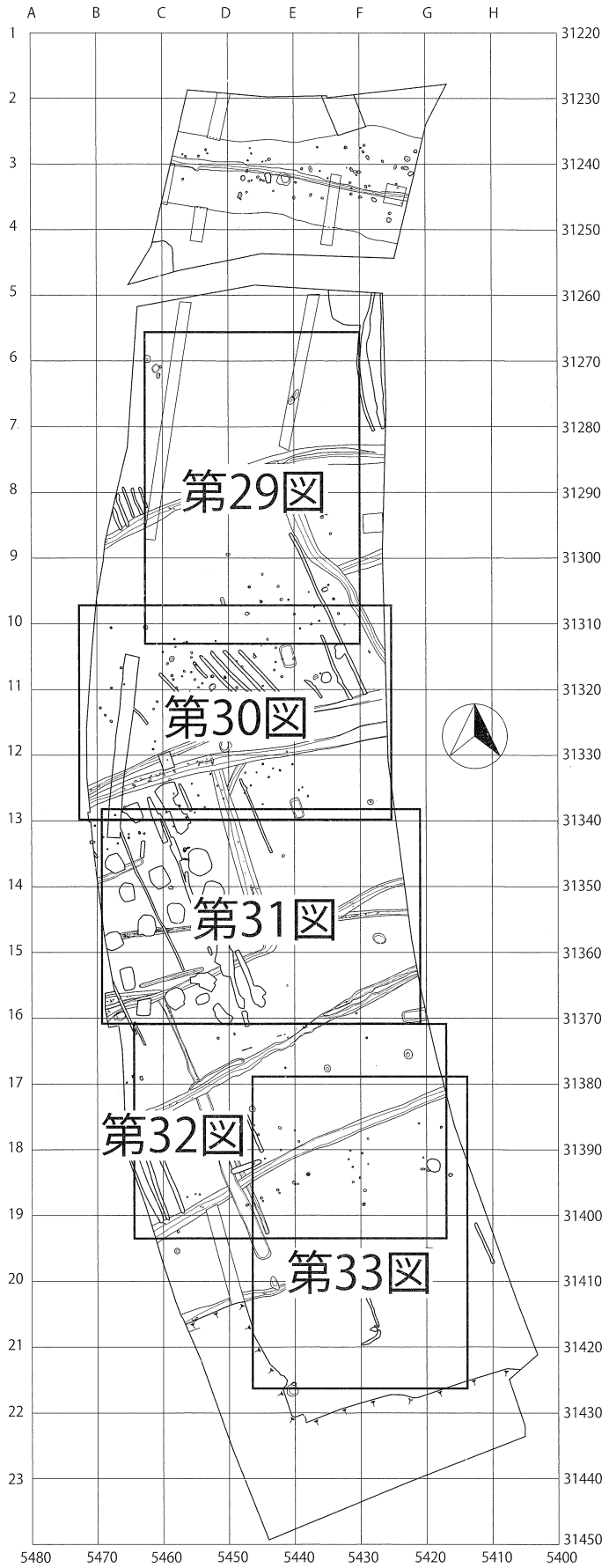


第26図　４・５号掘立柱建物エレベーション図

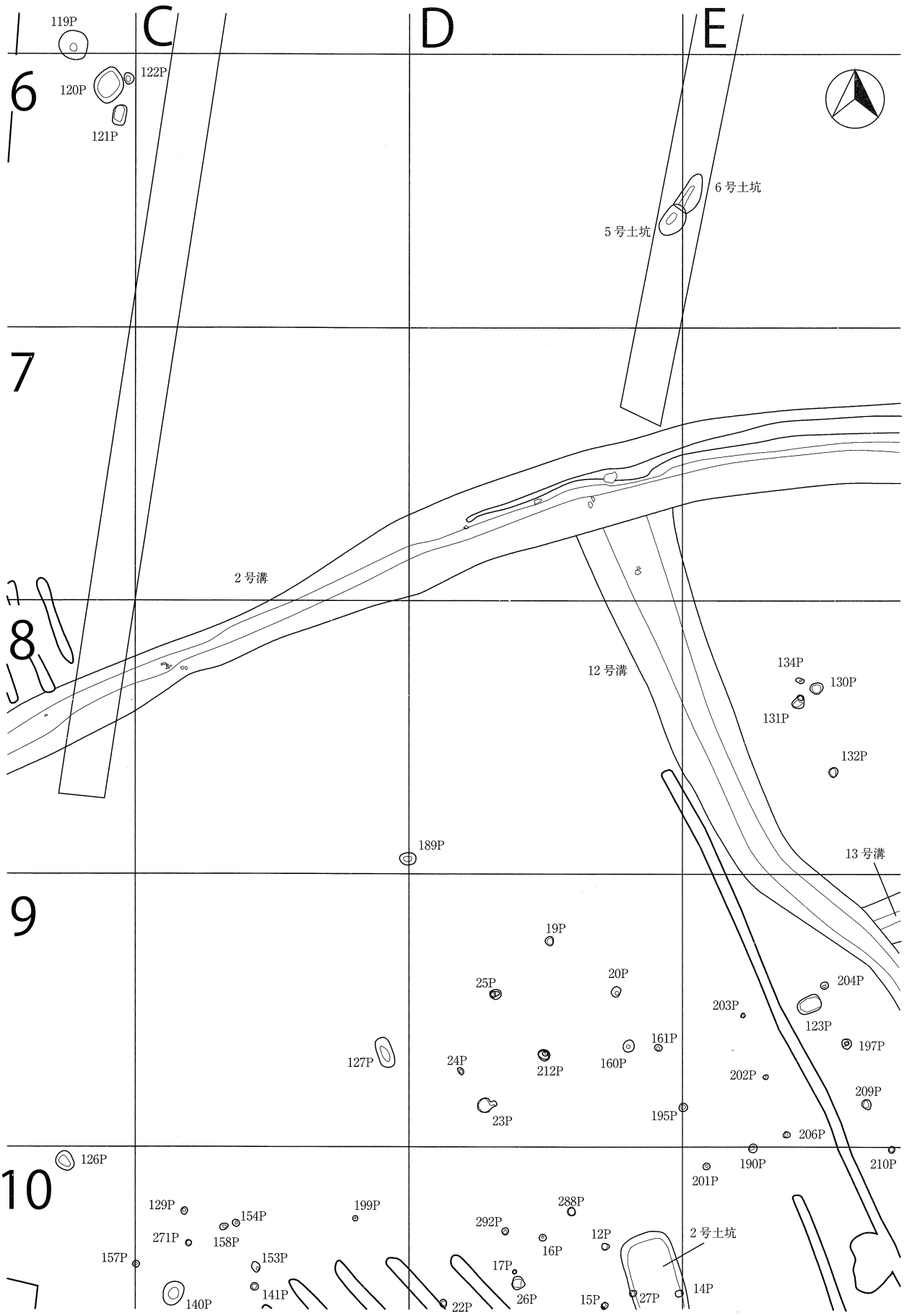


273号ピット土層
1.黒褐色土　10YR3/2　しまり強く、粘性あり。炭化物を微量含む。

第27図　6号掘立柱建物平面図・エレベーション図

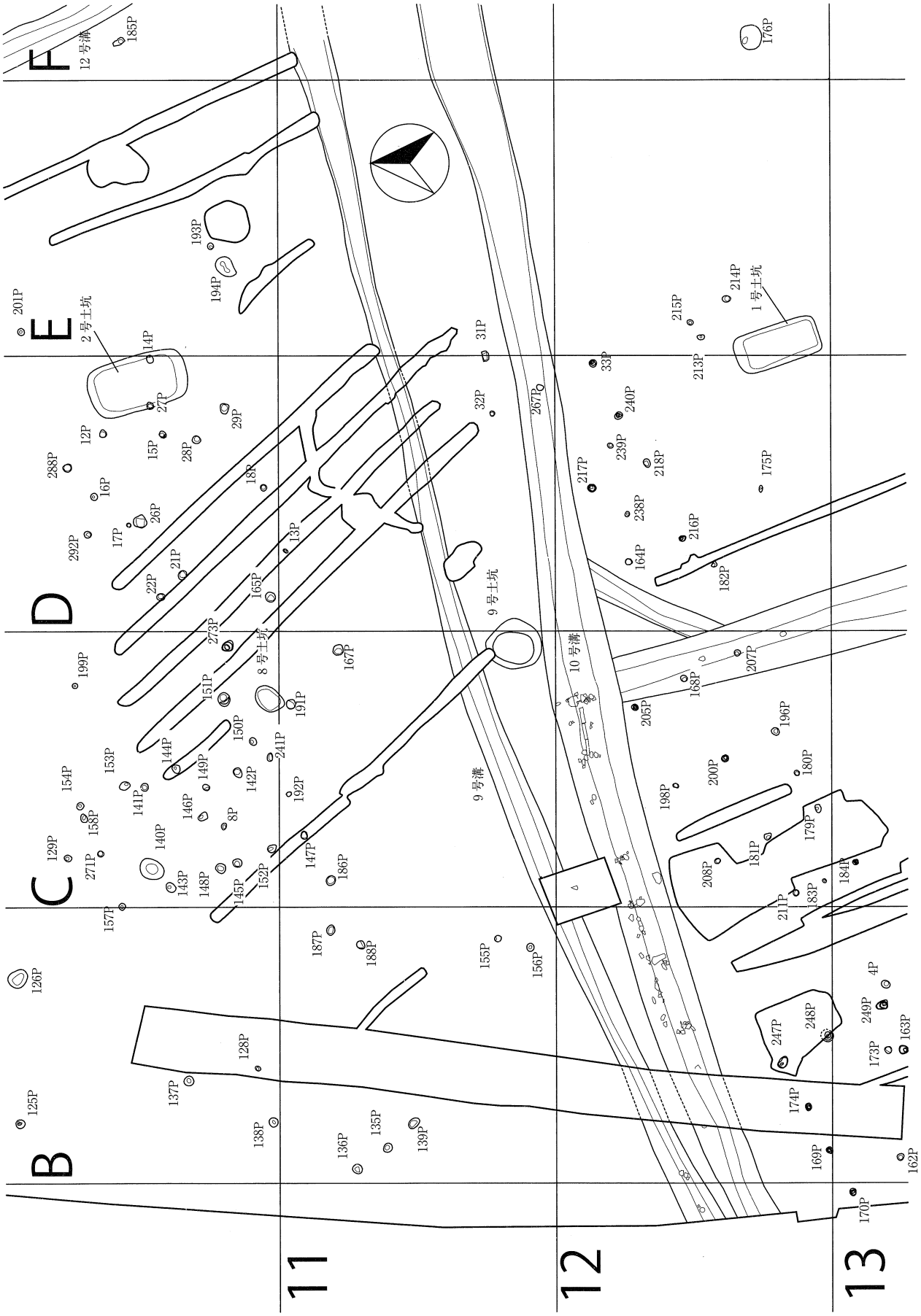


第28図　ピット位置図一覧



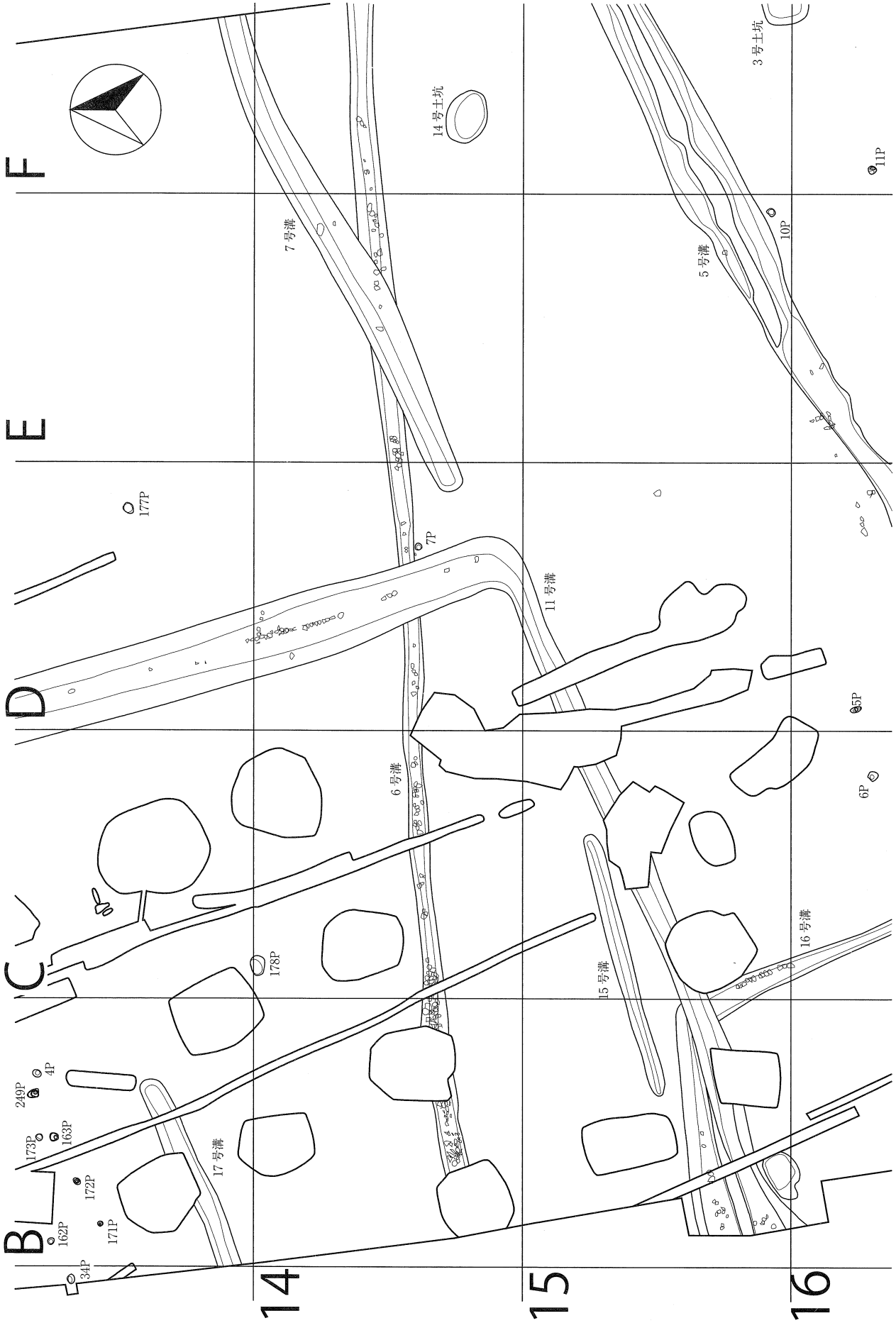
0 (1:200) 5m

第29図　ピット位置図（1）

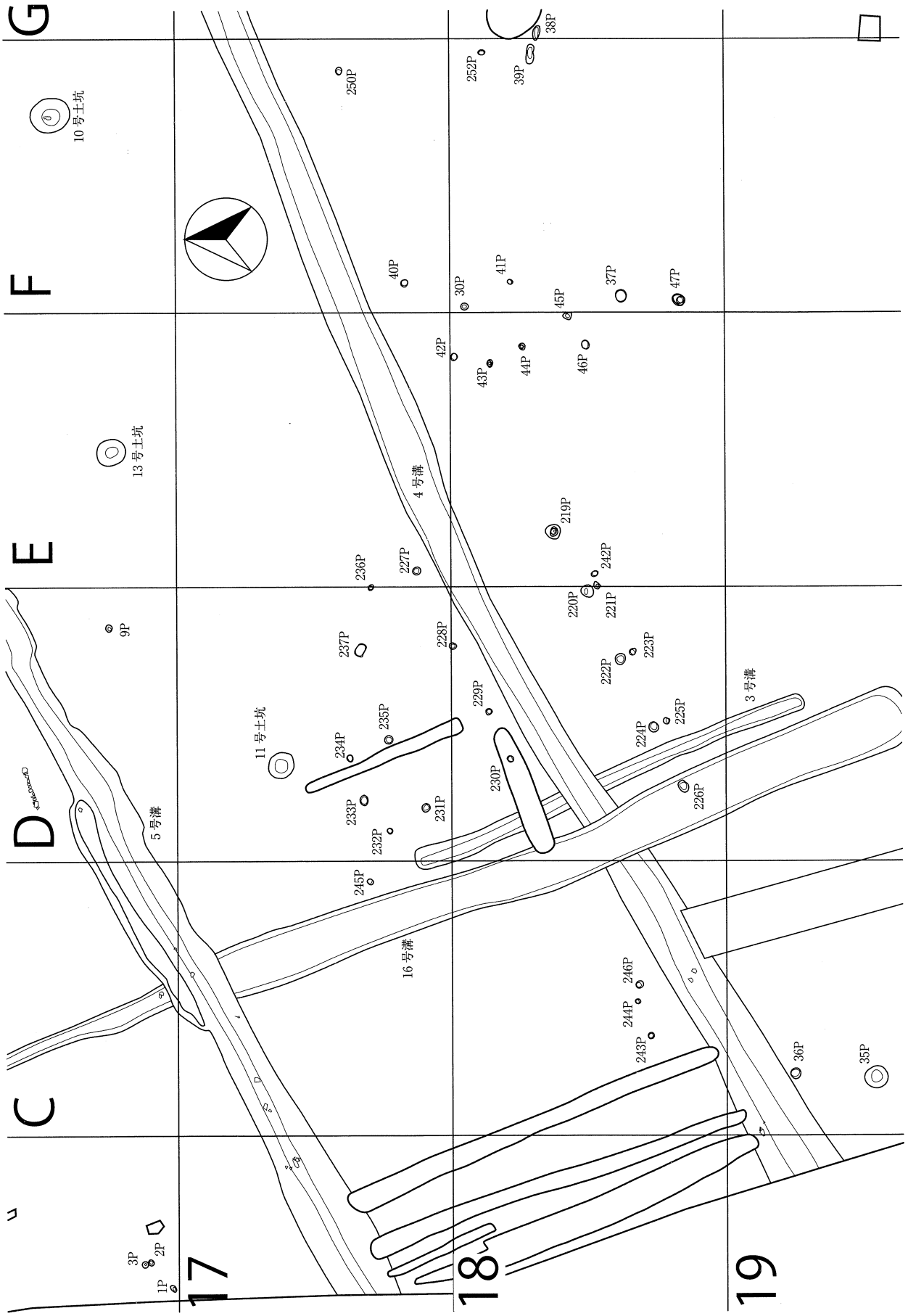


0 (1:200) 5m

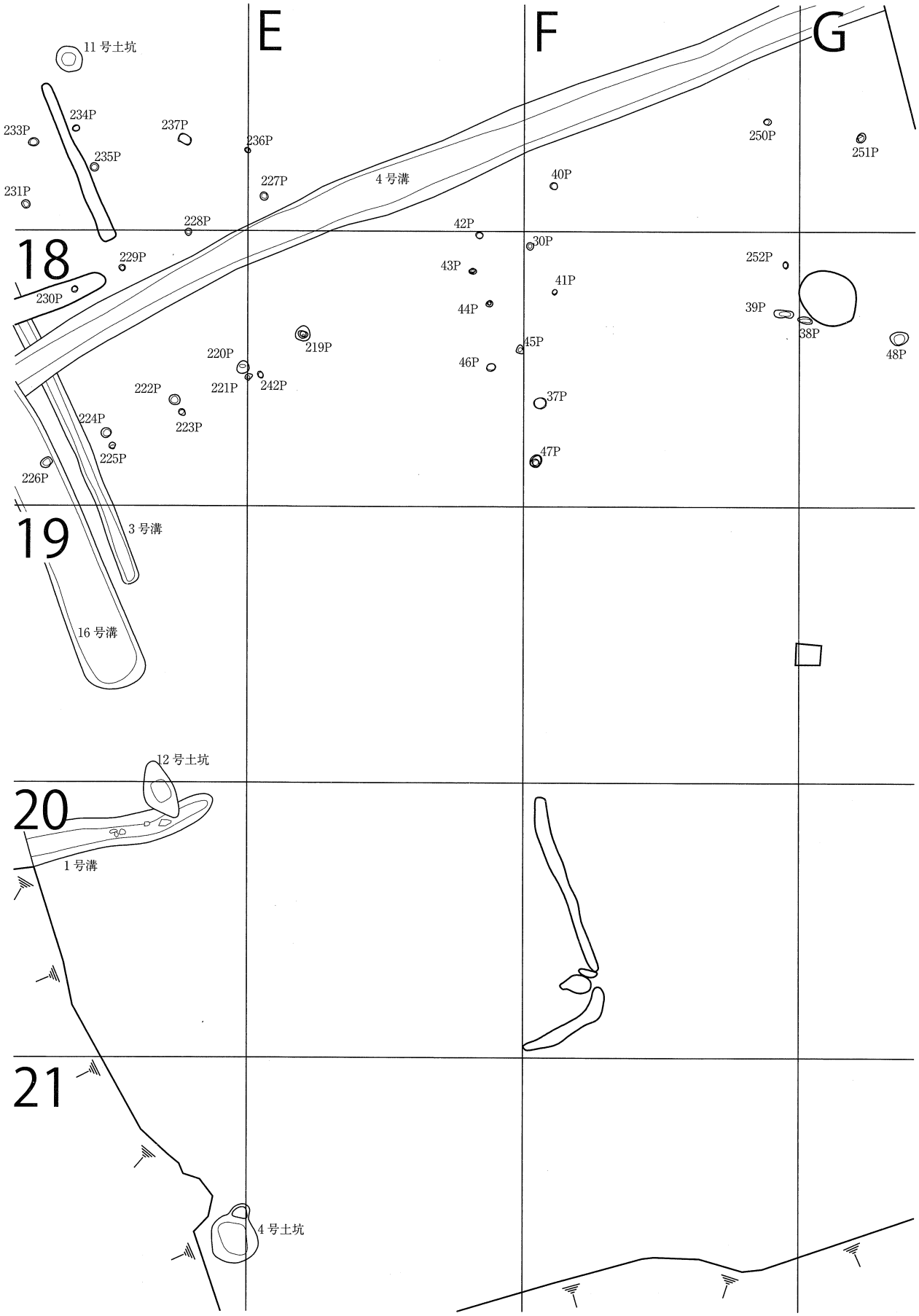
第30図　ピット位置図（2）



第31図　ピット位置図（3）



第32図　ピット位置図（4）



第33図　ピット位置図（5）

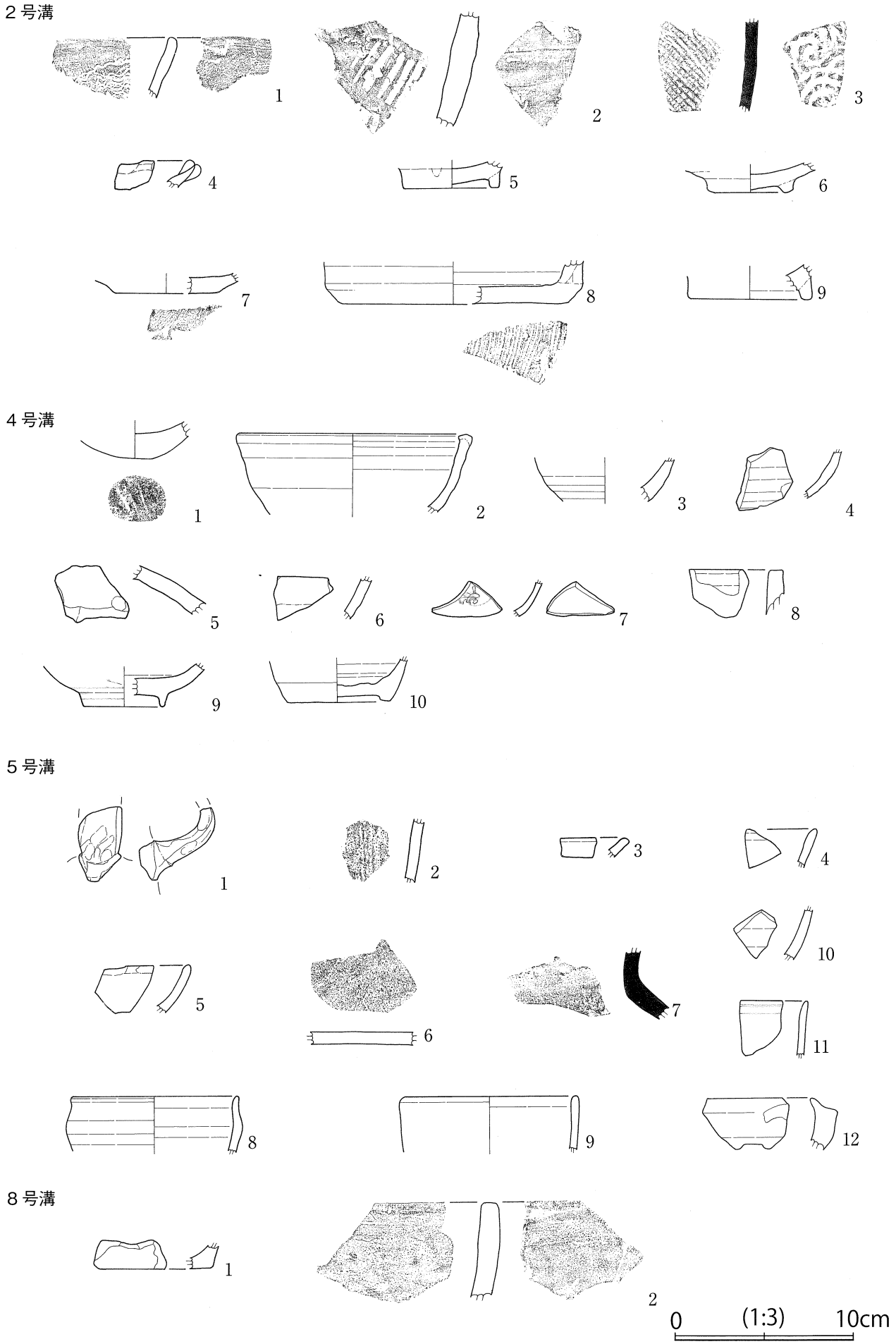
第６表　ピット一覧

番号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	備考
1	B16-4	0.27	0.18	0.14	楕円	
2	B16-4	0.22	0.20	0.09	円	
3	B16-4	0.23	0.22	0.06	円	
4	B13-2	0.32	0.26	0.15	楕円	
5	D16-1	0.41	0.20	0.18	楕円	
6	C16-2	0.39	0.35	0.62	略円	
7	D14-4	0.25	0.24	0.13	円	
8	C10-3	0.24	0.18	0.13	楕円	1建関連
9	D16-4	0.25	0.24	0.09	円	
10	E15-4	0.30	0.25	0.08	略楕円	
11	F16-1	0.31	0.31	0.31	略円	
12	D10-2	0.27	0.19	0.31	楕円	
13	D11-1	0.19	0.11	0.07	楕円	
14	D10-4	0.29	0.24	0.42	楕円	2土に切られる
15	D10-4	0.26	0.20	0.29	楕円	
16	D10-1	0.26	0.25	0.42	円	
17	D10-1	0.16	0.14	0.15	円	
18	D10-4	0.23	0.23	0.35	円	
19	D9-2	0.34	0.29	0.16	楕円	
20	D9-2	0.37	0.31	0.39	楕円	
21	D10-3	0.34	0.27	0.43	楕円	
22	D10-3	0.30	0.25	0.21	楕円	
23	D9-3	0.70	0.52	0.19	略楕円	
24	D9-3	0.27	0.19	0.13	楕円	
25	D9-1	0.40	0.36	0.33	円	
26	D10-3	0.49	0.49	0.22	略円	
27	D10-4	0.26	0.23	0.20	円	2土に切られる
28	D10-4	0.31	0.28	0.33	円	
29	D10-4	0.36	0.30	0.15	略楕円	
30	F18-1	0.27	0.25	0.44	円	
31	D11-4	0.36	0.23	0.14	楕円	
32	D11-4	0.18	0.18	0.50	円	5建
33	D12-2	0.27	0.26	0.51	円	5建
34	A13-2	0.36	0.28	0.28	楕円	2建？
35	C19-3	0.85	0.80	0.19	円	
36	C19-1	0.38	0.36	0.12	円	
37	F18-3	0.44	0.39	0.07	円	
38	G18-1	0.53	0.24	0.11	楕円	
39	F18-2	0.72	0.24	0.12	略楕円	
40	F17-3	0.27	0.24	0.09	円	
41	F18-1	0.20	0.17	0.15	円	
42	E18-2	0.25	0.23	0.13	円	
43	E18-2	0.27	0.18	0.21	楕円	
44	E18-2	0.24	0.22	0.28	略円	
45	E18-2	0.30	0.24	0.08	略楕円	
46	E18-2	0.32	0.28	0.06	楕円	
47	F18-3	0.48	0.39	0.27	楕円	
48	G18-1	0.64	0.48	0.10	楕円	
49	E3-1	0.88	0.44	0.23	楕円	14溝(谷)内
50	E3-1	0.37	0.30	0.60	楕円	14溝(谷)内
51	D3-3	0.20	0.19	0.09	円	14溝(谷)内
52	E3-1	0.48	0.31	0.27	楕円	14溝(谷)内
53	E3-3	0.39	0.31	0.26	楕円	14溝(谷)内
54	E3-2	0.28	0.22	0.23	楕円	14溝(谷)内
55	E3-2	0.53	0.46	0.11	略円	14溝(谷)内
56	E3-2	0.18	0.17	0.13	円	14溝(谷)内
57	E3-1	0.21	0.20	0.11	円	14溝(谷)内
58	F2-3	0.34	0.17	0.13	楕円	14溝(谷)内
59	E2-4	0.48	0.41	0.15	楕円	14溝(谷)内
60	E2-3	0.26	0.25	0.15	円	14溝(谷)内
61	F2-3	0.25	0.22	0.12	略円	14溝(谷)内

番号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	備考
62	E3-1	0.38	0.26	0.10	楕円	14溝(谷)内
63	F3-2	0.30	0.19	0.30	楕円	14溝(谷)内
64	E3-2	0.16	0.11	0.22	楕円	14溝(谷)内
65	F2-3	0.41	0.29	0.20	楕円	14溝(谷)内
66	F2-4	0.89	0.77	0.26	楕円	14溝(谷)内
67	F2-4	0.51	0.51	0.13	略円	14溝(谷)内
68	F3-2	0.78	0.49	0.27	楕円	14溝(谷)内
69	F3-3	0.42	0.37	0.10	円	14溝(谷)内
70	F3-3	0.75	0.75	0.15	略円	14溝(谷)内
71	F3-2	0.37	0.31	0.33	楕円	14溝(谷)内
73	C2-3	0.24	0.19	0.11	円	14溝(谷)内
75	D2-4	0.45	0.43	0.10	円	14溝(谷)内
76	E3-1	0.21	0.20	0.08	円	14溝(谷)内
77	C2-4	0.39	0.26	0.18	楕円	14溝(谷)内
78	D3-1	0.28	0.28	0.21	円	14溝(谷)内
79	D3-1	0.23	0.19	0.19	楕円	14溝(谷)内
80	D3-1	0.42	0.32	0.12	楕円	14溝(谷)内
81	D3-2	0.34	0.22	0.11	楕円	14溝(谷)内
82	D3-1	1.01	0.53	0.10	略楕円	14溝(谷)内
83	D3-1	0.28	0.26	0.32	円	14溝(谷)内
84	D3-1	0.39	0.31	0.07	楕円	14溝(谷)内
85	D3-2	0.25	0.24	0.11	円	14溝(谷)内
86	C3-1	0.36	0.29	0.25	楕円	14溝(谷)内
87	C2-4	0.24	0.20	0.14	円	14溝(谷)内
88	D3-1	0.52	0.30	0.30	楕円	14溝(谷)内
89	C2-4	0.37	0.28	0.10	楕円	14溝(谷)内
90	D3-1	0.81	0.65	0.06	楕円	14溝(谷)内
91	E3-2	0.36	0.27	0.12	楕円	14溝(谷)内
93	F3-1	0.46	0.34	0.12	楕円	14溝(谷)内
94	E3-2	0.66	0.36	0.12	楕円	14溝(谷)内
95	E3-2	0.61	0.46	0.14	略楕円	14溝(谷)内
98	E3-3	0.52	0.38	0.20	楕円	14溝(谷)内
100	F2-3	0.71	0.38	0.17	略楕円	14溝(谷)内
101	F3-3	0.88	0.51	0.04	楕円	14溝(谷)内
103	F3-2	0.65	0.37	0.21	楕円	14溝(谷)内
104	E3-2	0.40	0.33	0.12	楕円	14溝(谷)内
106	F3-3	0.54	0.34	0.04	楕円	14溝(谷)内
109	F3-2	0.92	0.66	0.11	略楕円	14溝(谷)内
110	F3-1	0.28	0.25	0.11	円	14溝(谷)内
111	F2-3	0.24	0.17	0.14	楕円	14溝(谷)内
113	D2-4	0.22	0.16	0.08	略楕円	14溝(谷)内
114	D2-4	0.17	0.13	0.09	楕円	14溝(谷)内
115	D2-3	0.27	0.16	0.19	楕円	14溝(谷)内
116	D2-3	0.19	0.18	0.11	略円	14溝(谷)内
117	C2-3	0.34	0.33	0.14	略円	14溝(谷)内
118	F2-3	0.43	0.32	0.12	楕円	14溝(谷)内
119	B5-4	1.13	1.05	0.18	円	
120	B6-2	1.34	1.05	0.21	略楕円	
121	B6-2	0.75	0.49	0.15	略楕円	
122	B6-2	0.40	0.35	0.14	円	
123	E9-1	0.89	0.60	0.26	楕円	
125	B10-1	0.32	0.31	0.24	円	
126	B10-2	0.72	0.61	0.18	楕円	
127	C9-4	1.13	0.56	0.20	楕円	
128	B10-3	0.20	0.17	0.13	円	
129	C10-1	0.28	0.22	0.26	円	
130	E8-1	0.48	0.40	0.13	略円	
131	E8-1	0.51	0.44	0.33	略楕円	
132	E8-4	0.34	0.34	0.10	円	
134	E8-1	0.30	0.19	0.08	楕円	
135	B11-1	0.35	0.30	0.10	円	

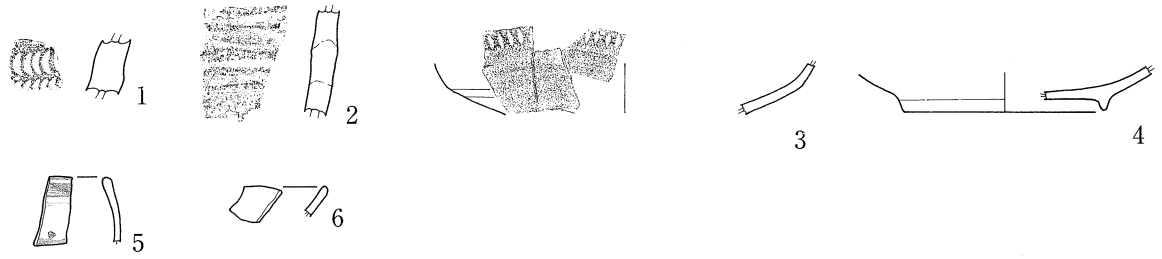
番号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	備考
136	B11-1	0.35	0.33	0.09	円	
137	B10-3	0.35	0.35	0.11	円	
138	B10-3	0.33	0.32	0.09	円	
139	B11-1	0.45	0.31	0.08	楕円	
140	C10-1	0.92	0.71	0.15	楕円	
141	C10-1	0.28	0.28	0.08	円	
142	C10-3	0.38	0.28	0.32	楕円	1建関連
143	C10-3	0.38	0.30	0.61	楕円	1建
144	C10-3	0.34	0.29	0.26	略円	1建
145	C10-3	0.33	0.28	0.47	円	1建関連
146	C10-3	0.34	0.24	0.27	略楕円	1建
147	C11-1	0.29	0.24	0.21	円	1建関連
148	C10-3	0.36	0.34	0.36	略円	1建
149	C10-3	0.25	0.21	0.46	円	1建関連
150	C10-4	0.29	0.24	0.30	円	
151	C10-4	0.50	0.42	0.20	楕円	
152	C10-3	0.35	0.26	0.43	楕円	1建
153	C10-1	0.40	0.30	0.59	楕円	1建
154	C10-1	0.26	0.23	0.33	円	1建
155	B11-4	0.25	0.23	0.34	円	
156	B11-4	0.29	0.26	0.08	円	
157	C10-1	0.24	0.24	0.36	円	1建
158	C10-1	0.32	0.22	0.08	楕円	
160	D9-4	0.46	0.38	0.19	円	
161	D9-4	0.27	0.22	0.29	楕円	4建
162	B13-1	0.26	0.24	0.25	円	2建
163	B13-1	0.32	0.31	0.45	略円	2建
164	D12-1	0.26	0.22	0.18	円	5建
165	D10-3	0.38	0.33	0.48	円	6建
167	C11-2	0.40	0.37	0.49	略円	6建
168	C12-2	0.25	0.21	0.42	円	3建
169	B12-3	0.26	0.22	0.34	円	2建
170	A13-2	0.26	0.22	0.30	円	2建
171	B13-4	0.21	0.18	0.23	円	2建
172	B13-1	0.30	0.21	0.31	楕円	2建
173	B13-1	0.25	0.25	0.07	円	
174	B12-3	0.27	0.21	0.22	楕円	2建
175	D12-4	0.26	0.13	0.10	楕円	
176	F12-3	0.88	0.77	0.24	楕円	
177	D13-4	0.43	0.35	0.13	略楕円	
178	C14-1	0.74	0.51	0.13	楕円	
179	C12-3	0.29	0.21	0.32	楕円	3建
180	C12-3	0.21	0.17	0.07	円	3建？
181	C12-3	0.28	0.24	0.32	略円	3建
182	D12-3	0.20	0.16	0.18	略円	
183	C12-3	0.16	0.13	0.06	円	
184	C13-1	0.21	0.18	0.13	円	3建？
185	F10-1	0.47	0.25	0.09	略楕円	
186	C11-1	0.36	0.33	0.08	円	
187	B11-2	0.37	0.28	0.08	楕円	
188	B11-2	0.31	0.28	0.08	円	
189	C8-4	0.59	0.45	0.29	楕円	
190	E10-1	0.32	0.30	0.37	円	4建
191	C11-2	0.35	0.34	0.59	円	6建
192	C11-1	0.20	0.17	0.06	円	1建関連
193	E10-3	0.22	0.22	0.37	円	
194	E10-3	0.81	0.57	0.09	略楕円	
195	E9-3	0.32	0.31	0.35	円	4建
196	C12-4	0.29	0.26	0.36	円	3建
197	E9-4	0.38	0.33	0.80	略円	4建

番号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	備考
198	C12-1	0.21	0.14	0.19	楕円	3建
199	C10-2	0.19	0.18	0.22	円	
200	C12-4	0.26	0.24	0.48	円	3建
201	E10-1	0.26	0.24	0.26	円	4建
202	E9-3	0.17	0.17	0.36	略円	4建
203	E9-1	0.16	0.16	0.31	略円	4建
204	E9-2	0.28	0.26	0.53	円	4建
205	C12-2	0.23	0.21	0.42	円	3建
206	E9-3	0.25	0.22	0.37	略円	4建
207	C12-4	0.22	0.21	0.27	円	3建
208	C12-3	0.22	0.19	0.11	円	3建
209	E9-4	0.37	0.33	0.56	略円	4建
210	E10-2	0.25	0.22	0.09	円	
211	C12-3	0.21	0.20	0.18	円	3建？
212	D9-3	0.44	0.39	0.80	円	
213	E12-3	0.26	0.18	0.13	楕円	
214	E12-3	0.31	0.22	0.17	楕円	
215	E12-3	0.23	0.18	0.08	円	
216	D12-1	0.25	0.20	0.28	円	5建
217	D12-2	0.31	0.27	0.35	円	5建
218	D12-2	0.32	0.22	0.28	楕円	5建
219	E18-1	0.53	0.53	0.65	略円	1号柵列
220	D18-2	0.46	0.42	0.65	円	1号柵列
221	E18-3	0.24	0.19	0.31	略楕円	1号柵列
222	D18-4	0.41	0.36	0.57	円	1号柵列
223	D18-4	0.27	0.21	0.13	楕円	1号柵列
224	D18-3	0.37	0.34	0.46	円	1号柵列
225	D18-3	0.24	0.24	0.07	略円	1号柵列
226	D18-3	0.45	0.33	0.20	略楕円	1号柵列
227	E17-3	0.30	0.28	0.29	円	
228	D18-2	0.26	0.23	0.28	円	
229	D18-2	0.23	0.21	0.14	略円	
230	D18-1	0.23	0.21	0.12	円	
231	D17-3	0.31	0.29	0.20	円	
232	D17-3	0.20	0.20	0.12	円	
233	D17-3	0.38	0.30	0.09	楕円	
234	D17-3	0.27	0.22	0.29	円	
235	D17-3	0.30	0.29	0.32	円	
236	D17-4	0.23	0.18	0.36	楕円	
237	D17-4	0.48	0.32	0.07	隅丸長方形	
238	D12-1	0.19	0.15	0.14	楕円	
239	D12-2	0.20	0.17	0.13	円	
240	D12-2	0.29	0.25	0.28	円	5建
241	C10-4	0.30	0.18	0.42	楕円	1建関連
242	E18-3	0.26	0.19	0.09	楕円	
243	C18-3	0.23	0.21	0.06	円	
244	C18-3	0.19	0.18	0.05	円	
245	C17-4	0.24	0.18	0.09	楕円	
246	C18-4	0.28	0.25	0.25	円	
247	B12-3	0.45	0.31	0.35	楕円	2建
248	B12-4	0.42	(0.33)	0.46	(円)？	2建
249	B13-2	0.43	0.30	0.50	略楕円	2建
250	F17-4	0.27	0.22	0.31	円	
251	G17-3	0.37	0.29	0.28	楕円	
252	F18-2	0.24	0.19	0.12	楕円	
267	D11-4	0.25	0.21	0.10	楕円	5建
271	C10-1	0.24	0.22	0.20	円	1建
273	C10-4	0.47	0.37	0.55	略楕円	6建
288	D10-2	0.29	0.28	0.47	略円	
292	D10-1	0.26	0.24	0.32	円	

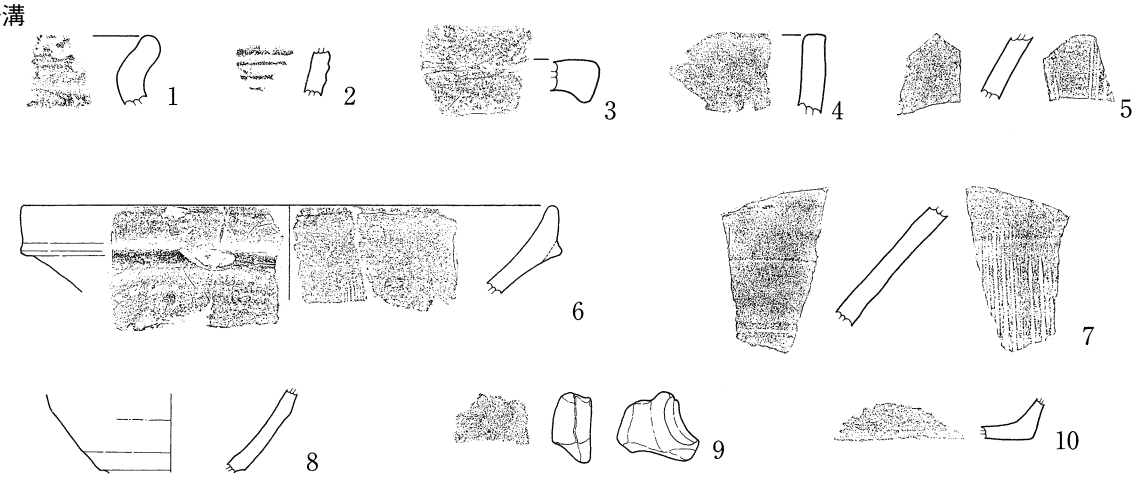

2号溝
1
2
3
4
5
6
7
8
9
4号溝
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
5号溝
1
2
3
4
5
6
7
10
11
8
9
12
8号溝
1
2
0
(1:3)
10cm

第34図　遺物（2～8号溝）

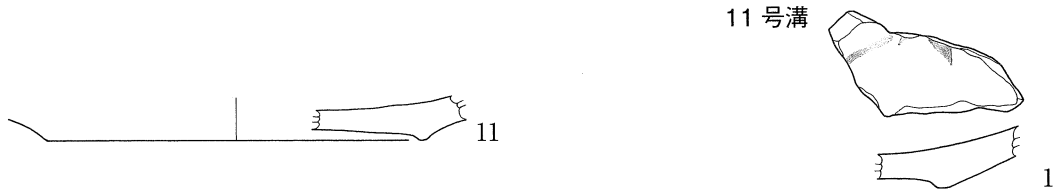
9号溝



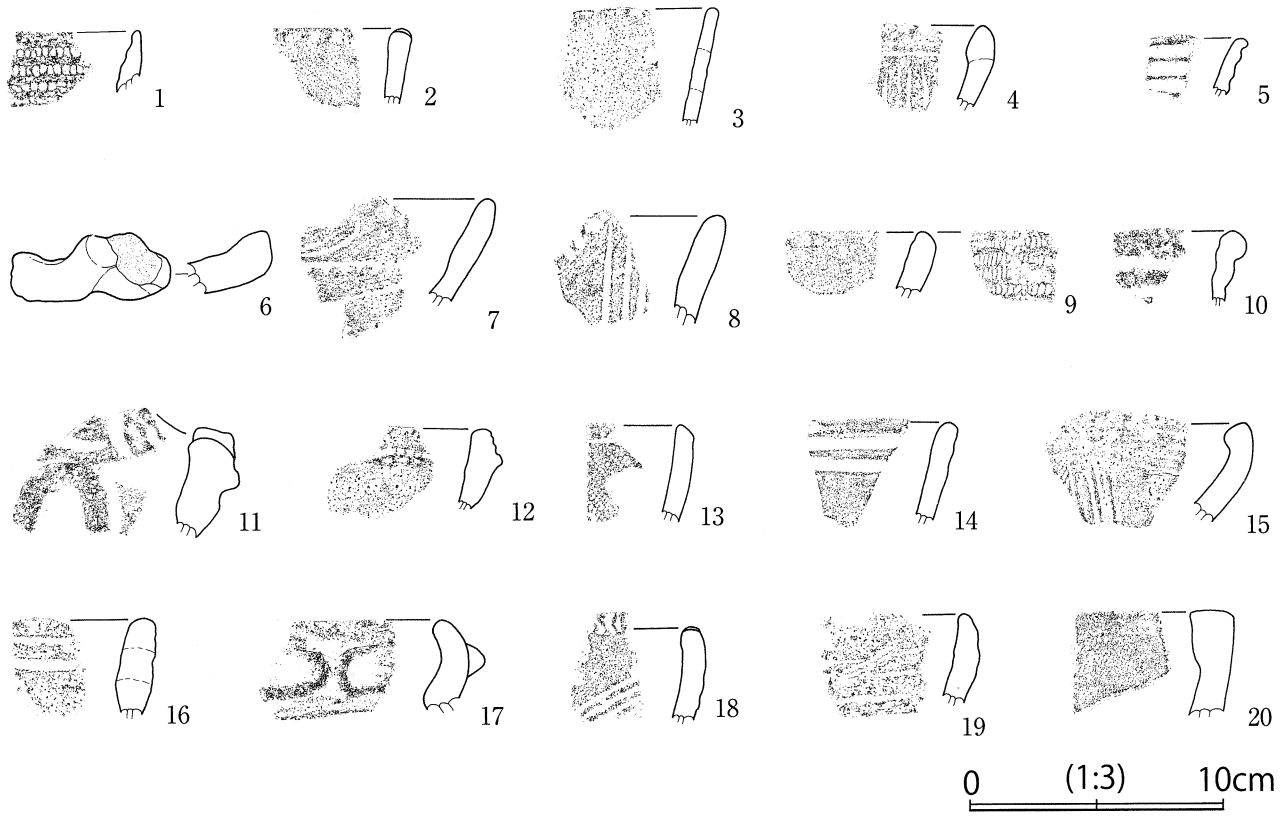
10号溝



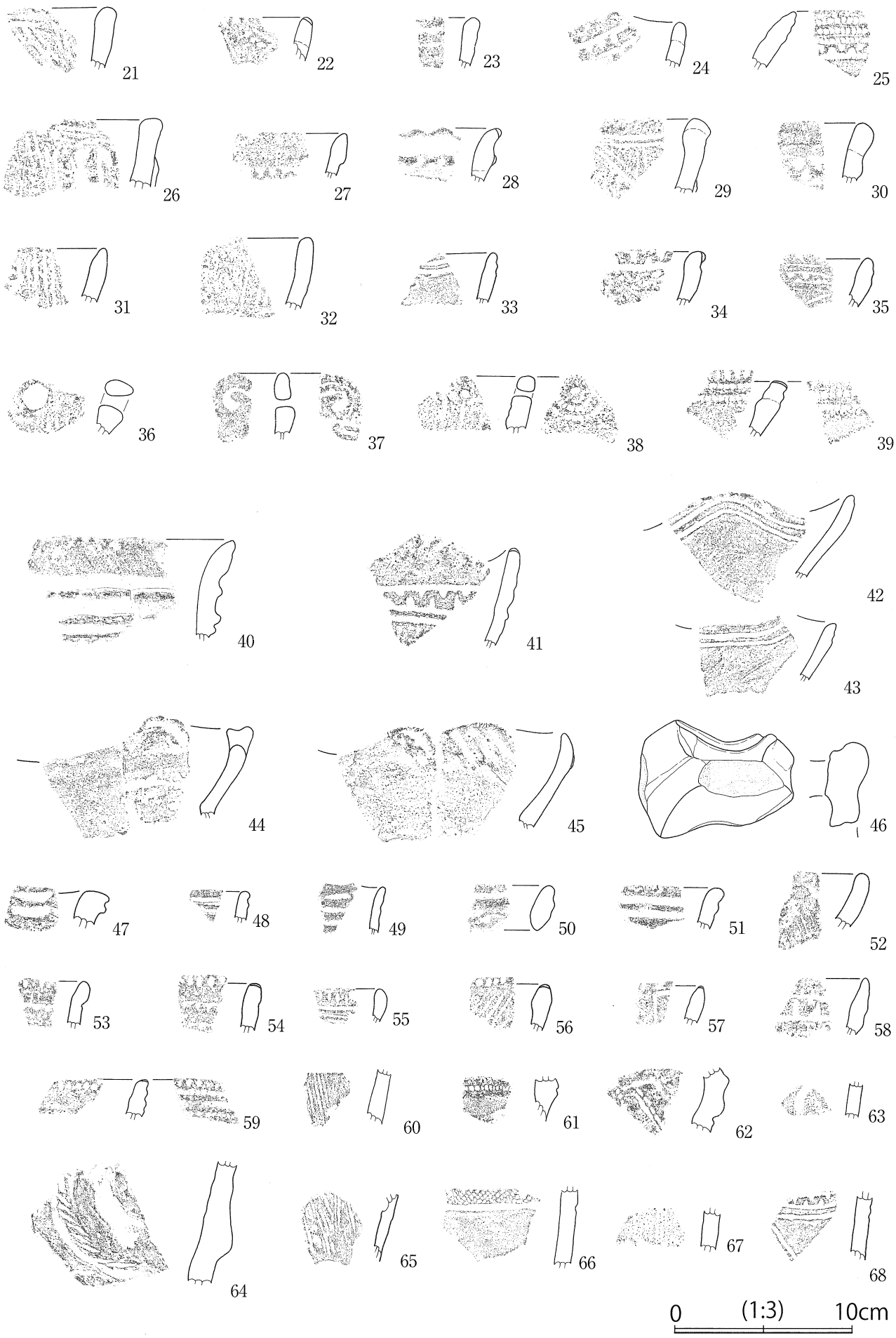
11号溝



14号溝

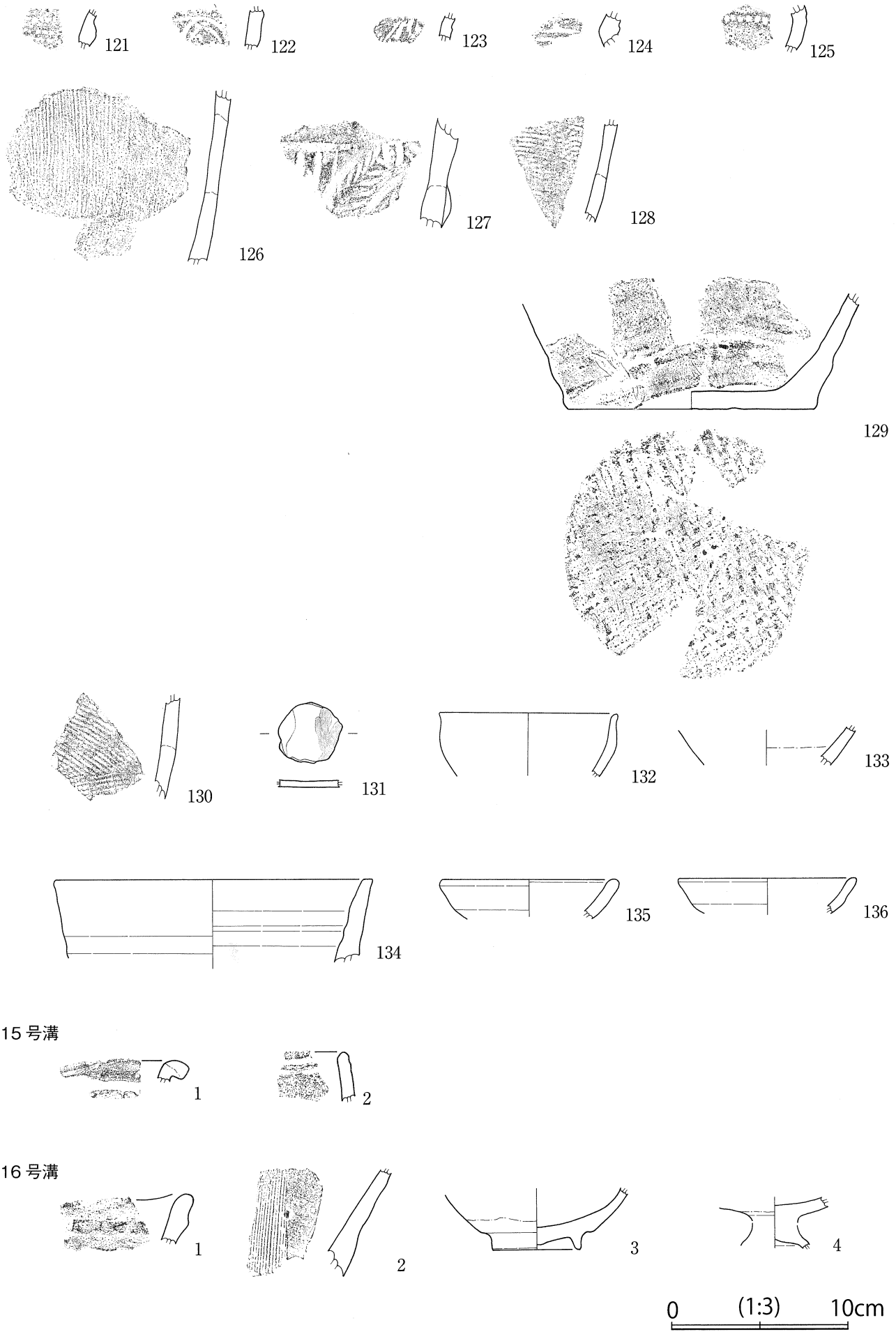


第35図　遺物（9～11・14号溝(谷)1）

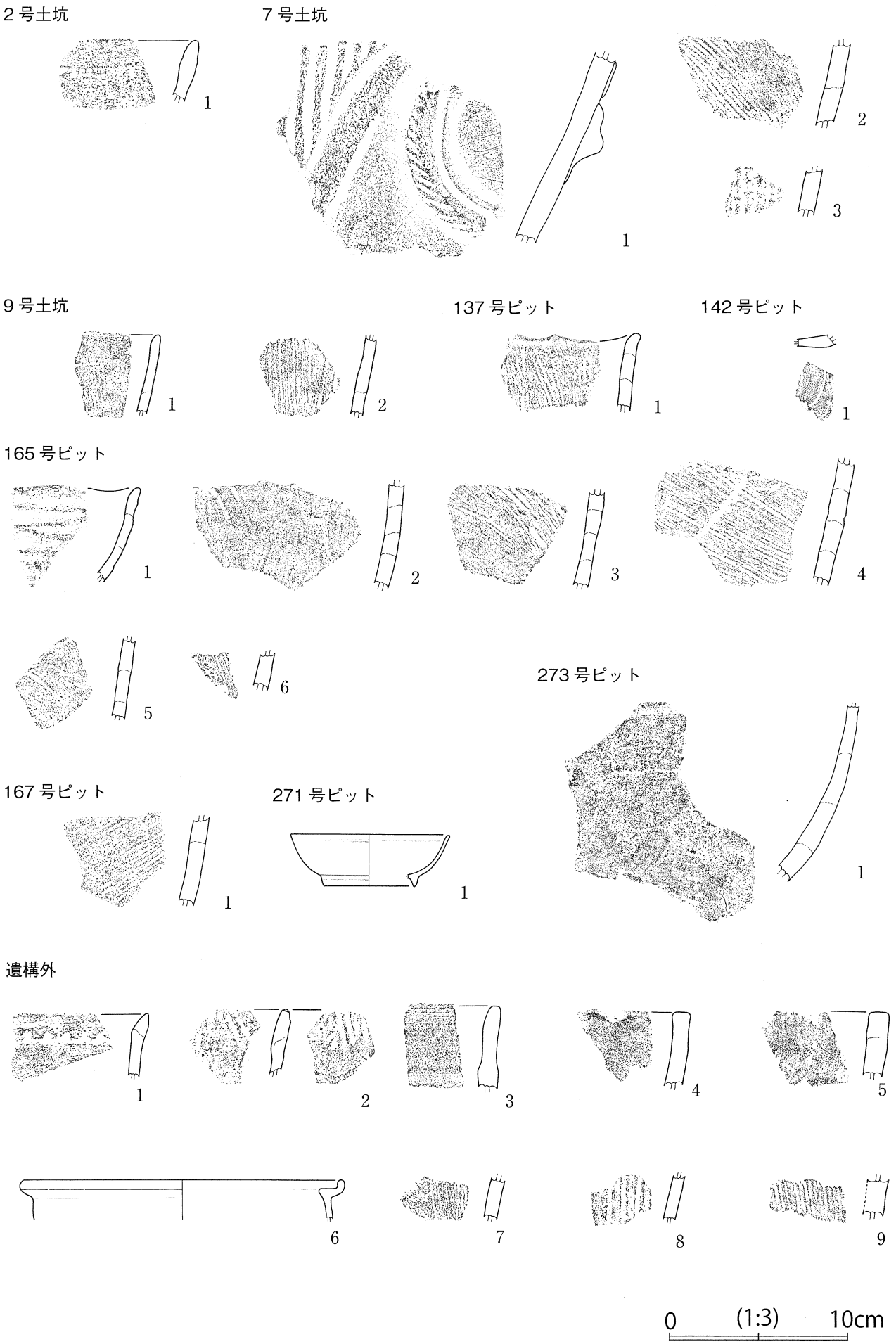


第36図　遺物（14号溝(谷)2）

第37図　遺物（14号溝(谷)3）

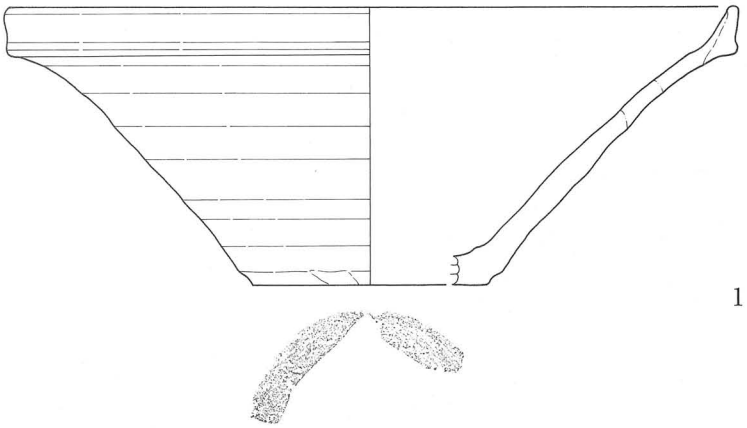


第38図　遺物（14 号溝(谷)4、15・16号溝）

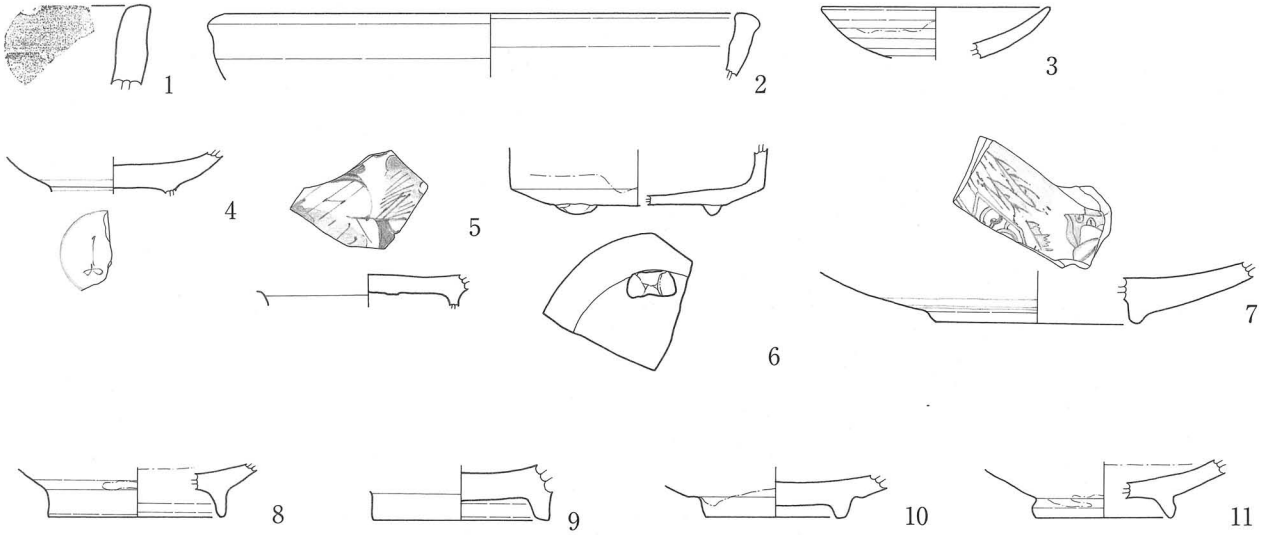


第39図　遺物（2・7・9号土坑、137・142・165・167・271・273号ピット、遺構外）

217 号ピット



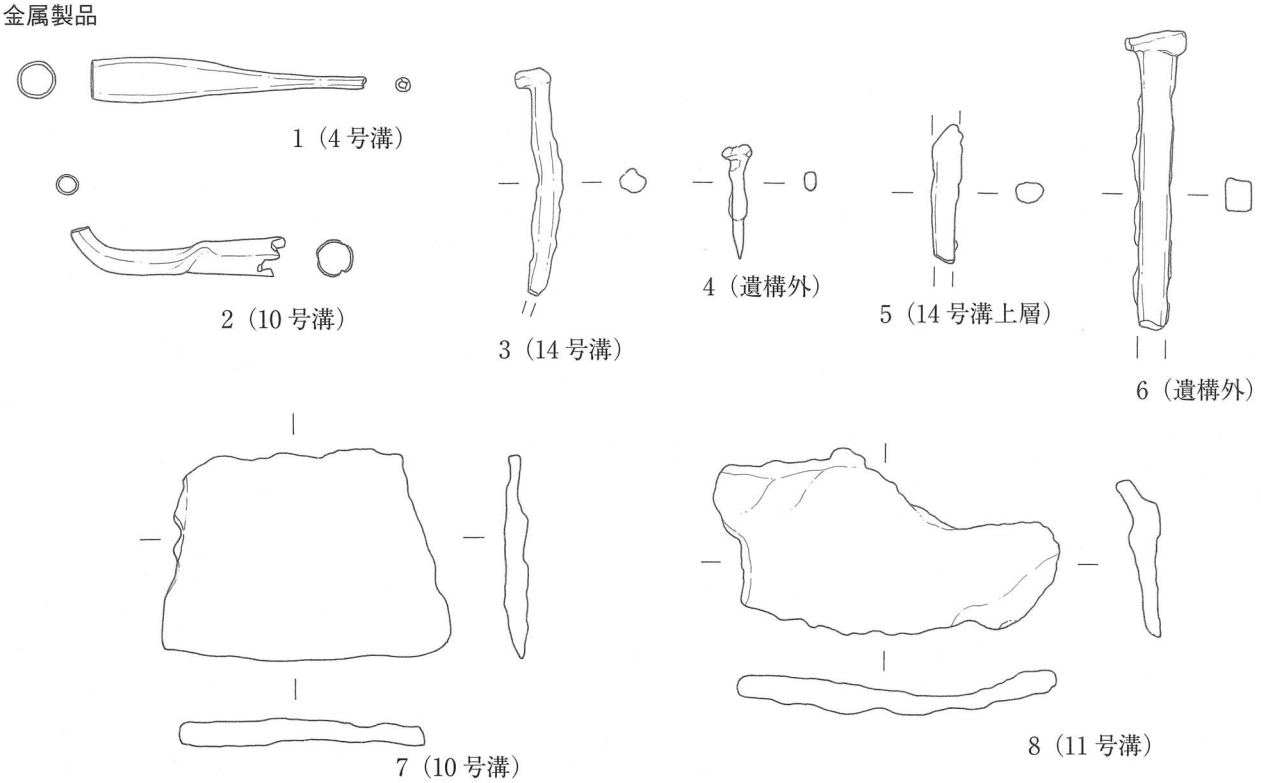
表土



0 (1:3) 10cm

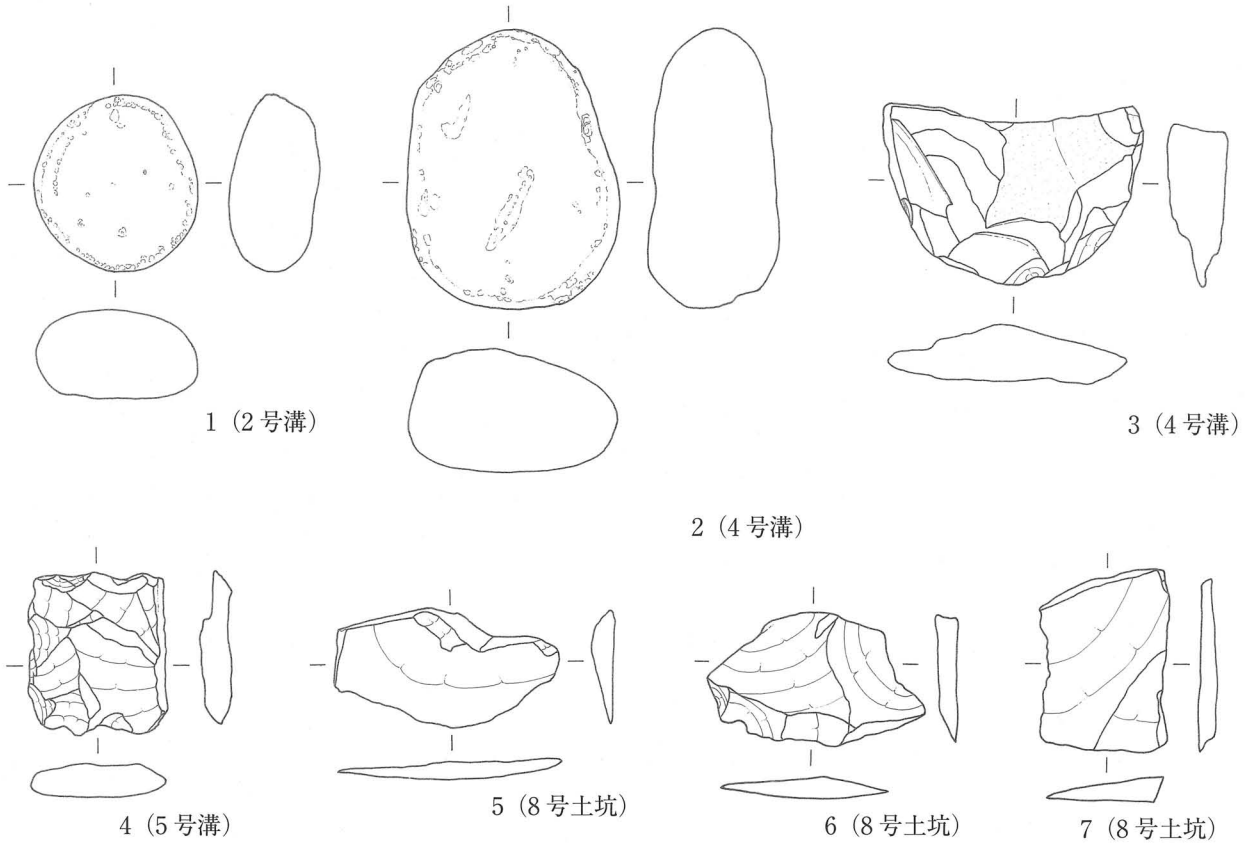
第40図　遺物（217 号ピット、表土）

金属製品



第41図　遺物（金属製品）

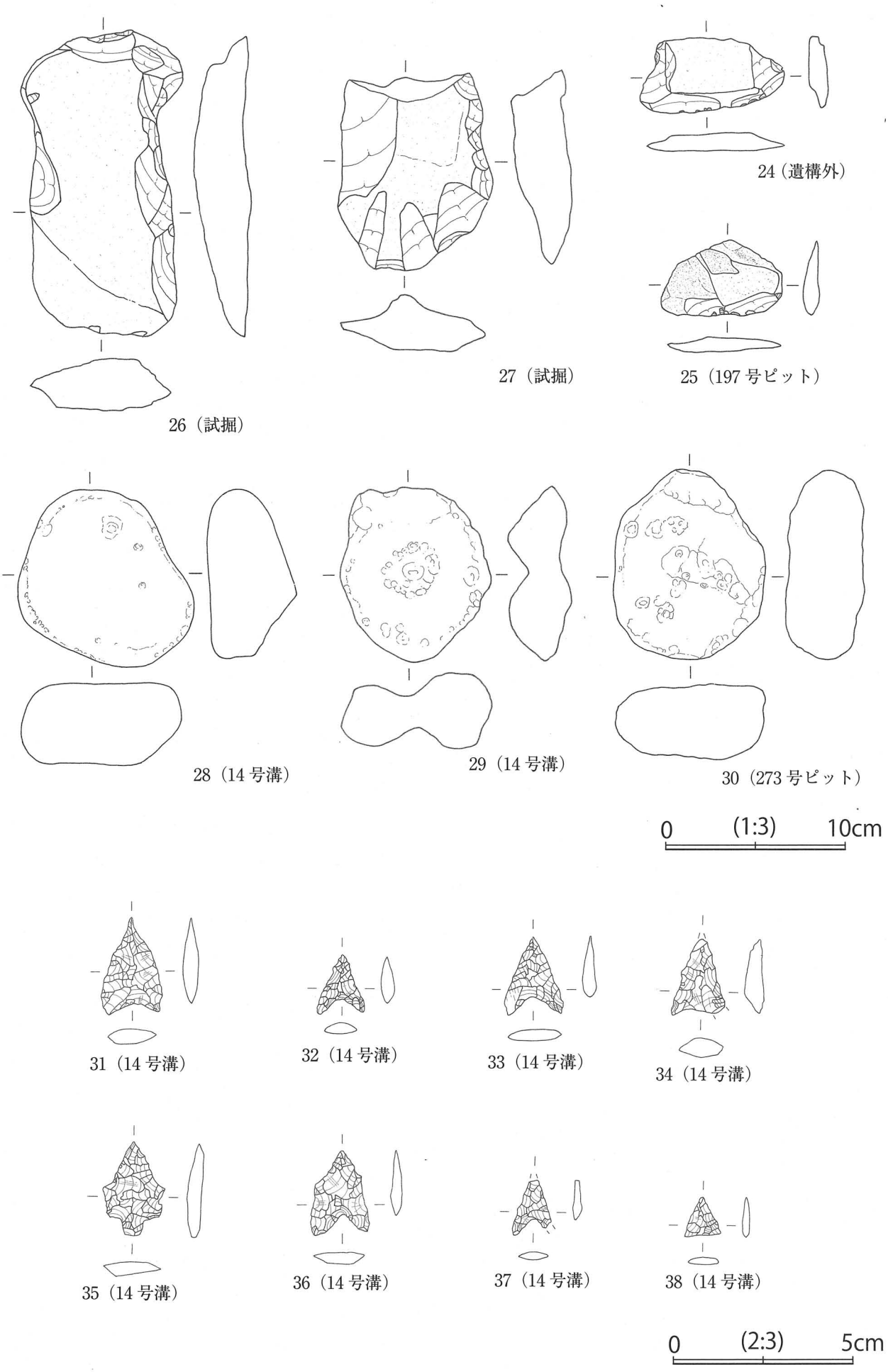
石器



第42図　遺物（石器(1)）

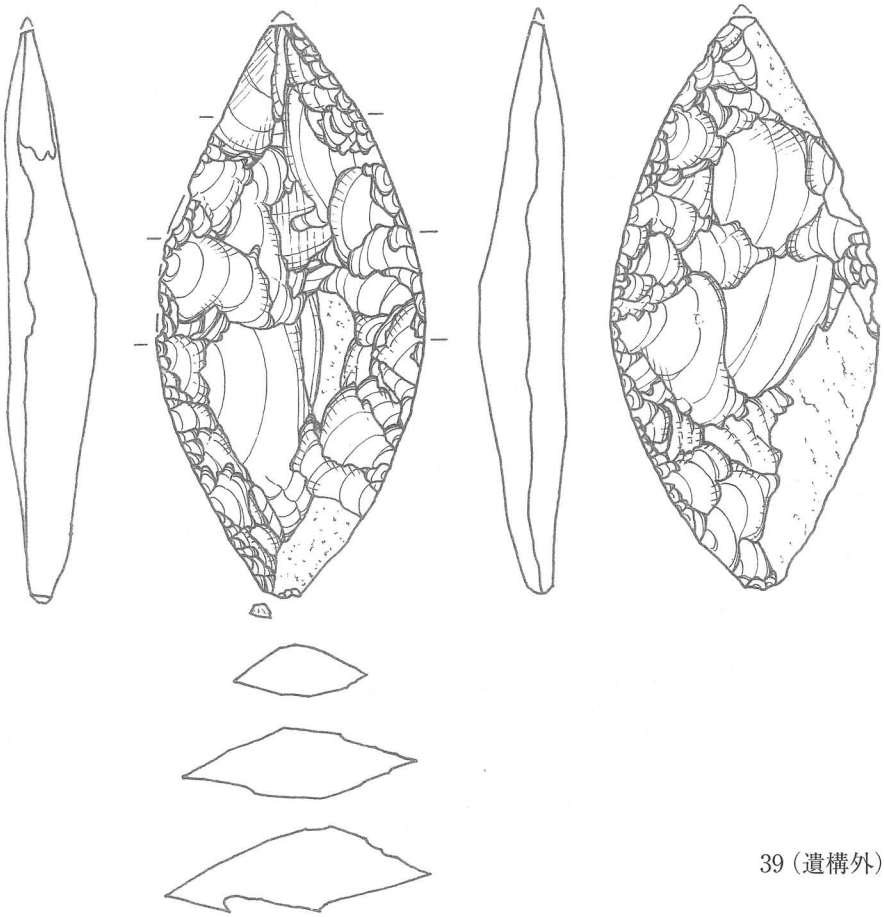
8（8号土坑）
9（8号土坑）
10（8号土坑）
11（8号土坑）
12（8号土坑）
13（12号溝）
14（14号溝）
15（14号溝）
16（14号溝）
17（14号溝）
18（14号溝）
19（14号溝）
20（14号溝）
21（14号溝）
22（14号溝）
23（14号溝）
0 (1:3) 10cm

第43図　遺物（石器（2））


24（遺構外）
25（197 号ピット）
26（試掘）
27（試掘）
28（14 号溝）
29（14 号溝）
30（273 号ピット）
0 (1:3) 10cm
31（14 号溝）
32（14 号溝）
33（14 号溝）
34（14 号溝）
35（14 号溝）
36（14 号溝）
37（14 号溝）
38（14 号溝）
0 (2:3) 5cm

第44図　遺物（石器(3)）

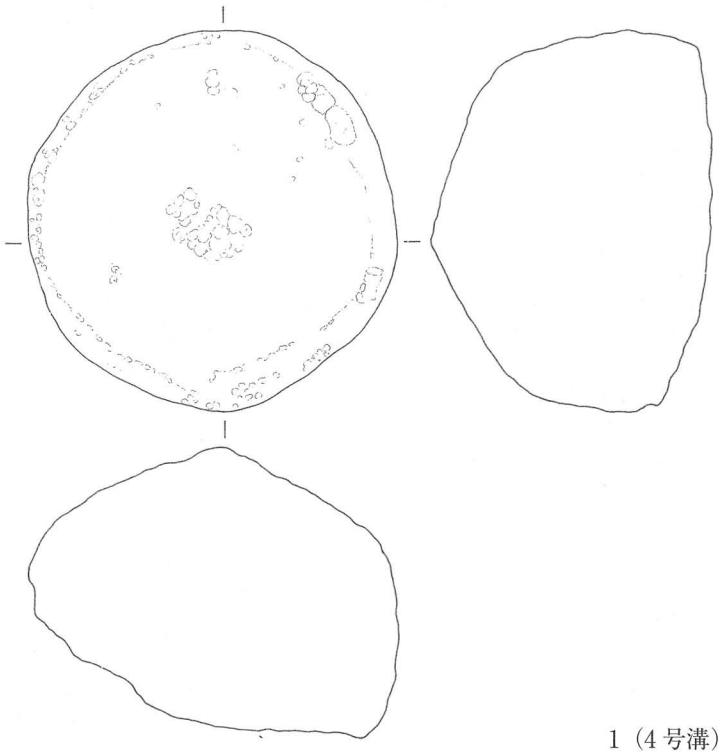
男女倉型有樋尖頭器



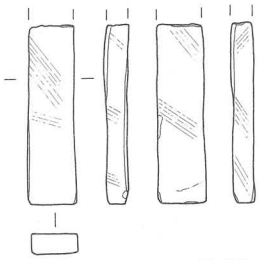
39（遺構外）

0 (1:1) 5cm

石造物、石・土製品



1（4号溝）



2 (11号溝)

3（遺構外）

0 (1:3) 10cm

第45図　遺物（石器（4）、石造物、石・土製品）

第７表　遺物観察表（土器・陶磁器類）

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高さ(cm)	整形技法	色調	胎土(含粒子)	注記内容	備考
34	2号溝	1	土器	甕	弥生後期	-/-/-	(内)ﾊｹ調整(外)ﾅﾃﾞ、櫛描波状文	浅黄橙	白、黒、赤、雲	316	県史弥生5期(金の尾Ⅰ式)
34	2号溝	2	須恵器	甕	平安	-/-/-	(内)ﾅﾃﾞ(外)ﾀﾀｷ	灰白	黒、白、雲	353	胴部破片　磨耗している
34	2号溝	3	須恵器	甕	平安	-/-/-	(内)当て工具によるﾀﾀｷ出し(外)木目の残るﾀﾀｷ	灰白	白、黒、赤	267	胴部破片　磨耗している
34	2号溝	4	陶器	鉢？	近代？	-/-/-	ロクロ	(鉄釉)黒、(胎土)褐灰	白	308	爛徳利の口縁か。
34	2号溝	5	陶器	碗	17c後半	-/5.4/-	ロクロ	(釉)暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色(胎土)淡黄	白、黒	283	瀬戸・美濃系、尾呂茶碗
34	2号溝	6	陶器	碗	17c前半	-/(4.8)/-	ロクロ	(釉)褐(胎土)灰白	黒、白、雲	309	瀬戸系
34	2号溝	7	土師質土器	皿	中世	-/(5.8)/-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、(底)回転糸切り	橙	白、黒、雲、赤	348	底部破片
34	2号溝	8	陶器	徳利	17c	-/(13.0)/-	ロクロ、(底)櫛歯状工具による整形	(釉)暗赤褐(胎土)浅黄橙	黒、赤、白	355	瀬戸系、船徳利
34	2号溝	9	陶器	碗	17c前半	-/(6.9)/-	ロクロ	浅黄橙	白、黒、雲	228	瀬戸系、底部高台部分
34	4号溝	1	土器	深鉢？	縄文？	-/(2.0)/-	底部に木葉痕	浅黄橙	白、赤、黒、雲	101	磨耗が著しい
34	4号溝	2	陶器	片口	18c後半	(12.8)/-/-	ロクロ	(釉)明黄褐(胎土)浅黄橙	白、黒、	1275	瀬戸系
34	4号溝	3	陶器	碗	16c後半	-/-/-	ロクロ	(鉄釉)黒(胎土)灰白	黒、白	106	瀬戸美濃大窯
34	4号溝	4	陶器	碗	16c後半～17c前半	-/-/-	ロクロ	(釉)黒(胎土)にぶい黄橙	黒、白	1274	瀬戸美濃大窯
34	4号溝	5	陶器	壺	中世	-/-/-	ロクロ	(胎土)灰白	白、黒、赤	1269	
34	4号溝	6	陶器	碗	17c前半	-/-/-	(内)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ(外)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	(釉)黒(胎土)淡黄	白、黒、赤	172	瀬戸系
34	4号溝	7	磁器	皿	16c後半	-/-/-	呉須、透明釉	灰白	黒、白	48	景徳鎮、手描きの花文
34	4号溝	8	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	橙	白、黒、雲、赤	109	口縁部破片
34	4号溝	9	磁器	碗	18c後葉～19c前葉	-/(4.6)/-	呉須、透明釉	灰白	黒、白	1270	見込み部に蛇の目状の釉剥ぎ痕あり
34	4号溝	10	陶器	徳利	18c中葉	-/5.8/-	(内)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ(外)回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ(底)高台削出し	灰白	白、黒、	1273	瀬戸系
34	5号溝	1	土器	注口土器	縄文後期	-/-/-	指頭痕	橙	白、黒、赤、雲	1335	堀之内
34	5号溝	2	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	浅黄橙	黒、白、赤、雲	1289	磨耗が著しい
34	5号溝	3	土師器	坏	不明	-/-/-	ナデ	橙	金色雲、白、黒、赤	1287	口縁部破片　磨耗している
34	5号溝	4	土師器	坏	不明	-/-/-	ナデ	浅黄橙	赤、白、黒、雲	1285	口縁部破片　磨耗している
34	5号溝	5	土師器	坏	不明	-/-/-	ナデ	浅黄橙	白、黒、雲	136	口縁部破片　磨耗している
34	5号溝	6	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	(内)ﾅﾃﾞ(外)砂目底？	明赤褐	白、黒、雲、赤	1327	底部外面砂目痕
34	5号溝	7	須恵器	甕	平安	-/-/-	(内)ﾍﾗ状工具によるﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ"(外)ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	灰褐	白、黒、赤、小礫	125	
34	5号溝	8	陶器	天目碗	17c	(9.3)/-/-	ロクロ	(釉)黒(胎土)灰白	白、黒	1332	瀬戸系
34	5号溝	9	陶器	碗	17c前半	(9.6)/-/-	ロクロ	(釉)淡黄(胎土)浅黄橙	黒、白	1334	瀬戸系
34	5号溝	10	陶器	鉢	18c前半	-/-/-	ロクロ	(釉)明黄褐(胎土)浅黄	白、黒	1334	瀬戸系
34	5号溝	11	磁器	碗	17c前半	-/-/-	呉須、透明釉	(釉)明緑灰(胎土)灰白	黒、白	128	肥前系、初期伊万里
34	5号溝	12	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ロクロ	黒褐	白、黒、角、雲	133	
34	8号溝	1	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ロクロ	橙	白、黒、赤、雲	1078	底部外面砂目痕
34	8号溝	2	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ロクロ	橙	白、黒、赤、雲、角	1077	外面すす付着
35	9号溝	1	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	爪形文	赤褐	白、黒、雲	1041	五領ヶ台
35	9号溝	2	土器	鉢？	縄文晩期	-/-/-	沈線文	橙	白、黒、赤	1111	磨耗が著しい
35	9号溝	3	陶器	行平内耳鍋	19c後半	-/-/-	ロクロ	(釉)灰赤(胎土)灰褐	白、黒、赤		在地系
35	9号溝	4	磁器	皿	大正～戦前	-/8.0/-	透明釉	灰白	白	1035	瀬戸系
35	9号溝	5	磁器	香炉	18c	-/-/-	呉須、透明釉	灰白	白		肥前系
35	9号溝	6	土器	灯明皿？	19c	-/-/-	ロクロ	(釉)暗赤灰(胎土)橙	白、赤		在地系
35	10号溝	1	土師質土器	鍋	中世	-/-/-	ロクロ	にぶい橙	白、赤、黒、雲	1079	口縁部破片
35	10号溝	2	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	にぶい褐	白、赤、黒	1054	
35	10号溝	3	土器	壷	弥生後期	-/-/-	折返し口縁端部に縄文	にぶい赤褐	白、赤、角	1070	県史弥生5期(金の尾Ⅱ式)
35	10号溝	4	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ロクロ	にぶい褐	白、黒、角、雲	192	
35	10号溝	5	陶器	擂鉢	18c前半	-/-/-	ロクロ、櫛歯痕	にぶい黄橙	白、黒		瀬戸、7と同一個体か
35	10号溝	6	陶器	擂鉢	16c中葉	(28.8)/-/-	ロクロ、櫛歯痕	にぶい黄橙	白、黒		瀬戸美濃大窯、217ピット1と同一個体
35	10号溝	7	陶器	擂鉢	18c前半	-/-/-	ロクロ、櫛歯痕	にぶい黄橙	白	1265	瀬戸、5と同一個体か
35	10号溝	8	陶器	天目碗	16c後半	-/-/-	ロクロ	にぶい黄橙	白、黒		瀬戸美濃大窯
35	10号溝	9	土師質土器	内耳内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	明赤褐	白、黒、角	1126	
35	10号溝	10	土師質土器	内耳内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	にぶい橙	白、黒、赤、雲		底部破片
35	10号溝	11	陶器	盤	17c前半	-/(15.0)/-	削出し高台	にぶい黄橙	白、黒	1046	瀬戸・美濃系、底部破片
35	11号溝	1	陶器	皿	17c初頭	-/-/-	釉	にぶい黄橙	白	1343	志野、削り出し高台、貫入あり
35	14号溝	1	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(内)刺突文	暗褐	黒、白、雲	293	
35	14号溝	2	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口縁部刻み	明褐	黒、白、赤、角	361	五領ヶ台
35	14号溝	3	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口縁部刻み	赤褐	黒、白、雲、小礫	384	五領ヶ台

図	地点	№.	種別	器種	時期	口/底/高さ(cm)	整形技法	色調	胎土(含粒子)	注記内容	備考
35	14号溝	4	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	暗赤褐	黒、白、雲、角	798	
35	14号溝	5	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	にぶい黄褐	黒、白、赤、雲	794	
35	14号溝	6	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	無文	明黄褐	黒、白	788	口縁部破片、井戸尻？
35	14号溝	7	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	にぶい赤褐	黒、白、赤、雲、角	714	五領ヶ台
35	14号溝	8	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	口縁部刻み、沈線文	褐	黒、白、雲、角	759	
35	14号溝	9	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(内)刺突文	黒褐	黒、白、雲	718	口縁部破片
35	14号溝	10	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	暗褐	黒、白、赤、角	797	口縁部破片
35	14号溝	11	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、角	742	口縁部破片　9と同一個体か　曽利？
35	14号溝	12	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	刺突文	黄褐	白、黒、雲、小礫	611	口縁部破片
35	14号溝	13	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	RL縄文	褐	白、黒、雲	614	
35	14号溝	14	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、赤、角	647	堀之内
35	14号溝	15	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明褐	白、黒、雲	682	堀之内
35	14号溝	16	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	にぶい赤褐	黒、白、角、雲	665	五領ヶ台
35	14号溝	17	土器	浅鉢	縄文中期	-/-/-	粘土紐貼付	褐	黒、白、雲	635	口縁部破片
35	14号溝	18	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口縁部刻み、沈線文	にぶい赤褐	白、黒、赤、雲	681	五領ヶ台
35	14号溝	19	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	褐	黒、白、雲	679	
35	14号溝	20	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	平口縁	明黄褐	黒、白	688	曽利？
36	14号溝	21	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	褐	雲、黒、白、赤	486	
36	14号溝	22	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口縁部刻み、RL縄文?	褐	白、黒、雲	472	五領ヶ台
36	14号溝	23	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	にぶい黄褐	白、黒、赤	318	
36	14号溝	24	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	褐	白、角	802	五領ヶ台
36	14号溝	25	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(内)刺突文、沈線文	褐	白、雲、黒	936	
36	14号溝	26	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	粘土紐貼付、沈線文	褐	白、雲、黒	556	五領ヶ台
36	14号溝	27	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	刺突文	明褐	白、黒、雲、小礫	1015	
36	14号溝	28	土器	壷	弥生前期？	-/-/-	幅広の沈線文、口唇部および突帯に指頭押圧	にぶい褐	白、赤、雲、黒	568	口縁部破片
36	14号溝	29	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、雲、黒	575	五領ヶ台
36	14号溝	30	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	刺突文、竹管文	褐	白、雲、黒	565	
36	14号溝	31	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	579	五領ヶ台？
36	14号溝	32	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	暗褐	白、雲、黒	552	
36	14号溝	33	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	褐	白、角、黒	557	加曽利B？
36	14号溝	34	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文、口唇部刻み	にぶい赤褐	黒、白、赤、雲	下層	五領ヶ台
36	14号溝	35	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	明褐	白、黒、雲	下層	五領ヶ台
36	14号溝	36	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	無文	にぶい黄褐	白、角	902	堀之内
36	14号溝	37	土器	注口土器？	縄文後期	-/-/-	沈線文	暗褐	黒、白、赤、雲	795	堀之内、注口土器の取っ手部分か
36	14号溝	38	土器	鉢	縄文後期	-/-/-	(内)角押文(外)沈線文	褐	白、赤、雲	890	堀之内
36	14号溝	39	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(外)刺突文、口唇部刻み(内)刺突文	褐	白、雲	588	
36	14号溝	40	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文、竹管文、RL縄文	褐	黒、白、雲	629	
36	14号溝	41	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	褐	黒、白、雲	678	五領ヶ台
36	14号溝	42	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	にぶい褐	白、黒、赤、雲	558	加曽利B？
36	14号溝	43	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	灰褐	白、赤、雲、黒	549	加曽利B？
36	14号溝	44	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	粘土紐貼付?	にぶい褐	白、黒、赤、雲	567	
36	14号溝	45	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	粘土紐貼付	にぶい褐	白、赤、黒、雲	540、547	
36	14号溝	46	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	無文	黄褐	白、黒、赤	574	井戸尻？　口縁部破片
36	14号溝	47	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、赤、雲	下層	
36	14号溝	48	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	黄橙	黒、白、雲	上層	
36	14号溝	49	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、赤、角	上層	
36	14号溝	50	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	明褐	白、黒、雲	下層	五領ヶ台
36	14号溝	51	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	明黄褐	白、黒、角	上層	
36	14号溝	52	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	下層	
36	14号溝	53	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口唇部刻み、沈線文、刺突文	褐	白、黒	上層	五領ヶ台
36	14号溝	54	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口唇部刻み、沈線文、刺突文	褐	白、黒、雲	下層	五領ヶ台
36	14号溝	55	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口唇部刻み、沈線文	暗褐	白、赤、黒、角		五領ヶ台
36	14号溝	56	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	口唇部刻み、沈線文	(内)明赤褐(外)褐	雲、白、黒		五領ヶ台

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高さ(cm)	整形技法	色調	胎土(含粒子)	注記内容	備考
36	14号溝	57	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文および、その区画内にL縄文？	褐	白、角		
36	14号溝	58	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	明褐	雲、白、黒		五領ヶ台
36	14号溝	59	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(外)口唇部刻み、刺突文(内)刺突文	にぶい黄褐	雲、黒、白		
36	14号溝	60	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	明赤褐	白、黒、赤、雲	258	
36	14号溝	61	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	刺突文	にぶい赤褐	黒、赤、雲	260	
36	14号溝	62	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	(内)にぶい黄褐(外)明褐	白、黒、赤、雲	250	五領ヶ台
36	14号溝	63	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文、RL縄文？	(内)(外)橙	白、黒、雲	292	
36	14号溝	64	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、隆帯に刻み	明褐	白、黒、赤、雲	285	井戸尻？
36	14号溝	65	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	(内)明赤褐(外)橙	黒、白、赤、雲	781	
36	14号溝	66	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文、LR縄文	にぶい黄橙	白、黒、赤、雲	335	堀之内
36	14号溝	67	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	橙	白、黒、赤、角	387	
36	14号溝	68	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	にぶい黄褐	黒、白、雲	784	五領ヶ台
37	14号溝	69	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	暗褐	黒、白、赤、雲	769、770	五領ヶ台
37	14号溝	70	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	竹管文	にぶい赤褐	白、黒、雲	752	五領ヶ台？
37	14号溝	71	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	(内)明黄褐(外)明赤褐	黒、白、赤、雲、角	786	
37	14号溝	72	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい赤褐	黒、白、赤、雲	725	
37	14号溝	73	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、爪形文	褐	黒、白、赤、雲	735	五領ヶ台
37	14号溝	74	土器	深鉢	縄文晩期？	-/-/-	条痕文	赤褐	黒、白、赤、角	748	磨耗が著しい
37	14号溝	75	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文、RL縄文？	(内)暗褐(外)明赤褐	黒、白、赤、雲	741	磨耗が著しい
37	14号溝	76	土器	深鉢	縄文後期？	-/-/-	L縄文	褐	黒、白、赤、雲	732	
37	14号溝	77	土器	深鉢	縄文後期？	-/-/-	沈線文	(内)明褐(外)褐	白、黒、雲	740	
37	14号溝	78	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	黄褐	白、黒、雲	755	五領ヶ台？
37	14号溝	79	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	暗褐	白、黒、赤、雲	720	五領ヶ台
37	14号溝	80	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、口唇部刻み？	褐	白、黒、雲	726	五領ヶ台？　口縁部付近
37	14号溝	81	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	黒、白、雲	739	五領ヶ台？
37	14号溝	82	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明褐	白、黒、雲	749	
37	14号溝	83	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、LR縄文、低い隆帯	褐	黒、白、雲	627,629	五領ヶ台
37	14号溝	84	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	625	五領ヶ台？
37	14号溝	85	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	(内)刺突文(外)沈線文	赤褐	黒、白、赤、雲	617	
37	14号溝	86	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	刻み目隆線、沈線文	明黄褐	黒、白、赤、雲	696	堀之内
37	14号溝	87	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	黒、白、雲	654	五領ヶ台？
37	14号溝	88	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、赤、雲	608	称名寺？
37	14号溝	89	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	明赤褐	白、黒、雲	631	五領ヶ台
37	14号溝	90	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	赤褐	白、黒、雲、角	659	五領ヶ台？
37	14号溝	91	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、赤、雲	643	井戸尻？
37	14号溝	92	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	爪形文	にぶい赤褐	白、雲、黒	457	
37	14号溝	93	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、黒、赤	382	
37	14号溝	94	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	明褐	白、黒、角、赤	319	
37	14号溝	95	土器	深鉢	縄文晩期？	-/-/-	条痕文	褐	白、赤	470	
37	14号溝	96	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	暗褐	角、雲、白、黒		
37	14号溝	97	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	にぶい褐	白、赤、黒	815	
37	14号溝	98	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、黒、角	943	
37	14号溝	99	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、赤、雲	942	
37	14号溝	100	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、黒、赤、雲、角	913	
37	14号溝	101	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明褐	白、小礫、赤	303	堀之内
37	14号溝	102	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、粘土紐貼付	褐	白、赤、角、黒	919	五領ヶ台
37	14号溝	103	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	爪形文	にぶい赤褐	白、雲、黒	906	
37	14号溝	104	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	明褐	白、黒、雲	569	
37	14号溝	105	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	竹管による重弧文	暗褐	白、雲	571	曽利
37	14号溝	106	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	褐	白、雲	592	
37	14号溝	107	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	粘土紐貼付	褐	白、雲、黒	562	井戸尻？
37	14号溝	108	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	粘土紐貼付、RL縄文	暗褐	白、雲、角	576	五領ヶ台
37	14号溝	109	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、粘土紐貼付	暗褐	白、角	504	五領ヶ台

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高さ(cm)	整形技法	色調	胎土(含粒子)	注記内容	備考
37	14号溝	110	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい黄褐	白、赤、黒、雲	578	
37	14号溝	111	土器	深鉢	縄文後期？	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	下層	
37	14号溝	112	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	下層	五領ヶ台？
37	14号溝	113	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、RL縄文	褐	白、黒、雲	下層	五領ヶ台
37	14号溝	114	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	明赤褐	黒、赤、白	下層	
37	14号溝	115	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文、刺突文	褐	黒、白、雲	下層	
37	14号溝	116	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲	上層	
37	14号溝	117	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	褐	白、黒、雲		五領ヶ台？
37	14号溝	118	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	明褐	黒、白、角		
37	14号溝	119	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、粘土紐貼付	明褐	雲、白、黒		五領ヶ台
37	14号溝	120	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	角、白		五領ヶ台？
38	14号溝	121	土器	浅鉢	縄文後期	-/-/-	刺突文	褐	白、黒、雲		
38	14号溝	122	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文	褐	白、黒、雲、角		五領ヶ台？
38	14号溝	123	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	暗褐	雲、白、角		
38	14号溝	124	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	褐	雲、白、角		
38	14号溝	125	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	刺突文、沈線文	褐	雲、白、黒、角		
38	14号溝	126	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	褐	白、赤	382	
38	14号溝	127	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刻み目隆線	黄褐	白、赤、黒、雲	499	井戸尻？
38	14号溝	128	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい黄褐	白、赤、雲	477	磨耗が著しい
38	14号溝	129	土器	深鉢	縄文後期	-/(14.2)/-	(底)網代痕	明褐	白、黒、赤、雲	363、452、459、482、483、484、520、	底部破片
38	14号溝	130	須恵器	甕	平安	-/-/-	(内)ナデ(外)タタキ	褐灰	白、黒	471	
38	14号溝	131	磁器	皿	大正～戦前	-/-/-	透明釉	灰白	白	764	瀬戸
38	14号溝	132	陶器	天目碗	17c前半	(10.0)/-/-	ロクロ	(釉)黒(胎土)にぶい黄橙	白、黒		瀬戸
38	14号溝	133	陶器	皿	17c後半	-/-/-	ロクロ	浅黄	白、黒	710	嬉野
38	14号溝	134	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	(18.0)/-/-	ナデ	にぶい橙	白、黒、赤	456	すす痕
38	14号溝	135	土師質土器	皿	中世	(9.6)/-/-	ロクロ	橙	白、黒、雲	478	
38	14号溝	136	土師質土器	皿	中世	(10.0)/-/-	ロクロ	にぶい黄橙	白、黒	454	
38	15号溝	1	土器	壷	弥生後期	-/-/-	折返し口縁	にぶい黄橙	白、黒、雲	1347	
38	15号溝	2	土器	浅鉢	縄文晩期	-/-/-	沈線文	灰黄褐	白、黒、角	1355	
38	16号溝	1	土器	深鉢	縄文後期	-/-/-	粘土紐貼付	明褐	白、黒、赤、角	1353	
38	16号溝	2	陶器	擂鉢	16c	-/-/-	ロクロ、櫛歯痕	灰黄	白、黒	1356	瀬戸美濃大窯
38	16号溝	3	陶器	天目碗	17c初頭	-/(5.0)/-	ロクロ	灰黄褐	白、黒	1357	瀬戸美濃大窯
38	16号溝	4	陶器	仏飯器	17c後半	-/-/-	ロクロ	にぶい黄橙	白、黒	1360	瀬戸
39	2号土坑	1	土器	浅鉢	縄文後期？	-/-/-	角押文	にぶい黄褐	白、雲、赤	139	
39	7号土坑	1	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刻み目隆線	暗褐	白、角、雲	1022	井戸尻？
39	7号土坑	2	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい黄褐	白、赤、黒、雲	897	
39	7号土坑	3	土器	浅鉢	縄文後期？	-/-/-	沈線文、刺突文	褐	白、赤、雲、黒	950	
39	9号土坑	1	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい黄橙	白、黒、赤、角	1104	
39	9号土坑	2	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、黒、雲	1107	
39	137ﾋﾟｯﾄ	1	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	明褐	白、黒、赤、雲、角	989	
39	142ﾋﾟｯﾄ	1	土師質土器	皿	中世	-/-/-	(底)回転糸切り	橙	白、黒、雲	1026	
39	165ﾋﾟｯﾄ	1	土器	鉢？	縄文晩期	-/-/-	沈線文	橙	白、黒、赤、角	1092	
39	165ﾋﾟｯﾄ	2	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	褐	白、黒、赤、雲	1098	
39	165ﾋﾟｯﾄ	3	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	褐	白、黒、赤、雲	1095	
39	165ﾋﾟｯﾄ	4	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	黒褐	白、黒、赤	1214	
39	165ﾋﾟｯﾄ	5	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	暗褐	白、黒、赤、雲	1097	
39	165ﾋﾟｯﾄ	6	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	明褐	白、黒、赤、雲	1094	
39	167ﾋﾟｯﾄ	1	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	暗褐	白、黒、赤、雲	1100	
39	271ﾋﾟｯﾄ	1	磁器	皿	16c後半	(9.0)/2.8/(5.2)	釉	灰白	黒、白	1277	景徳鎮、青花皿
39	273ﾋﾟｯﾄ	1	土器	鉢？	縄文後期？	-/-/-	沈線文	明黄褐	黒、白、赤、雲	1298	
39	遺構外	1	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	沈線文、刺突文	にぶい赤褐	雲、黒	1383	五領ヶ台？
39	遺構外	2	土器	深鉢	縄文中期	-/-/-	(外)口唇部刻み、沈線文(内)沈線文	褐	雲、白、角	442	五領ヶ台？
39	遺構外	3	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	にぶい黄褐	白、赤	1409	

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高さ(cm)	整形技法	色調	胎土(含粒子)	注記内容	備考
39	遺構外	4	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	にぶい橙	白、赤、角		
39	遺構外	5	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	にぶい褐	白、赤、角		
39	遺構外	6	陶器	行平内耳鍋	19c後半	(18.0)/-/-	ロクロ	褐	白	在地系	
39	遺構外	7	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、黒、雲	358	
39	遺構外	8	土器	深鉢	縄文中期？	-/-/-	沈線文	褐	白、赤、雲	254	
39	遺構外	9	土器	深鉢	縄文晩期	-/-/-	条痕文	にぶい褐	白、赤、角、黒	67	
40	217ﾋﾟｯﾄ	1	陶器	擂鉢	16c中葉	(28.8)/(9.4)/11.0	(内)14本単位の櫛歯状工具痕(底)回転糸切り	にぶい赤褐	白、黒、白色礫	1256、1258、1261、9ﾐｼﾞ1038、10ﾐｼﾞ一括	瀬戸美濃大窯、10号溝26と同一個体
40	表土	1	土師質土器	内耳鍋	中世～近世	-/-/-	ナデ	にぶい褐	白、雲、赤		
40	表土	2	陶器	擂鉢	18c前半	(21.0)/-/-	ロクロ	にぶい黄橙			瀬戸系、口縁部破片
40	表土	3	土器	灯明皿	18c後葉～19c前半	(9.0)/-/-	(内)釉(外)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、釉	灰黄褐			瀬戸系
40	表土	4	磁器	碗	18c後半	-/(4.8)/-	呉須、透明釉	灰白			肥前系、「大明年製」の崩し字
40	表土	5	磁器	皿	19c前半～中	-/(7.5)/-	呉須、透明釉	灰白			肥前系
40	表土	6	陶器	香炉	18c後半	-/(6.0)/-	ロクロ、ヘラ削り	灰黄	黒		瀬戸系
40	表土	7	磁器	大皿	明治～大正	-/(8.0)/-	銅版転写	灰白			瀬戸系、染付、手書き、貫入
40	表土	8	陶器	鉢	18c中葉～後葉	-/(7.0)/-	ロクロ	灰白	黒		瀬戸系、見込みに輪禿あり
40	表土	9	陶器	鉢	18c	-/(7.0)/-	ロクロ	浅黄	白		瀬戸系
40	表土	10	陶器	碗	17c後半	-/(5.5)/-	ロクロ	浅黄	黒		瀬戸系、尾呂茶碗
40	表土	11	陶器	鉢	18c後半～19c初頭	-/(5.4)/-	ロクロ	にぶい黄橙			瀬戸系、再興織部　見込みに輪禿あり

第８表　遺物観察表（石器）

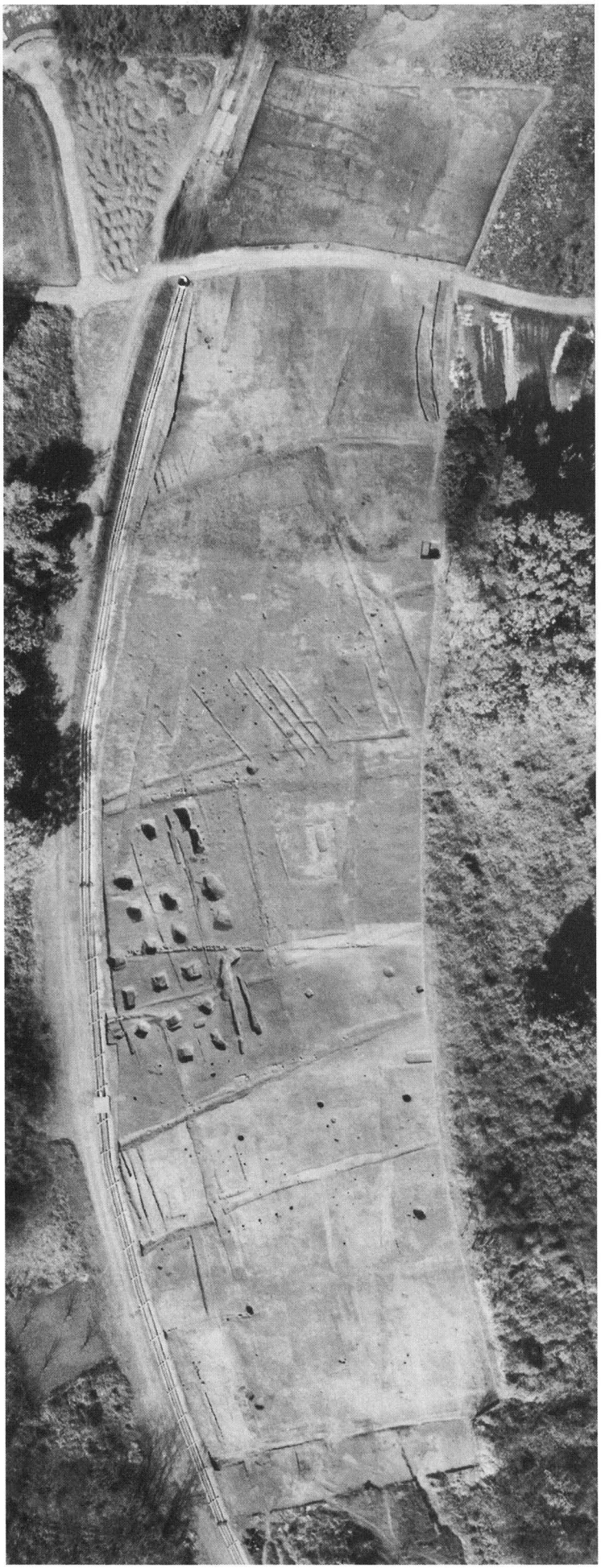
図版	地点	No.	分類	長/幅/厚	重さg	石材	色調	注記	備考
42	2号溝	1	磨石	7.0/6.4/3.5	225.0	輝石安山岩	黄灰	284	
42	4号溝	2	磨石	11.0/8.3/5.2	594.0	角閃石輝石安山岩	灰白	108	
42	4号溝	3	打斧	6.3/10.2/2.3	191.0	ホルンフェルス	暗灰黄	1276	
42	5号溝	4	打斧	6.0/5.4/1.3	62.0	砂質貢岩	灰	1290	
42	8号土抗	5	剥片	4.6/8.8/0.9	339.0	砂岩	灰	1195	
42	8号土抗	6	剥片	5.1/8.1/1.0	40.0	砂岩	灰	1192	
42	8号土抗	7	剥片	6.7/4.9/1.0	26.0	砂岩	灰	1193	
43	8号土抗	8	剥片	4.9/12.4/0.7	47.0	砂岩	灰	1197	
43	8号土抗	9	剥片	11.2/2.9/0.7	22.0	砂岩	灰	1198	
43	8号土抗	10	剥片	4.9/5.1/0.6	17.0	砂岩	灰	1196	
43	8号土抗	11	剥片	11.6/4.6/1.0	64.0	砂岩	灰	1194	
43	8号土抗	12	磨石	6.8/4.4/3.4	141.0	輝石安山岩	灰黄	1141	
43	12号溝	13	磨石	4.8/4.2/3.2	95.0	輝石安山岩	灰黄	214	
43	14号溝	14	打斧	8.7/4.7/1.2	59.0	緑色凝灰岩	灰オリーブ	601	
43	14号溝	15	打斧	12.0/5.0/1.1	97.0	貢岩	灰	555	
43	14号溝	16	打斧	7.4/6.3/0.8	56.0	ホルンフェルス	灰オリーブ	413	
43	14号溝	17	打斧	9.6/4.4/1.3	71.0	ホルンフェルス	浅黄	669	
43	14号溝	18	打斧	9.4/5.2/1.5	76.0	貢岩(ホルンフェルス化？)	灰黄		
43	14号溝	19	打斧	8.4/5.3/1.6	98.0	貢岩	淡黄	745	
43	14号溝	20	打斧	7.7/8.7/1.4	120.0	ホルンフェルス	浅黄	708	
43	14号溝	21	打斧	7.3/4.7/0.7	23.0	ホルンフェルス	浅黄		
43	14号溝	22	打斧	5.5/5.1/1.0	47.0	貢岩(ホルンフェルス化？)	にぶい黄褐	711	
43	14号溝	23	石匙	4.0/6.0/1.1	32.0	砂岩	灰	736	
44	遺構外	24	石匙	4.0/7.6/1.0	40.0	砂岩	灰	1117	
44	197号ピット	25	石匙	4.1/6.3/0.9	28.0	砂岩貢岩	黄灰	1244	
44	試掘	26	打斧	16.5/7.8/3.0	580.0	砂岩	灰黄		
44	試掘	27	打斧	10.6/8.4/3.0	309.0	ホルンフェルス	にぶい黄		
44	14号溝	28	凹石	9.4/9.6/4.8	640.0	輝石安山岩	にぶい黄褐	930	
44	14号溝	29	凹石	9.6/8.4/4.1	337.0	輝石安山岩	にぶい黄褐	889	
44	273号ピット	30	凹石	10.6/9.4.4	625.0	閃緑岩	暗灰黄	1297	
44	14号溝	31	石鏃	2.7/1.4/0.4	1.38	黒曜石	黒	683	凹基無茎鏃
44	14号溝	32	石鏃	1.6/0.9/0.3	0.31	黒曜石	黒	737	凹基無茎鏃
44	14号溝	33	石鏃	2.1/1.3/0.3	0.72	黒曜石	黒	925	凹基無茎鏃
44	14号溝	34	石鏃	2.2/1.2/0.5	1.03	黒曜石	黒	796	凹基無茎鏃
44	14号溝	35	石鏃	2.6/1.6/0.4	1.51	黒曜石	黒	476	飛行機鏃
44	14号溝	36	石鏃	2.4/1.4/0.3	1.08	黒曜石	黒	604	凹基無茎鏃
44	14号溝	37	石鏃	1.6/0.9/0.2	0.25	黒曜石	半透明	652	凹基無茎鏃
44	14号溝	38	石鏃	1.1/0.8/0.2	0.19	黒曜石	半透明		平基無茎鏃
45	遺構外	39	尖頭器	7.6/3.6/1.2	24.7	黒曜石	黒	1388	男女型有樋尖頭器

第９表　遺物観察表（石造物、石・土製品）

図版	地点	No.	分類	長/幅/厚	重さg	石材	色調	注記	備考
45	4号溝	1	空風輪	15.0/14.4/11.0	2840.0	角閃石デイサイト	灰黄		五輪塔の空輪部分
45	11号溝	2	砥石	7.1/2.1/0.8	19.0				全面使用
45	遺構外	3	泥面子	2.0/2.4/0.7	3.0		明赤褐	1123	モチーフは雀

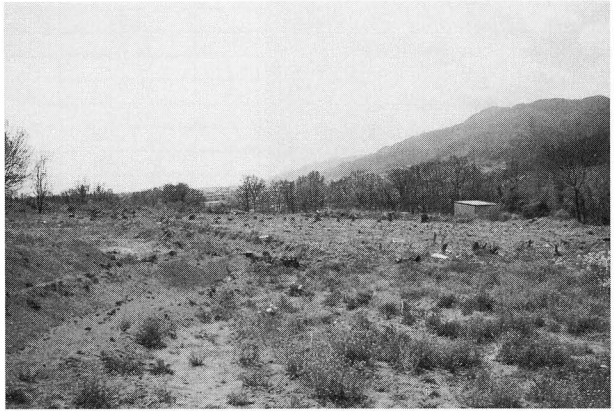
第10表　遺物観察表（金属製品）

図版	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚さcm	注記	備考
41	4号溝	1	煙管	銅	10.8	1.8		1272	吸い口
41	10号溝	2	煙管	銅	(8.1)	1.5		1045	雁首
41	14号溝	3	釘	鉄	(9.3)	0.9		639	
41	遺構外	4	釘	鉄	4.5	0.75			
41	14号溝	5	釘？	鉄	(5.4)	1.2			
41	遺構外	6	釘	鉄	(11.7)	1.2		1324	
41	10号溝	7	鍬？	鉄	(8.1)	11.4	1.0	1263	
41	11号溝	8	鎌？	鉄	7.5	12.6	1.5	1134	

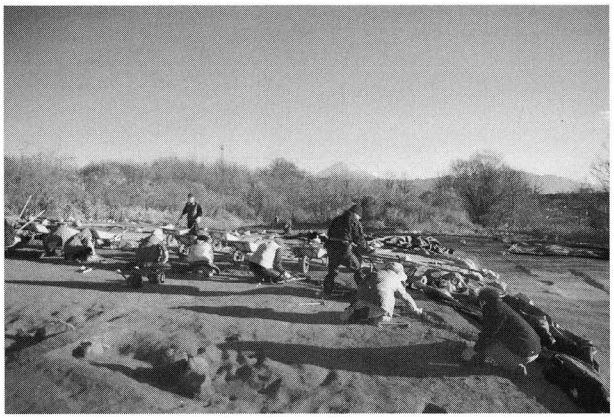


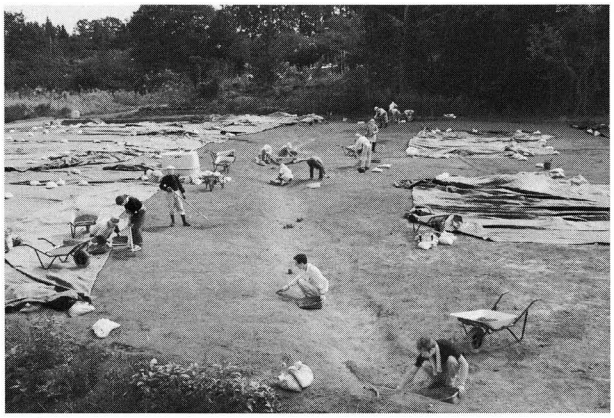
滝坂遺跡調査区全景

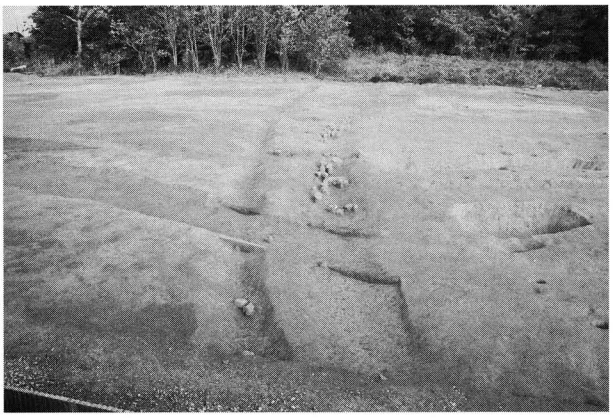
写真図版２


調査前状況

調査区と周辺


調査風景


調査風景


9（左）・10 号溝（右）

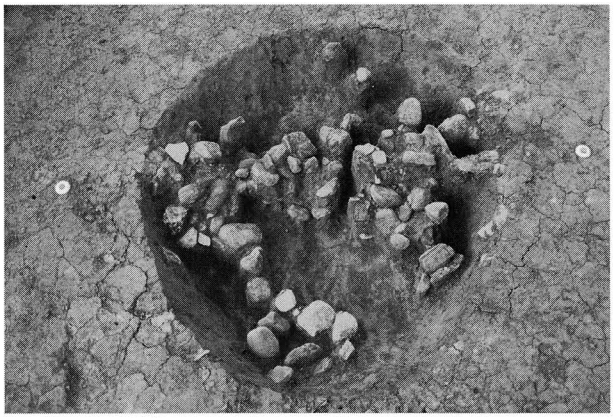
14 号溝（谷）

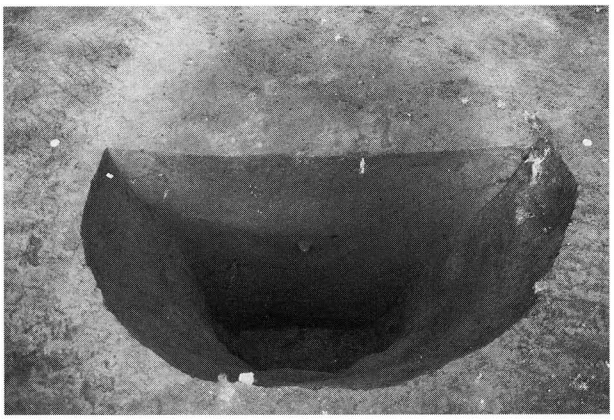
14 号溝遺物出土状況

14 溝深掘部分

2 号土坑出土炭化物

7 号土坑遺物出土状況


8 号土坑小礫検出状況


10 号土坑断面

10 号土坑下層炭化物出土状況

4 号土坑

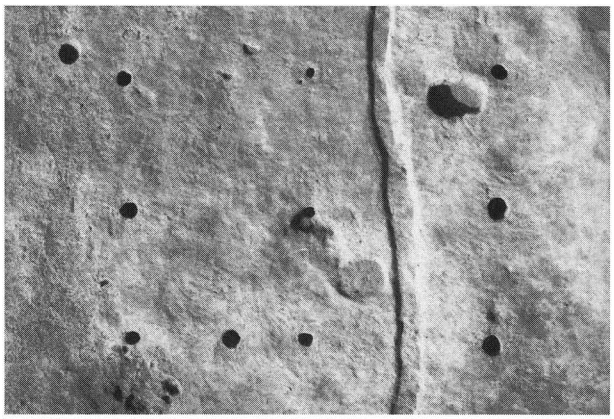
15 号土坑

1 号掘立柱建物

写真図版 4

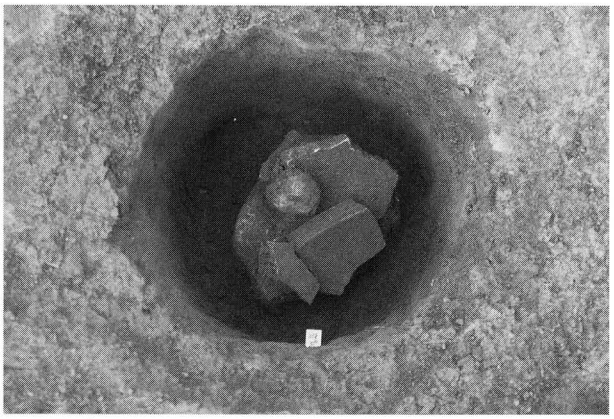
2 号掘立柱建物

3 号掘立柱建物


4 号掘立柱建物

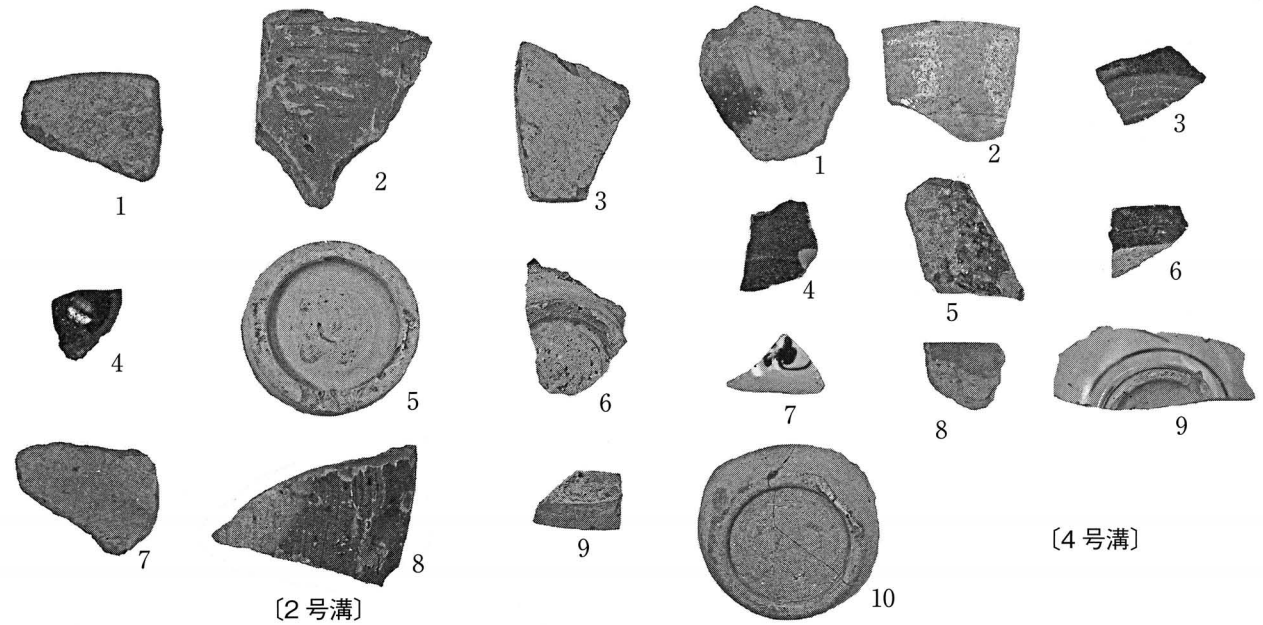
165 号ピット遺物出土状況

273 号ピット遺物出土状況


217 号ピット遺物出土状況

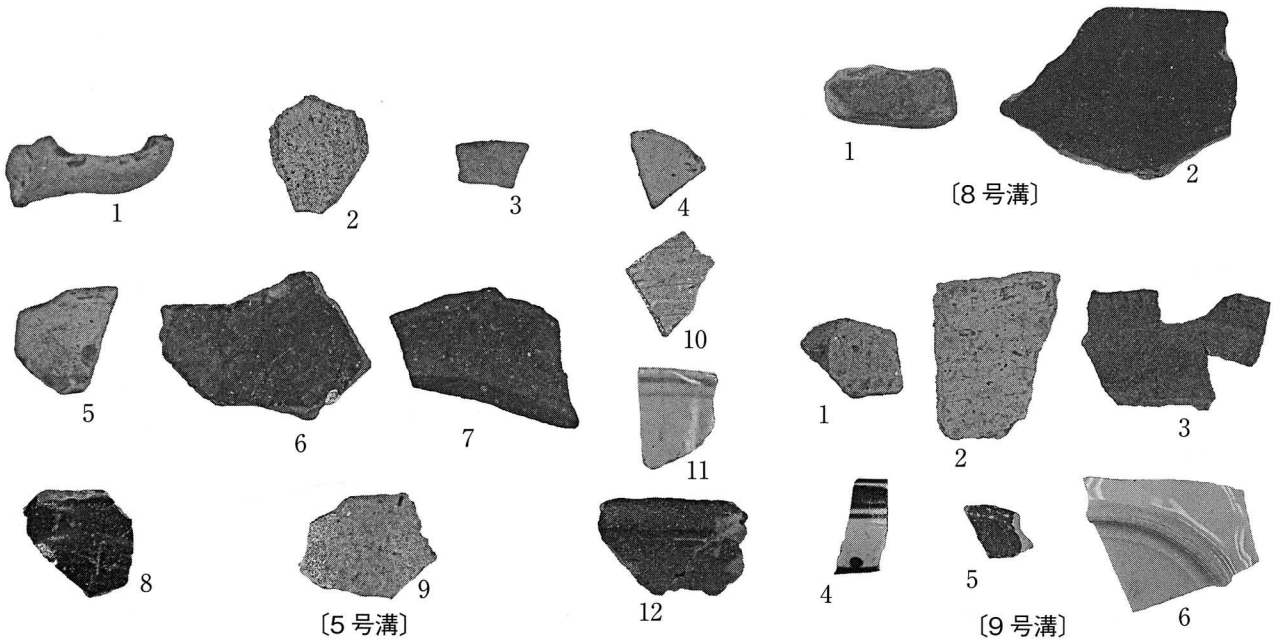
217 号ピット礎板石

発掘調査参加者



〔2 号溝〕

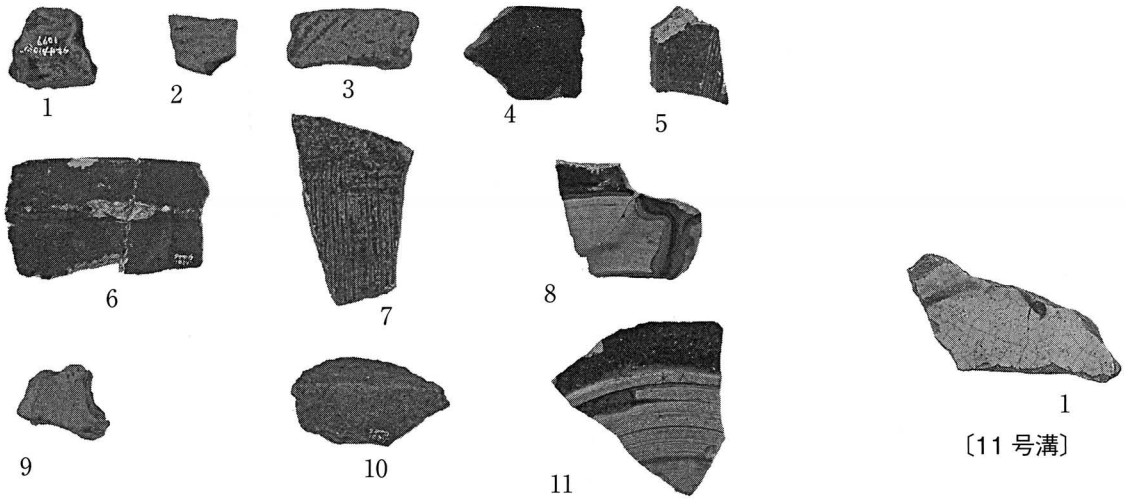
〔4 号溝〕



〔8 号溝〕

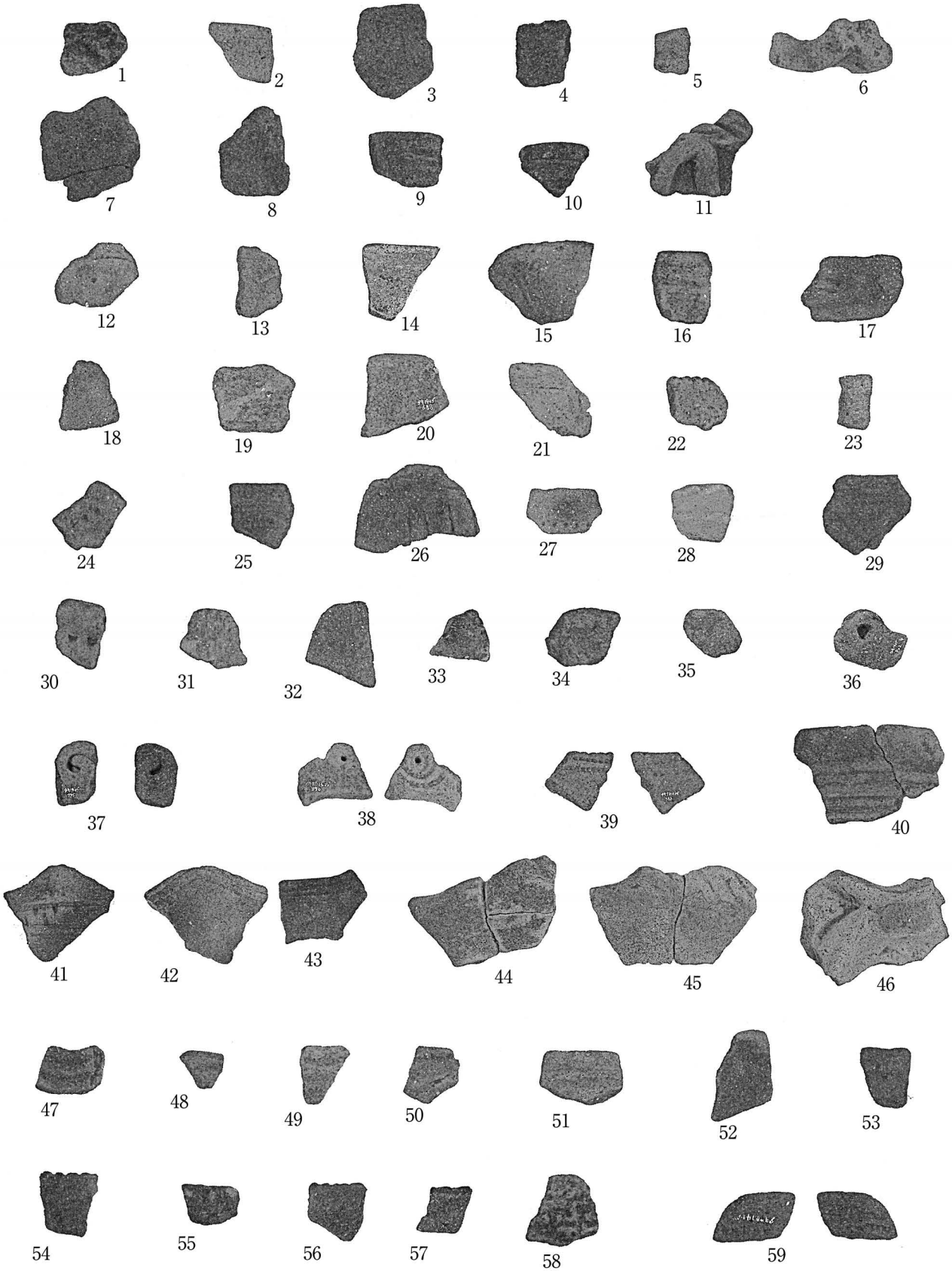
〔5 号溝〕

〔9 号溝〕

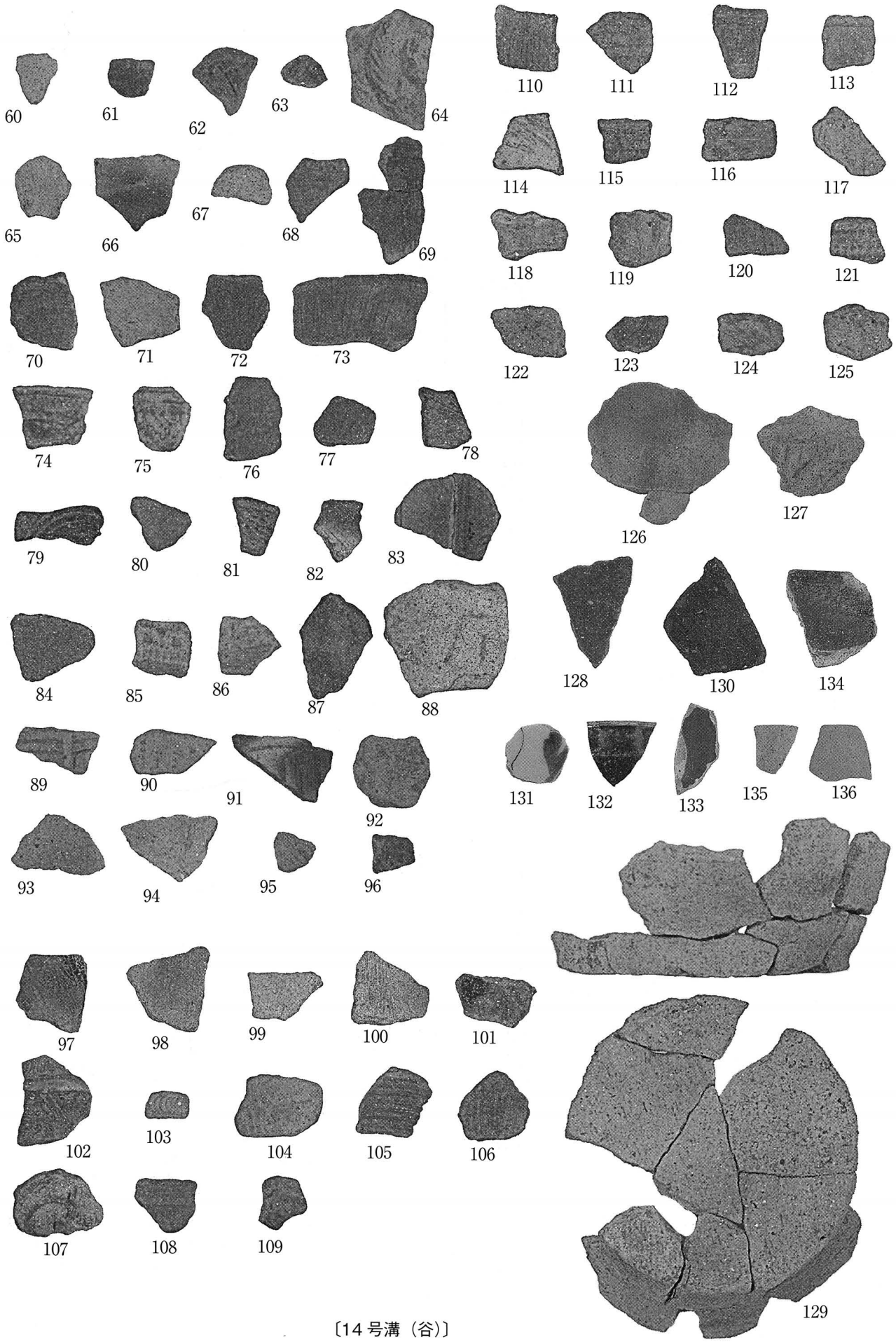


〔10 号溝〕

〔11 号溝〕

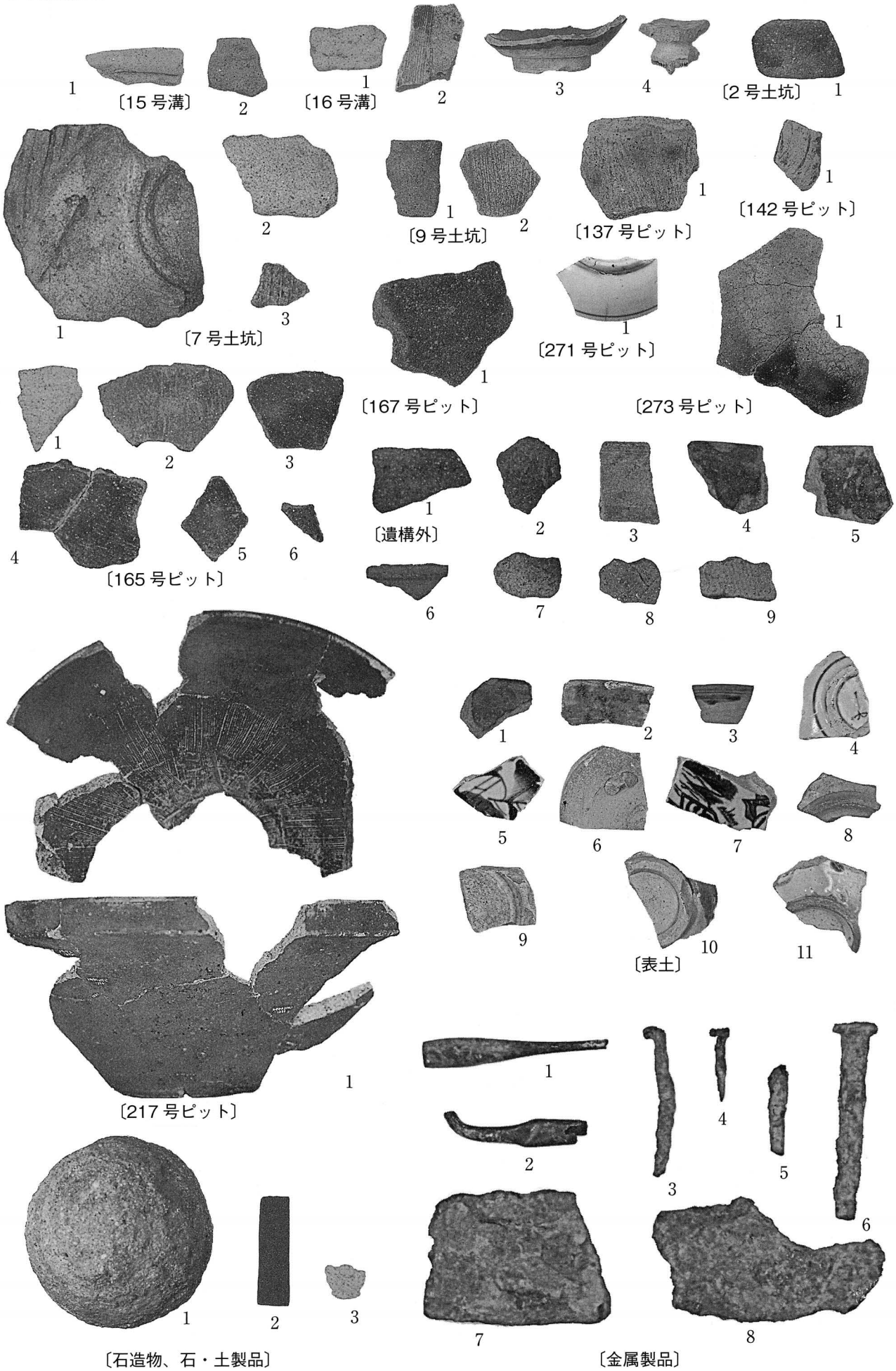

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

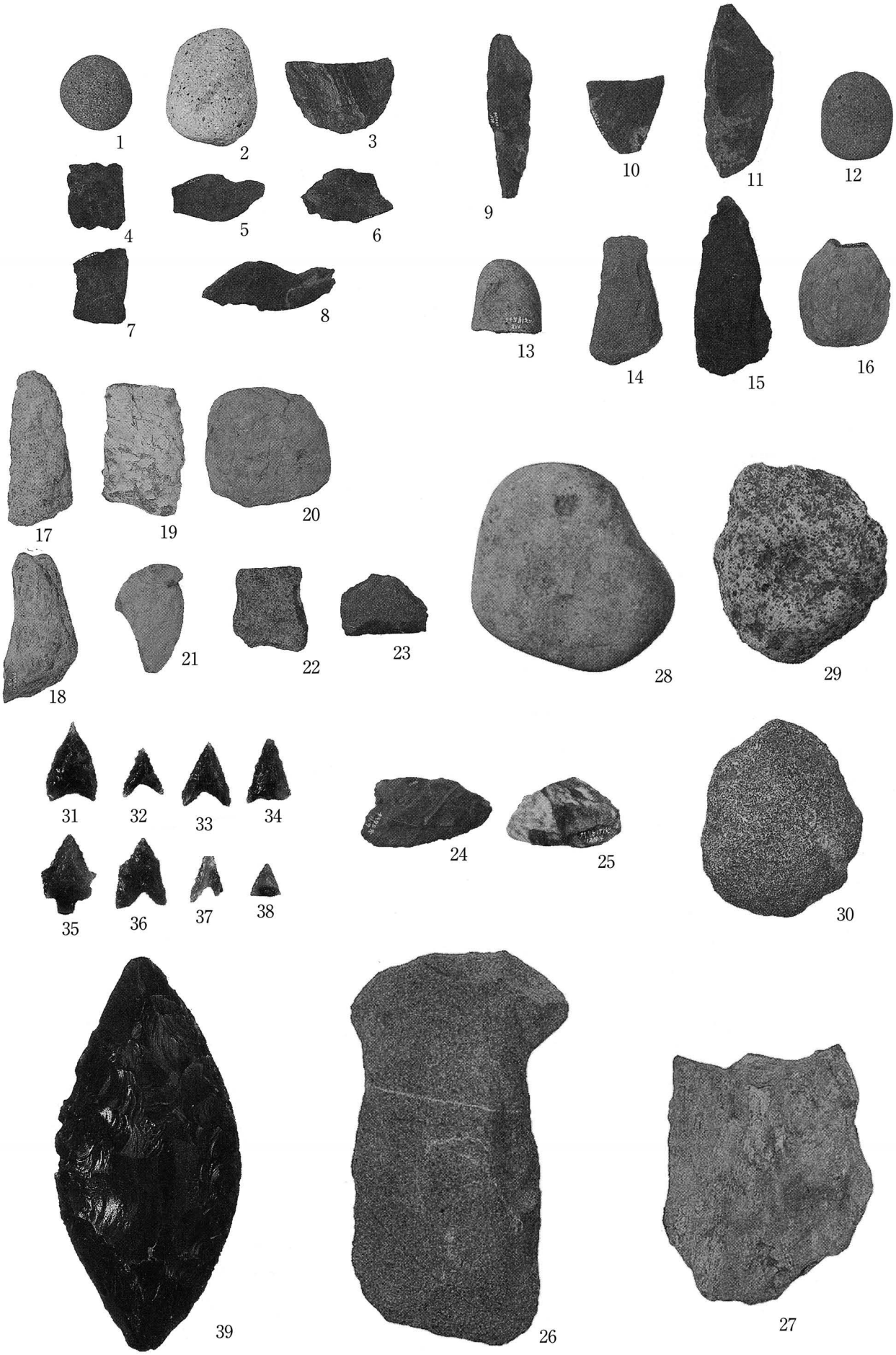
〔14 号溝（谷）〕


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136

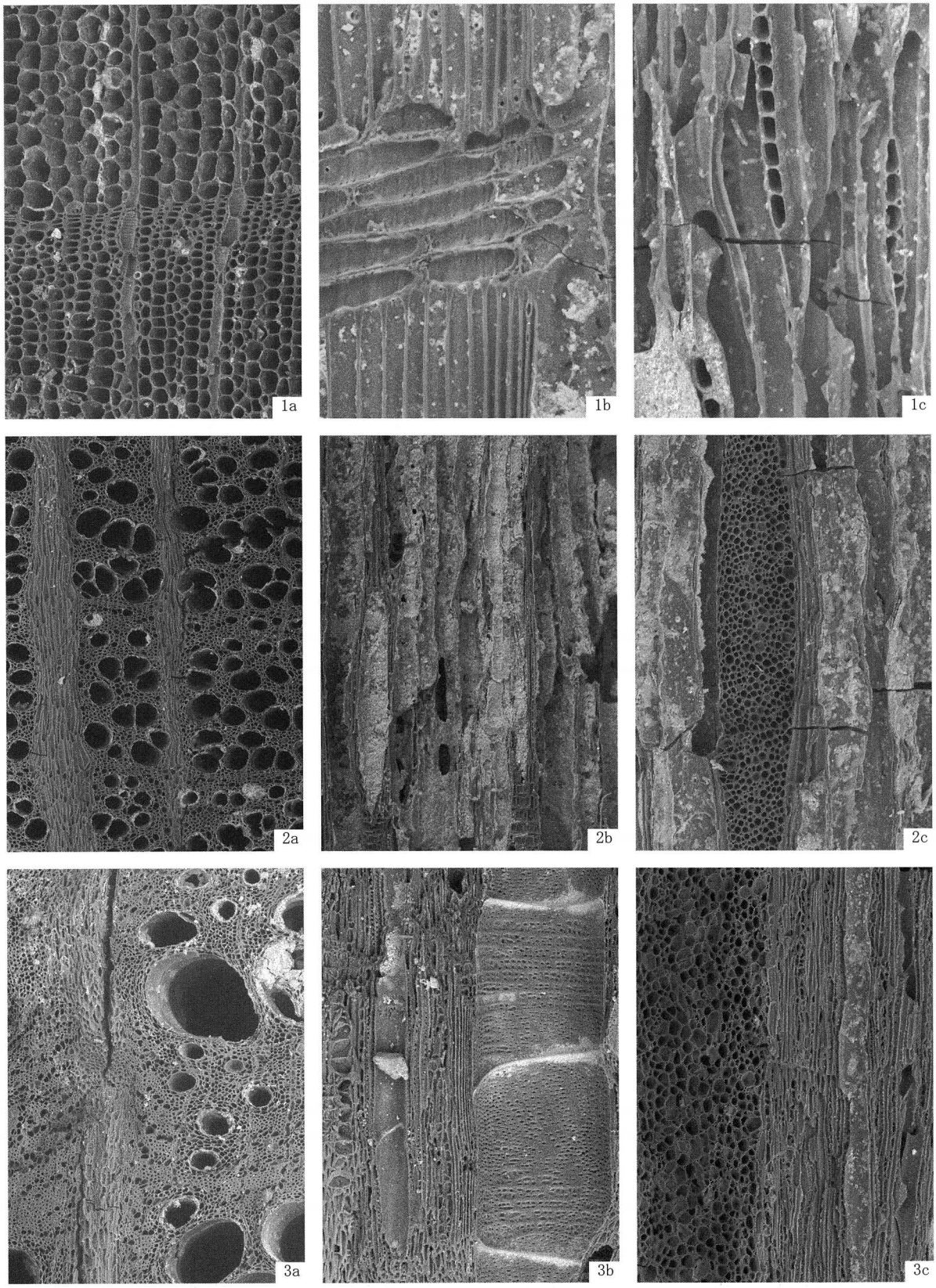
〔14 号溝（谷）〕

写真図版８


〔15 号溝〕
〔16 号溝〕
〔2 号土坑〕
〔7 号土坑〕
〔9 号土坑〕
〔137 号ピット〕
〔142 号ピット〕
〔271 号ピット〕
〔167 号ピット〕
〔273 号ピット〕
〔165 号ピット〕
〔遺構外〕
〔表土〕
〔217 号ピット〕
〔石造物、石・土製品〕
〔金属製品〕


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

〔石器〕



1. モミ属(200ピット;柱材?)
2. ブナ属(200ピット;柱材?)
3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2号土坑;No. 1172)
   a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:2-3a
200 μm:1a, 2-3b, c
100 μm:1b, c

報 告 書 抄 録

報告書概要

ふりがな	たきさかいせき
書名	滝坂遺跡
副書名	水神二丁目青坂地内 茅野北杜韮崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	入江俊行
発行者	韮崎市教育委員会、山梨県中北建設事務所、㈶山梨文化財研究所
編集機関	財団法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441
発行日	2009 年 3 月 25 日
所在地	山梨県韮崎市水神
地図名	25,000 分の 1 地形図 韮崎
位置	北緯 35 度 43 分 0 秒 東経 138 度 26 分 27 秒
標高	420m
市町村コード	19207
調査原因	道路建設
調査期間	2007 年 4 月 16 日～ 2008 年 1 月 31 日
調査面積	9,200 ㎡

遺跡概要

主な時代	旧石器・縄文・中世・近世
主な遺構	中世末～近世初頭頃の掘立柱建物、近世～近代の溝
主な遺物	旧石器・尖頭器、縄文中期～晩期・土器、中世～近世・陶磁器

滝坂遺跡

水神二丁目青坂地内

茅野北杜韮崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年(2009) 3月25日　発行

編　集　㈶山梨文化財研究所

〒406-0032　山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055-263-6441

発　行　韮崎市教育委員会・山梨県中北建設事務所・㈶山梨文化財研究所

印　刷　㈱帝京サービス